

土居輝雄遺稿集

土居輝雄

目次

序	2
第一章 秋田湾百考	5
第二章 鬼園戯れ唄	17
第三章 平成十六年十一月十三日土崎市民憲章推進協議会主催講演資料	45
土崎の歴史 ―建都四〇〇年に因んで―	45
第四章 鬼園晩年	63
第五章 直武の江戸カルチャーショック	77
第六章 老いの繰り言	85
第七章 続老いの繰り言	127
第八章 続々老いの繰り言	161
第九章 繰り言余録	191
第十章 未筆	227
跋	229

序

第一章 秋田湾百考

雨に煙る 檜山出島 七ツ森

雪の朝 研ぎ澄まされし 太平山

貝拾う 手形の如き 海岸線

暖流の ぐるり回って 外海へ

向浜 漂砂のなせる 業なるか

貝の沢 貝かそれとも 峡なりや

空海の 遺像漂着 笹岡や

荒巻は 川の流れか 海流か

飯島や 光風九十 九島なり

外海の 風荒れ狂う 荒屋村

大海の 小島はケヤキ ばかりなり

見渡せば 秋田平野は 内海か

北ながら 秋田平野は 暖かし

塩分の 出湯いでゆに通ふ 藩主かな

土崎は 向かひが浜の 異名なり

太古より ブナとケヤキの 対峙かな

湊では 本山町を 山と呼ぶ

この湾岸 古来満ち足り 事もなし

將軍野 湊衆には 山に見え

義宣は 古老を信じ 城移す

萩町がらぎまち 海辺川辺の 跡地なり

呑気さは 幾万年の 遣伝子ぞ

海辺より 山崎野崎 沼なるか

あら不思議 又も台風 針路変え

日本一 四季に恵まれ ユートピア

目長田の 住吉海を 睨み付け

天長の
大地震未曾有 秋田城

富士山に 磯崎様を 勧請す

元慶の 乱こそ罪は 京にあり

熊野社は 海を見据えて 札一番

日照は 黒沼赤沼 午前午後

秋田湾 海の諸神に 見守られ

富士山の^{ふじやま} 直下の川に 岩石や

富士山は 岩石小島 藤の花

八幡坂 上に象頭が^{ぞうず} おはします

浦城は 湾外なれど 穏やかなり

砂奴寄^{さぬき}とは 狭き砂山 浜昼顔

秋田湾 津軽^{とさ}十三湾 蜆貝

新城は 飯島入れて 入り海や

その昔 雄平仙は 海なりき

水口^{みなぐち}は 海へ流るる 水戸^{みなと}なり

曼珠沙華^{まんじゆしゃげ} 鳥居彼方に 夕陽落ち

太古より 秋田気象は 異常なり

一の門 前嶽上に 陽が昇り

男鹿太平 鳥海結ぶ 蚊帳^{かや}の内

彼岸花 夕波遙か 泣く鴟

三孤島 檜山砂奴寄^{さぬき} ケヤキ島

鮎鮎^{あゆあゆ}や 鰯鮎^{いさな}も 癌予防

秋田湾 癌の遺伝子 なかりけり

潟の春 競り上げ朗々 鯔背いなせかな

潟魚 絶えて幾年 骨粗こつぞし鬆よう

秋田潟 秋田美人の 在所かな

癌抑止 甘酒酒粕 潟魚

秋田湾 どこか似通ふ 富士筑波

秋田湾 秋田の潟と 言ふなるべし

秋田潟 外も大湾 出羽の海

遙かなり 古寺こじの梵鐘 シラヤ鍋

暖流の ぶつかる所 椿咲く

出生は 八郎秋田 同おない年

—消滅は秋田潟が太古、八郎潟が現代—

大湾は 鏡の如し 羽後の海

川口で 女子供の 蜆採りしじみ

大寒や チカ釣り佗わびし 秋田潟

早春の 河口冷たし シラヤ漁りよう

厄払ひ 女一人いちにん 向浜

富士山ふじやまの 富士は藤なり 人の言ふ

降る雪や 檜山遠く なりにけり

富士山の 観音跡の 線刻絵

富士の名は 富士信仰か 藤に不二

寒の入り 秋田中学 ホッケー部

地吹雪や 白一面の 潟の中

外堀を 我が物顔の ホッケー部

吹雪く夜は どぶろく飲んで 春を待つ

春を待つ 人の子熊の子 雀の子

大船は 大浜沖に 止まるなり

郭公の 声消え入りぬ 秋田潟

時化^{しけ}の海 松前船を 待ち焦がる

鶯の 声聞かばやと 逍遙す

十二階 まるで箱庭 秋田潟

けたたまし 雉の鳴く音ぞ 懐かしき

寒の入り 鳥海くつきり 明日は雨

春爛漫 幻想幽玄 秋田湾

湊には 廻船問屋 なかりけり

大船を 見るや付け舟 急ぎ漕ぐ

最上階 天橋立 檣山や

荷を移し 浜へぞ急ぐ 付け舟や

紅灯の 御蔵の町を 付け舟衆

大船に 群がり散るは 蜘蛛の如

付け舟も 消え去り湊 さびれけり

振り返り 渇の漁師は 日和見る

大谷地へ 変貌したる 秋田渇

山を見て 漁師は無事を 確かめる

渇と谷地 平野と変はる 秋田湾

大旦那 湊と共に 栄えたり

鯨去り 鰯不漁 出羽の海

付け舟の 多く抱えし 御蔵町

秋田には 名物何も なかりけり

大湿原 秋田人には 懐かし

湾上に 浮かぶ小島や ケヤキ島

太古より 北海交易 盛んなり

ケヤキ島 太平山と 対峙せり

渤海は 湊衆には 夢の国

湾上の ケヤキの島が 久保田城

蛸や 潟の頃にも 聞こえけむ

ケヤキ島 どこか似ている 彦根島

太古より 富士に紛ふ 鳥海や

彦根島 琵琶湖に浮かぶ 小島なり

鳥海は 秋田の潟と 一対なり

彦根島 鈴鹿の山と 対峙せり

佐和山も 浅井も琵琶湖 沿岸か

秋田湾 釧路湿原 連想す

蜆汁 吸って太古の 潟思ふ

秋田湾 朱鷺や白鳥 鶴乱舞

春を待つ シラヤの煮肴 今いづこ

出羽路に 大潟二つ あったとさ

その名八郎 あとは白浪

東北に アイヌの言葉 なかりけり

湾岸に 縄文遺跡 屹度あり

別や内 東北最古の 言葉なり 例 仁別、山内

湾の辰巳に さくらあり 桜に非ず 農神なり

東北弁 蝦夷地に渡って 逆輸入

湾の辰巳の 地蔵田 古代遺跡の 発掘さる

桜村 神明社あり 前身は

八幡伊勢堂 やはた さらに前なり
―つまり農神。例えば、さくら。―

浪の音 鴟の声を 背に聞いて

この山道は 里へ行く道

地藏田 岬に立てば 春の海

鴟群れ飛ぶ 今朝の入り舟

第二章

鬼園戲札唄

家康と 北政所 深い仲 関ヶ原役えき 斯くして勝つか

義堯は 諒鏡院に 近づきて 最後の藩主 斯くして成るか

夫逝き 歌仙絵巻に 魅せられて 土佐へ帰らず 秋田に残る

寧々富子 政子加えて 三悪女 実家守りし 賢女かな

三悪女 夫裏切り 乱起こす 承久応仁 関ヶ原

歴史とは 時点視点で 価値変はる 役者の如き 根無し浮き草

春を待つ 人の子熊の子 雀の子 大人は毎夜 酒をしたたか

慶喜^{よしのぶ}は 幕府倒せし 愚者なりや 近代日本の 恩人なりや

世はは明治 母親違いの 子沢山 徳川慶喜^{けいき} 佐竹義堯^{よしなか}

年賀の挨拶 欠礼致し 寒中御見舞い 申し上げ

檣山出島 どこか似ている 天橋立 ビルの窓

だれの名付けし 征韓論か 時の政府の 西郷降ろし

生涯一度の この鳥海よ こいつあめつたに 死なれぬわい

筆舌に 尽くし難きは あの美景 二度と逢へまい 永久とほの恋人

肘鉄ひじてつは 拳こぶしと同じ 白鳳よ 知らざあ言つて 聞かせあしようか

柔道も 相撲も今や 国際化 一つ忘れて いあしませんか

文化を壊し 国土を汚染 そんな奴らは 帰けえつちまえ

モーツァルト ピアノコンチェル 二十番 俺が末期まつごの BGMに

日馬富士 土俵上でも 怪我をさせ 断髪式は 遠慮すべきだ

慶長の 窪田国絵図 青森の 郷土史館で 見つけたり

熊川^{うんちん}は いずこにありや 鹿兒島の 黎明館で 発見す

冬の晴れ間の 鳥海山は 日の本一の 美形なり

しがみ付く 臨終間近の パソコンに 今日も無事かと ほっと一息

種々の公式 分からぬままに 確定申告 書き終へり

義宣は 武將にあらず 文將か あの肅清に 澄まし顔なり

義重は 花も実もある 武將なり 子供を思ひ まさに元就

勝ちに味方は 戦国論理 負けに味方は 美談なり

嶋津義弘 敵中突破 もしや家康 討ち果たすべく

川中島 濃霧のうちは 五里霧中 敵か味方か 勝つか負けるか

西郷が 鎮めた荒れ地 木戸大久保が 整地して それを伊藤が 実らせた

坂本は 大政奉還 甘く見た 幕吏ばくりは 憤怒し 慶喜けいきを狙う

わが庵は 秋田のたつみ しかぞ住む 世を二ツ屋と 人はいふなり

―しかは羚羊。駅へ徒歩十五分の辺鄙にあらず―

―確定申告を届け出て―

届けたり ああ届けたり 届けたり それにつけても 金の欲しさよ

栃しんの心 仁王しんの如き たくましき

栃の心 日本の心 わきまへり

何一つ 日本の心 なき白鵬

同情も これつきりかや 稀勢の里

貴笑ふ 阿修羅の如き 貴笑ふ 双子の弟子の 昇進のみや

英と愛えいあい その関係は 日と朝にちあさ 洋の東西 よう似たるかな

—英はイングランド、愛はアイルランド、日は日本、朝は南北朝鮮—

平成の 阿修羅落ちたり 理事選挙 柳の下の 泥鰻どじょう通ぜず

角界も 政府与党に 似たるかな

千代が逝き 貴が落ちてても 相撲道 そうやすやすと 消ゆるまじ

音楽室 鬘と自前 古典ロマン派 肖像画

久保田城址に 初代藩主の 銅像欲しや 春の宴

わが国に 王政復古 三度あり 明治維新に 他は白浪ほか

すめらぎの 国に革命 なかりけり 誤解受くるは 覇者の交代

食ひ倒れ 着倒れするは 秋田人 ひやみっこきの 新しがり屋

そう言へば 秋田国選 保守革新 五分と五分とが 長く続けり

そう言へば 昌益篤胤 信淵も 種蒔く人や 綴り方 多喜二もみんな 革新なり

佐竹義堯 二度目の銅像 どこか似ている 八代目

小田野直武 江戸へ上って カルチャーショック なかりけり

源内は 江戸カルチャーに 同化せり

源内の 生まれ代はりが 写楽なり 秋田では 鯨のことを カドと言ふ カツの訛で 大漁の意味

――鯉は大漁が由来。勝浦、桂浜、鹿渡等。――

川反は 佐竹独自の 略字なり

――「反」の由来、「端」や「畔」と同音・最少字画数――

紫波^しの渡^ばしは 近世以前 北国道の 経路なり

— 紫波は瑞浪、つまり穏やかな流れ —

新川の 渡しは近世 北国街道 経路なり

美人には 小面^{こおもて}般若 二つあり 吉永小百合 岸恵子

やっぱりそうか 森友疑惑 安倍晋三の 命取り

三^みは御^みなり 三浦に三船 三吉三田

訓読みで 読めない文字は ヨシと読む 当たらなくても 佳^{ずい}しは瑞^{しょう}祥

徳川慶喜^{けいき} 愚者の振りして 晩年過ごし 日本の危機を 救へしか

―さてこそ佐竹義堯の 隠居の理由 分からざりけれ―

トランプは 信長そっくり だが待てよ 愚者か賢者か 歴史が決める

―歴史評価は結果待ち。「終わり良ければ全て良し」の譬え―

無宗教 寛容の 証拠なり

―誇るべき倭人の知恵と心なり。神仏習合もその現れ―

改ざんが 斯くも容易に されるとは 史実不信が 募るだけ

世の中で 信じうるもの 自然のみ

―自然は所謂神、宗教を越えたもの。―

トランプは 政治素人 無知なるに それを逆手に 天才自認

天才と 自認誇示する トランプは 貿易摩擦 敢えて仕掛ける

狂気にも 似たるトランプ^{信長} 恐怖かな 昔のヒラリー^{公方} 今は懐かし

トランプは 信長よりは 能天気 その言動は 猪突猛進

—能天気「お天気屋、気分の変わりやすい人、脳天気とも」—

稚氣愛すべし トランプ語録 そんな同情 許すまじ

日本は スイスの如き 国ならむ 礼あり美ある 国ならむ

核廃絶に 戦争放棄 これぞまさしく 世界のまほろば

炎と怒り 読んでたまげた トランプ実像 危険極まる 地球規模

あな怖ろしや トランプ政權 こいつあちよつとじゃ 済まされめえ

トランプの いい加減さは 超恐怖 北鮮などは 数に入らず

娘義太夫 声張り上げて 二の腕出せば どうするどうする

娘義太夫 寄席の掛け持ち 人力車 それを書生が 追っかける

漱石も 娘義太夫 入れ込んだ

志賀直哉 娘義太夫 惚れ込んで 文学取るか 義太夫か

女優監督 田中絹代は 娘義太夫 出身なり

日本のテナー 藤原義江 義太夫節が 出発点

映画女優の 高峰三枝子 筑前琵琶の 名手なり

夜目遠目 傘の内なり 最近は 一つ加えて マスクの美人

五能線 北能代駅 その辺り 安倍比羅夫の 上陸地点

陸奥安倍氏 その功勞に 比羅夫より 安倍氏拝領 その後栄える

淳城を 訓読みすれば ぬしろなり

前九年 阿倍あへのむねとう宗任 島流し その末裔まつえいは 安倍の晋三

特攻隊 生還すれば 国賊か 戦果を挙げて 帰って来ても

諸大名 借金ちらに 官軍へ

徳川は 貸し倒れなり ああ維新

近世佐竹は 相馬に始まり 相馬に終はる 至言とな

人一代 終はりよければ すべてよし 家末代 終はりよいこと なかりけり

四大事件に 無力を感じ 佐竹義堯 隠居せり

隠居義堯 華族と聞いて 義脩よしなお廃嫡 復帰せり

秋田に残る 常陸の言葉 んだんだすっぱね もつとある

おめはんは 湊に残る 京言葉

キヤベツをば かいべつと言ふ 道言葉

ば^{落の}つけをば ばっかいと呼ぶ 笑い種

義堯は 部屋住み嫌ひ 出戻らず

歌仙絵巻の 虜^{とりこ}となりて 諒鏡院は 出戻らず

土佐は勤皇 相馬は佐幕 二律背反 苦渋なり

中立は 敵と見なされ 苦しかり 末代までも 信用されず

*参考―秋田では「カイ」を「キヤ・ケ」と訛る―

日和見主義は 筒井順慶 洞ヶ峠の 譬へあり

—金正恩のノーベル平和賞瞭所感—

ノーベル賞は 甘からず 不穩分子を 見透かして 飴と鞭との 抑止力

—鬼園願望—

幕政は 天子に代わり 執る仕事 ただし將軍 世襲誤り

明治維新と ロシア革命 その違い 天皇統治下 政權交替 皇帝殺逆しきやぐ 政權奪取

—維新と革命、共通点は数多あれど、唯一の違いは以上なり。なお、革命の遂行上、人道主義は革命側に邪魔な存在となるだろう。—

日本に 革命等はなかりけり

壬申の 乱革命に 非ざらん

革命に 人道主義は なかりけり

大隈は 東家とうけの株を 松浦に

侯爵を 間違ひ承知 候哉や

支那人は ジッポンと呼ぶ 日本ひのもとを

チャイナをば ラテン風なら シナと呼ぶ

これよりは「鬼園戯れ唄」のみの行脚せん 風雅な道は敢へて通らじ

— ジャパンの由来 —

— 支那は別称に非ず —

小野小町の 前向き似せ絵 希^け有^うな絵残す 杜^{やし}かな

大相撲 みごとな受け身 まさに美技

負け方も 芸術的な 大相撲

戦国は 挟み将棋に 打ち興じ 猫も杓子も 遠交近攻

鶯の声に聞き入る清涼寺 西南彼方雪の鳥海

出羽は由利亀田の殿のお国入り 橋の袂の弥助蕎麦かな

—清涼寺境内より遙か西馬音内を眺めて—

—お茶橋由来—

橋の中央床几を置いて お茶を飲みつつ城眺む

—故に御茶屋橋は本来誤りなり—

こわい ぬくいは 大阪弁よ 秋田は訛り こえ ぬぎに

馬鹿は江戸弁 阿呆は京都 江戸はうるさい 京都やかまし

安倍の外交 軽佻浮薄 昨日アメリカ 今日ロシア

一気呵成の 安倍答弁は 少し間を置き 考ふべし

大雨に 負けじと蛙かわず 鳴き出せり

記録破りの 豪雨襲来 池の金魚も 姿消す

避難勧告 上新城に 仁井田牛島 広面

この大荒れに 猫の急病 老飼い主の 大童おおわらわ

奥羽武士 江戸カルチャーに ショック受け

佐竹武士 ブーブー弁は 重荷かな

直武に カルチャーショック なかりけり 絵筆一本 己が道行く

大相撲 栃ノ心には 逸ノ城 がっぷり四つ まさに圧巻

アメフトで 加害者よくぞ 語りける

宮川の 論旨整然 恐らくは 父親側の 目を通しけむ

あの事件 責任我と 偽ポーズ よくもしゃあしゃあ 言へるものかな

潔^{いさぎよ}い ポーズとばかり 思ひきや

世の人は 偽のポーズと 見抜いたり

得点を これは無理かな 宮川君 これを示せば すべて収まる

得点関与の プレーをすれば これは至難か 惜しむらく

初めより 宮川潰し ありきなり これじゃ当人 どうにもならず

信長は 助言意見を 耳にせず 言ひし者には 罰を加へり

世の男おの子らよ 美人を前に 美人と言へば セクハラじゃ

白鳳と 栃ノ心との 大相撲 世紀に残る 名勝負かな

似タルヲ貴ブ 曙山の画論 このリアリズム 奥があり

田沼意次 曙山の奥を 見抜き驚愕 入り込めり

次代を背負ふ 政治家なりと 田沼惚れ込み 父子の如ごと

三料と 田沼頬笑む 世は安永

重豪しげひでに 曙山おきとも意知 三料さんりょうなり

三料は 蘭癖らんぺき侯と 名を馳せり

舞妓は京都 江戸は半玉 奥の秋田は お酌なり

潔^{いさぎよ}し 命縮めし この美学 有名無名 誠^{まこと}惜しかり

第三章

土崎の歴史

— 建都四〇〇年に因んで —

平成十六年十一月十三日土崎市民憲章推進協議会主催講演資料

一、上国家安東氏の湊進出

安倍貞任の遺児が津輕に逃れ鎌倉時代には北条氏得宗家に仕えてその所領の代官を勤め蝦夷管領ともなる。鎌倉末期には上国・下国の両家に分かれ上国家は分家、下国家が本家で最終的には十三湊を本拠地とした。

応永元（一三九四）年とも二年とも、いずれ応永の初めに上国家の西関（青森県深浦町轟木）城主安東鹿季が秋田へ進出を開始する。これは無法な侵略ではない。おそらく幕府は弱体な秋田の地頭では税務が滞りこれに代わるべき者を安東氏の一族に期待したのであろう。

その経路は、西関城を発って男鹿半島の染川城（男鹿市北浦字相川）に至る。その後、半島を横断して脇本城（男鹿市脇本）に進出した。

そして、ついに秋田湊の秋田城介顕任を攻めて滅ぼし秋田城に拠って自ら秋田城介と称した。

この秋田城（湊城）とは旧秋田城址の焼山一帯であろう。後世の湊城とは居館に対する要害の關係になる。

二、下国家安東氏の檜山進出

中世、津輕の十三湊に大津波が襲来して安東氏居城をはじめ人家を一呑みにした。その跡は荒廢の地となった。安東氏はこのため松前へ移住する。

実は、嘉吉三（一四四三）年、南部勢による十三湊陥落を安東氏が大津波という自然災害に置き換えたのである。安東氏は南部氏に追放されたことを認められなかったものであろう。これが伝説化し、まことしやかに後世に伝わることとなった。

南部氏の十三湊攻めは永享九（一四三七）年から始まり、先ず平城居館の福島城を落とす、六年間の攻防戦の結果、山城要害の唐川城（青森県北津軽郡市浦村）を奪取した。

だから、伝説の大津波襲来はこの六年間だと思えばよい。これが下国家安東氏でやがて松前から檜山へ進出して檜山安東氏となる。

三、檜山家の湊進出

天文十三（一五四四）年六月二十九日、湊家定季の養子友季が十六歳で早世した。それで檜山家舜季の二男で定季女の子に当たる春季を後嗣としたがこの子も天文十五年に十六歳で早世した。定季は後嗣のないまま天文二十年九月十三日に死去した。かくて湊家は絶えた形となった。この後嗣

を決めるについて檜山家と湊家との間に対立があった。檜山側は舜季の三男茂季を、湊側は湊家の一族を継がせようとしたのである。だが力に勝る檜山側に押し切られ、茂季が後継者となって湊城に入った。

湊家の家臣は言うまでもなく不平不満であった。ところが、茂季が湊城主になって間もなく、湊家の旧家臣である豊島休心、下刈右京、川尻中務らが徒党を組んで湊城の茂季を急襲した。茂季は何もできず檜山の兄愛季に救援を求めた。愛季は直ちに反乱者を破り茂季を救った。この後、愛季は湊家家臣の反対を押し切って湊城に入り茂季を補佐したのである。茂季は天正七（一五七九）年六月二十三日死去し後を嫡男道季が継いだ。

天正十年、豊島城主畠山玄蕃が庄内の武藤氏と結んだため安東愛季に討たれ、その後へ道季が湊

城から移された。愛季が湊城主となったのである。かくして湊家と檜山家が合併統一という形になった。道季は愛季に領土も湊家も奪われたことを大いに遺恨と思った。また、湊家の旧臣達も愛季の取った処置に憤激措く能わざるをえなかった。

四、安東海賊

海賊とは、海上通行の船を警護したり、海難救助をしたり、入港の船を案内したり、時には利害の相反する船を襲ったりする海の武力集団である。また、船合戦が強くなければ海賊とは呼ばれなかった。要するに海の強者のみが海賊と呼ばれたのであって畏敬の意味すらある。安東愛季の頃がその名に相応しかった。

したがって、時にはこんなこともあった。

秋田沖を往来する船のなかに湊を素通りして行くのがあった。津料（入港税）の支払いを渋っているのである。また、この入港に不便な砂の港で時を潰すのを惜しむのも理由の一つであった。ならば、沖を通る船に課税すべしと男鹿の島影に待ち構え、「檜扇に真羽」の旗を押し立て通行税を取り立てた。拒まれると夜間にその船を襲って金品を巻き上げた。

五、安東実季の関ヶ原

慶長四（一五九九）年八月、安東実季は豊臣秀吉没後の一段落のついたところで下国している。

同年十一月二十日、実季が上杉の動静を徳川家康に内報したことで家康から札状が届いている。

慶長五（一六〇〇）年四月十三日、徳川家康から上杉景勝へ詰問使が派遣された。景勝は拒否し徹底抗戦の構えを示した。

同年五月七日、最上義光から由利の諸豪族へ家康に味方するよう書簡があつた。

同年五月中旬 実季は大坂に到着する。

同年六月二日、家康は大坂城に諸大名を召集して上杉討伐の部署を発表する。実季は最上軍応援を命ぜらる。

同年七月二日、家康、江戸城着。

実季に七月七日付で家康から書状が届いている。上杉攻撃は八月二十一日に決まったから最上義光の陣に加わるようにとの内容である。

同年七月十七日、前田・増田・長束の五奉行の三人は石田三成の指図に従い、連署で檄文と家康を弾劾する文を諸大名に公布した。そして西軍に

よる伏見城攻撃が七月十九日の夕刻から開始された。

家康は予定通り二十一日に江戸城を出発し伏見城攻撃を知ったのは下野小山に到着した七月二十四日である。この頃、秋田の安東家では軍議を催し家中の意見が二つに分かれ白熱化していた。結局、家康命令に従って出陣はするものの、実季は病氣と偽って出陣せず、総大将不在の安東軍は上杉と交戦する前に戻って来て大森城と篠子城をゆつくり攻めながら天下の形勢を見るということに落ち着いた。

七月二十七日付、家康重臣榊原康政から実季宛の手紙があつた。八月七日の到着である。上方の動静と小山会議の内容であつた。

八月一日、伏見城陥落。

八月四日、家康、小山出発。

八月上旬、伊達と上杉が和睦して最上が不利となり、また、南部領内では一揆が起こったという風評が立ち、既に家康の命令で山形に集まっていた北奥羽の諸将は不安を抱きそれぞれ帰国した。諸将とは、南部利直、安東実季（代理）、戸沢政盛、本堂源七、六郷政乗、仁賀保勝俊、赤尾津孫二郎その他、打越・滝沢・石沢・小笠原・芹田・根井・湯保・鮎川・子吉・小介川らである。

実季は仮病ながら院内まで出張していたが諸将が帰国したのでは自分も残る必要はなくなり、山形派遣隊を院内で待つて共に秋田湊城へ帰った。彼はこのことを榊原へ八月八日付の書状で報告している。

この風評を江戸城で耳にした家康は大台戦を前にして諸将の動揺を鎮めることこそ第一と思つて八月二十一日付の実季宛の書状には山形からの帰

陣を了承している。翌二十二日付の榊原からの書状も同様であつた。

九月一日、家康が江戸城を出発して西上した。

九月十二日、上杉勢が最上を攻撃開始した。しかし安東が立たない。安東が立たなければ小豪族の共同体である由利諸将の去就も定まらない。それを形勢観望している平鹿郡の小野寺も大森城がはつきりと上杉方になっているのに本家はなかなか腰を上げない。

九月十五日、関ヶ原合戦、西軍大敗する。

九月二十一日、実季は関ヶ原の勝敗を逸速く知つた。間髪を入れず安東軍は由利郡の篠子へ進軍し実季は山本郡（後の仙北郡）の角間川で篠子城陥落を待ち、二手から平鹿郡の大森城を攻めることとした。

安東実季は九月二十七日に榊原らへ出羽の様子

を報告した。同時にこの日、最上へ庄内出陣を申し入れた。上杉が関ヶ原の勝敗を知ったのは九月二十九日、最上は三十日だった。

最上から実季に庄内より大森か西馬音内の小野寺勢を攻めてもらいたい旨の十月八日付の書状が届いた。

この頃、篠子城が陥落している。安東軍は予定どおりそのまま大森城へ向かった。実季本隊も角間川を発った。ただし実季は上洛準備のため湊へ帰った。大森城の陥落したのは十月二十四日である。

慶長七（一六〇二）年二月下旬、実季は家康からの上洛催促により軍兵百人を従えて堂々と湊を出発した。同年五月八日、突如、家康の上使が安東邸に来訪、常陸国宍戸へ国替えを命ぜられた。同年八月、実季は出羽秋田に帰国することなく

伏見から直接常州宍戸へ赴いた。

六、安東実季の宍戸国替え

慶長七（一六〇二）年五月八日、突如、徳川家康の上使が伏見城下の安東邸に来訪した。上使は平伏する実季に向かって家康からの書状を読み上げた。

「安東実季所領羽州秋田三郡の地尽く没収せられ実季に常州に於て替地を賜ふべし 慶長七年五月八日 家康 秋田藤太郎殿」

実季はおもむろに頭を上げた。

「とかくの意趣もこれなく、万事上意に従い奉る。」

実季はこう返答して再び平伏した。

同日同刻に出羽の由利・山北諸氏も替地を申し

渡された。すなわち、六郷氏は常州府中（石岡市）一万石、戸沢氏は常州手綱（高萩市）四万五千石、本堂氏は常州志筑（千代田村）八千五百石、仁賀保氏は常州武田（北浦村）五千石、打越氏は常州新宮（麻生町）三千石である。なお、その他の由利衆はそのまま最上氏に組み入れられることとなった。常州の佐竹氏は羽州秋田三郡と山北三郡へ替地となった。

安東実季の替地は常州茨城郡の内、七十八ヶ村五万石だった。中心は宍戸庄である。宍戸は水戸よりやや西南の小丘に囲まれた小さな盆地である。果たして実収高五万石あるだろうか。それに比べて秋田三郡は表高は五万二千石で宍戸とほぼ同じだが、太閤蔵入地が二万六千石あって計七万八千石である。それに杉山や金山がある。だいいち海があった。あの海がなくなること

は実入りも名誉も剥奪されたようなものだ。

実季は秋田へ寄ることを許されず伏見からそのまま常陸へ下ることを命ぜられた。その時期は八月上旬であろうとされた。

実季は側近の重臣を急ぎ国許へ帰し替地所務を滞りなく済ますことを命じた。その主なものを取り上げてみると次のようなものである。城にある兵具・兵糧には手を触れぬこと、年貢の前取りは致さぬこと、菩提寺その他ゆかりの寺の随従は許さぬこと、家臣はできるだけ秋田に残って新領主に仕官するか百姓・町人になること、等である。

いちばんの難題は家臣随従制限であった。当時、侍分限帳によれば家臣数は上級武士百五十三人、下級武士百四十九人、計三百二人、足軽百二十七人、合計四百二十九人。この中で実際に宍戸へ行った家来数は百一人といわれている。つまり、

二十三・五パーセントの家臣が宍戸へ行ったが、七十六・五パーセントは秋田に残ったわけである。

この人員削減は近世大名として当然とるべき行政改革であったが、中世以来の同地域同領主はそのしがらみから実行はなかなか至難な業であった。そういう点では替地をさせられた大名はその機会に実行ができたわけである。安東氏はまさしくそうであった。特に古い体質の濃い奥羽の武士間では近世体制への切り替えが容易にできず空中分解の様相を孕んでいた。こんな時に替地を命ぜられたのは天祐であったかもしれない。

七、佐竹義宣の秋田入り

須賀川を出発した義宣本隊は奥州道を北上した。郡山・本宮・二本松・福島・桑折・白石を経

て宮で笹谷道に入り永野・猿鼻・四方峠を過ぎて前川を渡り、川崎で泊まった時は朝夕に寒さを感じた。だが標高九〇〇メートルの山上は錦織りなす紅葉の真つ盛りであった。翌日、有耶無耶の関で有名な笹谷峠を越えて出羽に入った。丁度、須賀川を発ってから五日目だった。山形に入る所で最上義光から使者が派遣されて来た。山形城にぜひ立ち寄って一宿してほしいということだった。義宣は「我等は先を急がねばならぬゆえ折角の御親切、かたじけないがお待ち出来ぬ次第にござる」と丁重に返答して遣った。

だが義光は家臣百騎ほどを従えて出迎えに来ていた。義宣は初め、これまで首尾よく下って来たが今ここで義光に討たれるのかと思った。しかもそれは義光一人の意志ではなく家康からの命令であろう、このような出羽の地で始末しておいて何

食わぬ顔で佐竹義宣不慮の死と片付けられるのであろうと観念した。

しかし、義光は家来を後ろに残してただ一人下馬して進み出て来たので、義宣も下馬して一人前へ出て行つた。両方の供の者達も下馬した。

義宣は「わしは北国回りを言い触らして来たのだが漏れたか。漏れたとすれば江戸滞在の時か。江戸ではだいぶ注意したのだが。秀忠様とその側近しか分からぬはずだ。あとは弟達だけだ。もしや政宗が秀忠様より聞いたやもしれぬ。あいつが最上に告げに寄越したのだろう」と政宗に立腹した。

義宣一行は義光から昼の馳走を受けて山形を去り、その晩は天童に一宿した。

天童から楯岡・大石田を経て舟形で泊まり、それより新庄を通つて金山に向かった。新庄辺りか

ら鳥海山が西北方に見えてきた。

一行は午後早くに金山に着いた。難嶮の有屋峠を明日に回して今日はここで宿泊することにした。

翌日、金山を出立し、有屋村を過ぎて有屋峠に登った。この峠は有屋村と役内村を結んだ峠で秋田側では役内峠と呼んでいる。標高九三四メートルの高所にあつて、天平宝字三（七五九）年、雄勝城が置かれた年に秋田城へも通じる道として開かれた古い峠である。以来、羽州道と言つて福島で奥州道と分かれ板谷峠を越えて出羽に入り米沢・山形・新庄を経てこの峠越えをして秋田に入り、北へ縦貫して矢立峠を越え、津軽に至る道である。義宣は鬱蒼とした暗がりの峠道に入つたとたんから無口になった。明らかに不快な様子であつた。急峻な坂道に差し掛かると、その不快な

顔がさらに険しくなった。登れども登れども下界は山また山であった。ようやく峠にたどり着いたが見渡す限り山々の波がうねっているだけだった。御機嫌斜めの義宣は休憩したと思ったらすぐさま出発を命じた。皆は慌てて立ち上がった。紅葉に見惚れている暇などなかった。

その日は横堀に泊まって憂鬱のまま翌朝出発したが、行くほどに耕地が開け広大な平地が眼前に広がるのを見て喜びの色が見え、湯沢を過ぎる頃にはすっかり機嫌が直った。これがその日の宿泊地の横手へ近づくにつれてますます広大な平地が展開されていくので義宣は喜びで落ち着かなかった。

そして次の日、六郷・大曲の辺では立ち止まって四囲をぐるりと見回して「ほほう、このような広い平地は常陸にはなかったな」と満足気であった。

た。

一行は刈和野で最後の宿を取り、翌日はいつもより早く寅の刻に宿を発った。境・船沢・神藤森・神内・式田・風無台・七曲台を経て豊島に到着した。既に湊から多数の出迎えの者が来ていた。石塚大膳は梅津憲忠をはじめ北国隊を率いて来ていた。みんな互いに手を握り合って一別以来の再会を喜び合った。

義宣一行が新領内に入った沿道の最上・小野寺・六郷・本堂・戸沢・安東の旧領諸城には父義重の采配で各部将が入城して城番を勤めていた。義宣はそれらの部将に指示・激励をしながら秋田へ向かったのは言うまでもない。

豊島から黒沼・畑を過ぎて小丘を越えて宝川・松崎、そして大沢山の頂上に立った時は太陽は未の方角にあった。九七・五メートルの大沢山を西

に下つて、泉・水口・神田・八柳を過ぎてついに湊へ到着した。時に慶長七（一六〇二）年九月十七日である。陽暦の十月三十一日に当たる。北の封土は間もなく冬であつた。

北の海の太陽はぎらぎらと輝き、没するにはまだ間があつた。

八、義宣年譜の二大事項

私の著作の動機は「佐竹氏という小さな針穴から日本史を覗きそのなかにうごめく群像の生きざまから人間を考える」ことである。特に佐竹義宣から惹かれたものが二つある。

その一つは石田三成の危急を救助した行動である。慶長四年閏三月三日の朝、前田利家の死去を機に加藤・福島ら豊臣七将が大坂城下で石田三成

を襲撃した。これを佐竹義宣が伏見から駆けつけて危急を救い伏見にいる徳川家康の許に保護してもらつた。

この行動は当時的大名としてだれ一人できるものでなかつた。一年半後の関ヶ原合戦中ですら去就の定まらない者がいたということはそれほど旗幟鮮明にすることは至難だつたのである。それを佐竹義宣はこの時すで決行したのである。けつして蛮勇でも匹夫の勇でもない。石田三成の恩義に報い信義を貫いたのである。

後年、家康が側近に「佐竹ほど律義な男は天下にいない」と言っていたが、それはその後の幕府への忠勤もあつただろうが家康はこの時のことがかなり強烈な印象になつたのであろう。恩義に報い信義を貫くということはそのまま徳川家に頂戴したいものである。幕府を未来永劫まで維持

して行くためにもぜひ必要な心棒なのである。

佐竹氏が関ヶ原後、改易を免れ秋田遷封で収まったのはもしかしたら石田三成救助が禍を転じて福となっているのかもしれない。

その二つは窪田の城づくり、町づくりに際してのこの地の大土木工事である。佐竹義宣が入部した頃の今の秋田市は一大湿地帯であった。特に千秋公園の東側と南側は自然の要害といわれるくらいだった。

義宣がここに城を構え藩の中心地として都市計画を実行するに当たって、先ず最初に取り掛からねばならなかったことは土地造成だった。そしてその土地造成で重要なことはこの広い湿地帯を干拓することなのである。

干拓の順序として第一番に取り掛からねばならないことは沼や小川や沢などから流れ入る水をく

い止める土手を造ることであった。現在に残る明田や大堰反や手形堀反町や広小路や古川堀反町や中長町などの道は初め土手として造られたものである。

第二番目に取り掛かったのが堀割である。これは排水の処理場にもなるわけである。堀割が長野沼や太平川や旭川や入川と結んで排水をスムーズにした。これがまた城を守る面でも役立つわけで一挙兩得ということになる。

第三番目は家臣団の屋敷の盛り土である。どのような盛り土であったかは、現在もわずかに残る石塚屋敷の跡とか明徳館・女子師範付属小学校の跡に当時を知るよすががある。

以上、干拓という大工事を実行するには莫大な土が必要となる。東部は富士山を削ることで間に合うが、その他の場所はそういかない。広小路の

堀をはじめ他の堀を掘った土は土塁に向ける程度である。そこで目をつけたのが旭川の掘り替えだった。掘り換えによって生じる莫大な土だったのである。なお、堀川ができることによって一に船運から商業が盛んになり、二に城下の防備が堅固になるわけだか、これも土を得るために掘り替え工事があつたからである。先ず初めに掘り替え工事ありきである。

九、北狄貿易ほくてき

中世、シベリアと出羽秋田の間に交易はあつた。秋田から奥尻島・利尻島・礼文島と伝わって樺太の沿岸を北上して行けば佐渡と本土間ほどの海峡に至る。さらに北上すれば海峡は二里（八キロ）ほどに狭くなる。その対岸の黒竜江を溯って

行くと徳楞デレンという地に到達する。そこを中心にして物々の交換をするのである。間宮林蔵の探検より何百年も前の話である。そしてこの行路は当時民間では蝦夷地（北海道）のアイヌ人を含めて普通であつた。

四月に入つてそろそろ強い南風が吹き出して来る頃に秋田の港を船出する。

船は十三湊・奥尻島・利尻島に寄港しながら北へ向かう。樺太沿岸では、白主・真岡・久春内・鵜城・トツシユカウ・ノテト・ラツカと寄つた。樺太北端に近いナニオーに到着まで約半月を要するであろう。順風に恵まれれば夜も航行したろう。寄港地のアイヌ人とは友好的だったに違いない。したがって日本語の話せるアイヌ人はどの港にもいた。ナニオーから海峡を渡り黒竜江を溯る。

大曠野の中を船は溯って行く。毎日同じ景色の

繰り返しである。せめてもの慰みは朝日と夕日で
 あろう。それも数日経ると単調に変わる。果たし
 て行く手に町があるのかと初めての者は疑ったで
 あらう。十日もして徳楞の町に着く。彼等は極北
 の桃源郷にたどり着いた思いだったろう。町には
 韃靼人の外に支那人も多く、アイヌ人もいた。権
 力者もなくさながら自由都市で人種差別はなく和
 気藹々の中にも活気に溢れた町だったはずであ
 る。ここでも片言ではあるが日本語が通用した。
 彼等は持参した金で貂や虎の皮と交換し、数日間
 遊んでから黒竜江を下ったのである。

黒竜江の下りは上りの半分の日数で河口に着い
 た。海峡を渡りナニオーで休んでから南下した。
 予定どおりに秋田の港に着けば往復で二ヶ月の航
 路であった。これが嵐にでも遭えば二倍や三倍い
 やそれ以上の日数の掛かることであった。この自

由交易は近世に入って禁断となった。だが、土崎
 湊の回船業の旧家では藩政時代でも潜りで営んだ
 という言い伝えがある。これは南蛮貿易に対して
 北狄貿易とでも言おうか。

十、土崎湊うまや駅の変遷

馬屋は当主が隠居同然となっていたが、若い養
 子が慣れないながらも一生懸命に精を出していた
 ので、結構繁昌していた。先々代が固めた基盤は
 大盤石であった。湊へ入る水産物は一度湊の手を
 通して、それから久保田や、仙北方面へ運ばれて
 行ったものだが、その陸路の運送の権限は駅株うまや仲
 間が握っていた。

先々代の頃、鯨は秋田の岩館や北浦で捕れたも
 ので、捕れた鯨は土崎しもの下しもの隣村相染で扱うこと

になっていたので、鯀の頃の相染村の賑わいは大変なものだった。その相染村から土崎の港までは延々と続く馬車の行列であった。馬屋が一年中で最も忙しいのはこの時期である。勿論、店だけでは間に合わず、近郷近在の百姓家から馬子・馬車を掻き集めて期間中、寝ずの仕事をした。馬車は穀保町や新城町川端の川岸で待っている仙北方面からやって来た川船に運ぶのが主だったが、穀保町から雄物川添いに焼山の下を通り、伽羅橋を渡って寺内村の古四王神社前に出て、八橋村を通り久保田町まで運送するのも多かった。この頃が馬屋の絶頂期であった。荻津勝孝の街道絵巻にはその頃の駅周辺が描かれている。

明治に入ってから、鯀は北海道で捕れるようになり、捕れた鯀は一塩を掛けて土崎の港へ運ばれて来たが、この時の港の盛況ぶりはかつての相

染時代を優に凌ぐものがあつた。大小帆柱の林立、色鮮やかな幟のはためき、古川方面から波止場にかけて軒を並べていた二十数軒もの海産物屋や問屋の若い者の掛け声、河岸で餅や酒や蕎麦などを売る屋台店の賑やかさ、集まって来る人の群、等お祭りさながらであつた。

当然、馬屋の仕事も忙しかった。ただ、相染と土崎との間の運送がなくなった分だけ、以前ほどの繁昌ではなくなった。秋田へ通う道も改められて、新城町から幕洗川を通り、切り通しの五輪の坂を登って古四王神社の前を過ぎ、それまで曲がりくねっていた道を切り通しにして真っ直ぐにし沼地を埋め立てた八橋へ通じる道を行くのであったが、旧道よりは大分近道になったものの、馬屋にとつては高清水の山の五輪の坂は閉口だった。往路は五輪の坂を登ったところの茶屋で、馬方衆

は一服し、汗びつしよりの馬を休ませた。しかし、雄物川の洪水による道路の決壊がなくなり、便利にはなった。

しかし明治三十五年の奥羽北線開通に引き続いて三十八年の奥羽南線の開通は湊にとっては大事件であった。藩政時代からの秋田藩・秋田県の表玄関と自負してきた商港としての土崎は一瞬のうちに暗黒の谷底へ陥落していったようなものである。

運輸機関が船に頼っていたころの土崎港は秋田県内の物資の集散地であり、そこに落ちる金は莫大なものであった。土崎の繁栄は一にこれにあったのであるが、それが鉄道が開通してからは土崎港は物資集散地としての価値が薄らぎ、その必要を認められなくなってしまった。

加えて明治十七年来懸案となっていた港湾の修

築が延々と遅れ、長い間不良港の運命にさらされていた時であったから、この鉄道の開通は町民に徹底的な衝撃を与えた。この結果、経済圏が秋田市へ移動し、秋田市が県内の物資の集散地に変わってしまった、県都として、名実ともに政治経済の中心地になってしまった。

港の出入りの船からの荷を運送することを業としていた馬屋にとっては、ただただ指を食わえて見ていたようなもので茫然自失の体であった。(土

居輝雄著『漂砂の彼方』より)

第四章

鬼園晚年

ふと目覚め 夜半の時雨 じゃず遠く

年の瀬や 八百橋巡る 宝船

鬼園

星月夜 無限の時空 事もなし

連れて翔び立つ 明けの太空

絃一郎

立冬や 新内流し 冴え渡る

木枯らしや 投げ込み寺は 人もなし

秋深し 仏に似たる 孔子かな

ふぁんたじあ 遊女も参る 酉の市

秋聖堂 ニコライ堂を 遠く見る

時雨降る 沈黙考 つい寝ぼけ

甘酒や 平次も飲むか 秋日和

時雨降る 草稿前に ニタリ顔

時雨降る 傘の触れ合ふ 二人かな

もみぢ葉の 河内源氏の 墓に舞ふ

この旅は 今年限りの コルチカム

この旅は 今年限りと 思ひしに

また来る年も コルチカム見む

苔のむす 清和源氏の 墓石かな

元旦や 氣を引き締めて 正座する

奈良漬けで 茶漬け一杯 秋の暮れ

新年や 連れと御神酒を 交はしけり

晩秋の 奈良の夜更けに 鹿ぞ鳴く

やれめでた 卒寿の年に なりつるか

秋燈火 この世の名残 京の舞

平成も 三十年と なりにけり
来るも過ぐるも 節目良き年

今一度 あの鳥海を 共に見む

春近し ひねもす猫と たはむれる

道すたれ 日本文化は 地に落ちぬ

サンルーム ミミと昼寝す 六回忌

外来の 野球に道が 残りけり

パソコンや だましだましの 寿命なり

一郎に 道の美学を 見つけたり

友ありき パソコンデータ 救ひけり

栄誉賞 辞退をするも 美学なり

ありがたや 持つべきものは 友なりき 鬼園

野球道 高校野球 ある限り

我が生涯の 尽きぬ喜び

文勝

凍てつく夜 がばと跳ね起き ペンを執る

猛吹雪 ついてすき焼き 喰ひに行く

猫ふたり 猫の映像 じっと見る

達成感 吹雪の中を 歩きけり

地吹雪で 身動きできず 立ち往生

大寒や 鰯鮓を 買ひに行く

雪の夜は ビバルディーの 冬がいい

豪雪や 隣近所の 温かさ

吹雪く夜は ブラームスに ブランディー(旧作)

我が胃部の 癌細胞が 消え失せぬ

寒中の 仕事といえは 税申告

我が頭部 MRI 異常なし

寒中の 仕事終へたり 春近し

取材受く せめて一言載るべきに

何も無しなり 余寒の朝^{あした}

鬼園

黒髪の 鬢のほつれや 春の雪

それにつけても なんと失礼

文勝

寒晴れや 確定申告 届けたり

先達の 重き労苦に 想い馳せ

早春の記事に 今の世を知る

絃一郎

大寒や 難題済まし 濁り酒

角界の 春遠からじ 福寿草

整理とは 捨てることと 見つけたり

未練があらば それを断ち切る

春よ来い 雪下二尺 福寿草

黒髪や 炉の開きたり 朱の襷紗

二つ屋に パツと咲きたり 福寿草

二つ屋に 佳人の来たり 月見草

山王殿^{でん} 源氏螢の 彷徨^{さまよ}へり

雨返し みごと転倒 アイスバン

帽子フードで 事無きを得る

冬五輪 羽生鬼園も 転びたり 鬼園

羽生転ぶも 鬼園転ぶな 文勝

わが命 雪の夕べに 消えにけむ

記者来訪 寝ぼけ顔なる 春の午後

新聞に わが名載りたり 今朝の春 鬼園

2 / 19午後4時頃。友人宅でワイン一杯、日本酒一合を飲みながら談笑。夕方、友人宅を出て間もなく、胸が苦しくなり、塀に寄り掛かり友人に連絡しようと……「もしもし、今、救急車が来るから」の声で気が付いた。顔を雪の中に突っ込んでいた。その後ははっきり記憶している。不思議なことだ。気を付けようがない。尤も、あのまま死んでいったら、これほどいい往生はない。

雪中に 顔を突っ込み 救急車

さわやかに 師の記事読める 雨水明け 絃一郎

如月や ワカサギ三寸 舌鼓

Eメール あのキスマーク おぼろ月

寒鰯を たらふく喰って 昼寝かな

漆黒の 髪靡^{なび}かせる 春の風

やつと来た 春本番の 暖かさ

シラヤ食ひたし 今や幻^{まぼろし}

漆黒の 豊かな髪^{さんご}の 珊瑚^{さんご}かな

ハララゴや 今は懐かし 味噌^{かやき}貝焼

鰹^{かつぶし}節粗く 味噌は地元の
―ハララゴとはイクラのことなり―

寒戻り チカやシジミの 夕餉かな

春の雨 ただ漫然と 過ぎしけり

なんとなく 母想い出す 蜆汁

忘るまじ 慈母観音の 温^{ぬく}みかな

鰯の しょつたる鍋の 懐かしく

死の予告 これほど辛い ことはなし

しょつたるの 鍋には酒が よく似合ふ

死刑囚 執行前の 年月は

恐怖と悔ひに 苛まれ……
さいな

福寿草 によつきり顔出し こんにちわ

名医とは 患者に希望 持たす医者

春寒や 首引つ込める 福寿草

雪囲ひ はずせば池の 大金魚
おおきんぎょ

今年五十で いよいよ元氣

ああ眠い ゆっくり休め また来るよ

—最後の言葉。いい別れ—

春分や 半年ぶりの 金魚たち

いつの間に 氣を失ひて あの世かな

金魚を狙ふ 鷺の襲来
さぎ

これに越したる 往生はなし

押っ取り刀で 追ひ払ふ

あな憎や 鷺はネットを 掻かい潜くぐり

小金魚こきんぎょくはへ 飛び去りにけり

小金魚の 気は如何いかばかり 南無阿弥陀なむあみだ

訳もなく 別れし人の 懐かしく

強情を 張りて別れし 人いづこ

福寿草 昔の人ぞ 偲おもはるる

彼岸過ぎ 黒豆味はふ 朝餉あさぐしかな

メジャー話題の 大谷翔平

祖父が能代市 栗山出

増えました 楽しみ一つ 増えました

秋田みんなが 大谷壘肩

栗山は 比羅夫（安倍）柳営 付近なり

——北能代駅隣——

春雨や 桜の蕾 膨らみにけり

君知るや さは農にして くらは神

故に花見は 豊作祈願

窪田辰巳の 桜村 桜に非あず 農神さくぐしなり

大谷は 三連続の 本塁打

手前狂喜に なりにけるかも

大谷翔平 あはやパフェクト

驚き入ったる 底力

常羽有情を 講釈すれば 常陸恋しや 出羽愛しいと

川反で 待望久し シラヤかな

ただ春の夜の 一睡の夢

タラノコは 炒め牛蒡に 真鱈の子

あへた調理に 焚き付け御飯
―所謂タラコとはスケトウタラコのことなり―

いよよ好調 大谷翔平 次の仕合の 待ち遠し

湊祭りに 無くては成らぬ カスベ枝豆 濁り酒

世の人は 嘘の吐き方 学びたり

昨日政治家 今日役人

新潟の 県知事哀れ 論語読み

論語知らざる 譬えなり

恋の道 彼の辞書には なかりけり

秀才も 恋の科目は 落第点

グズとは ハゼのことなり 唐揚げの

あのかりかりの 音や懐かし

モナリザの 幽かな微笑 春の宵

大久保は 軒を連ねる 佃煮屋

アミにゴリ海老 鮒チカ白魚

我が家建築 四十五年 共にくらせし 金魚全滅

鷺の襲来 後悔憎悪 限りなし

春の宵 シラヤ食ひたし シラヤ無し

川反二丁 彷徨ひにけり

憎しみも 余りあるなり 小悪党

捕らえてひねり 焼き鳥にせん

紅灯を シラヤに被^かけ 彷徨へり

桜散る 心ばかりの 供養かな

宵祭り 湊八町 飲み歩く

―昭和も遠くなりけり―

春うらら 二ヶ月ぶりの 床屋かな

越中富山の 白海老食べて

今は幻 シラヤを思ふ

池の中 生き残りあり 金魚かな

昔元寇 対馬の如し

花曇り 洋傘杖に 散歩かな

全滅と 思ひし金魚 今朝見つけ

餌をやりつつ 飽かず眺むる

不平不満は 行脚の鈴よ

それがなければ 忍び寄る

―忍び寄るは何者、妖怪か熊狼かそれとも死か？つまり、完全なる安楽は死を招くが、ほどほどなるストレスは健全な身体を保つ―

頂上に 登りつめれば 下るのみ

夢の話は ゆめゆめ言ふまじ

かのフロイトも 言ってるじゃん

潜在意識 見抜かれちまふ

つひに来にけり 一郎処遇

さすがはメジャー みごとなり

春の眠りに がばと跳ね起き

池の金魚を そつと見る

草取りも 角度違えば 今日も又

―観光・探訪に因んで―

草取りは 歯磨き如く やりぬべし

―毎日少しずつ―

漱石の 心未だに まとひつく

我がバイブルは イエスに非ず

仏に非ず 心なり

心読みたし 読むのが怖し

座右に置いて 死を思ふ

我が命 パソコンと共 消え入らむ

第五章

直武の江戸カルチャーショック

土居が小田野直武に奇異と異常と天才を感じる
ろ。う。
のは彼の日本人離れした絵である。

あの当時、田舎から江戸へ出てカルチャー
ショックを受けない者はいない。そして江戸風、
江戸化されてしまう。

ところが、直武だけにはそれがなかった。

あれだけ源内や江漢と遊興の巷を彷徨している
のに作品には少しも影響されていないのである。

大抵は文芸・芝居・音曲・舞踊・浮世絵・言語・

風俗の中に丸め込まれて亜流江戸人にされてしま
う。それどころかその奴隷になってしまう。

直武には不思議とそれが感じられない。カル
チャーショックを受けていないのだ。そこが実に
ユニークである。

彼の絵が、どこか硬く、西洋臭く、他所ゆきで、
冷たく、馴染めないのはこんな理由があるからだ

* 小田野直武略年譜

一七四九（寛延二）

角館に生まれる。

一七六三（宝暦十三）

このころ、北義躬は組下小田野直武を「絵御相手」としている。

一七七三（安永二）

下旬

源内が宿にあった直武の絵を目に止め、その晩、二人が会う。

翌日、源内一行は阿仁銅山へ向かう。直武が加わる。

九・一

源内・角田・直武・福助の四人が久保田に到着し八橋村の見上家別荘を宿にする。

四

源内・直武・福助の三人は大館へ向け出発。此処で角館へ帰る直武に御用の書状を託し別れる。

二十四

源内、義敦に謁見する。その席で源内は直武の江戸勤務を推挙する。

三十

直武、江戸勤務と決定。

十一・十一

直武、久保田出府のため角館を発つ。

十二

久保田到着。

十三

北家詰番と同伴で本方役所へ出頭。

二十二

直武、江戸詰に当たって役所で起請文を書き書名・血判をする。

二十七 夜、角館に帰宅。

二十八 午の刻、直武は北義躬に面会し別れの挨拶をする。

十二・一 直武、江戸へ向かって角館を出発。

十五 梅田抱屋敷に到着。

十六 下谷三味線堀上屋敷に立ち寄り、深川清住町の源内邸に寄宿することとなる。

十七 源内は直武を杉田玄白に引き合わせる。玄白は直武に『解体新書』の挿絵を依頼する。

一七七四（安永三） 下旬 直武、初めて義敦に御目見得を許される。

直武、司馬江漢を知る。

一七七五（安永四） 七・五 北義躬が義敦下国御礼の使者として秋田藩江戸藩邸に到着。

直武が梅田まで出迎える。以後、義躬在府中の絵御相手となる。

七・十八 義躬、源内・直武と共に中洲に遊ぶ。

八・十一 義躬、下国のため江戸出発。直武、前日から来て道中準備を手伝い見送る。

二十六 義躬、藩主義敦に謁見し使者の報告をし江戸の雑談をする。その

一七七六（安永五）

六月上旬

中で蘭画と直武の話題があり義敦は直武に関心を持つ。
義敦、直武を引見する。直武は「富岳之図」を献上。以後、直武は義敦の絵御相手を勤める。

一七七七（安永六）

四・二十七

義敦、下国のため江戸を出発。直武、千住まで見送る。

十月

源内・直武が相良旅行をする。帰路のスケッチから「富岳図」を完成する。

十一月下旬

直武に帰国命令が出る。

十二・十

直武、江戸を出発。

二十四

角館に到着。

二十六

直武、組頭から呼び出され江戸での勤務について糾問される。

二十八

江戸勤務状態を尋ねるべく直武に催促するも病気を理由に出頭せず。

一七七八（安永七）

一・九

絵の書き初めの日に当たり直武、義躬に召し出される。

一・十九

直武、義躬の絵御相手を昼頃から暮時までする。

二・二

久保田の北家屋敷番から「組下小田野武助に御屋形が御用というゆえ早速出府致すように」との用書が届く。

四 直武、昼頃から夕刻まで義躬の絵御相手をする。

十 直武、久保田出府のため角館を発つ。

四・十一 直武が久保田へ移住死義敦の絵御相手場所が本丸御殿となり、其処への通用が自由であることを公式に告げられる。

九月下旬 直武、義敦の参勤を前に扈従を命ぜられ在府中は御側御小姓並を言い渡される。

一七七九（安永八）

十一・十四 直武に表方御用所から呼び出しがあり「緩怠之勤方ニ付、以御条

目遠慮被仰付候」の主命が伝達される。

十五 早朝、直武は藩邸裏門から帰国の途に就く。

三 角館に到着。

一七八〇（安永九）

五・十七 直武急死。行年三十二歳。戒名「絶学源真信士」。

「直武はこの数日、気分が良かった。義躬も久保田へ帰って来ていて、もう間もなく角館に戻って来るのだと思う気持ちも手伝っているのだろう。殊に今朝は久しぶりに空がからっと晴れて爽快である。こうなるとじっとしてはいられず絵筆を採った。庭へ目をやると紫陽花が咲いている。今朝はいちだんと鮮やかだ。彼はにっこりと筆を動かした。

うつぶせ加減を少し長くしたせいか、胸元がむかつくような感じがした。顔を上げたたん、何かが込み上がってきた。あわてて抑えようと手の平を口へ当てた。指の間から血が溢れ出た。それから大量の鮮血が噴き出た。食道の静脈が破れて出血したのである。うつつとそれでも抑えようとした。それがいけなかった。出血が気管に入って窒息状態となったまま気が遠くなっていった。

全くの事故である。太陽暦の六月十九日に当たる。だれもいなかった。梅雨の晴れ間の庭に咲く紫陽花だけが彼の死を見守った。江戸藩邸から赦免状が角館に着いたのは翌日である。」（土居輝雄作『蘭画大名』より）

「直武の死因について筆者は肝臓病に因る食道静脈瘤ではないかと思う。筆者は以下のように推測する。

まず、田舎出の彼が不衛生な江戸下町でウイルスで汚染された飲み物・食べ物によって感染した流行性肝炎に罹患し、それがすっかり治りきらずに慢性になって肝硬変になったことが考えられる。

次ぎに、大量の酒を長い年月、毎日のように飲み続けた。一般に毎日六合の十六年間と言われる。ただし直武は四年間である。しかし一升以上の大

酒であつたろう。しかも酒だけ飲んで肝心の栄養を摂らなかつた。そして粗食であつた。

以上、二つのうちどっちかというより直武の場合には両方がいっしょになつたと思われる。

直武は決して暗殺・毒殺されたのでもなければ自害したのでもない。また、病没であつても労咳ではない。藩主義敦が労咳であつても直武が労咳の身で仕えることはぜつたにありえない。」（土居輝雄著『大河―悠久の佐竹氏―』より）

結局、「小田野直武 江戸へ上つて カルチャー ショック なかりけり」である。

参考までに、「源内は 江戸カルチャー 同化せり」を添えておく。

ついでに以下のことも書かざるをえない。「源内の 生まれ変わりが 写楽なり」

平賀源内と秋田蘭画を調べているうちに不思議

なことに行き当たつた。源内は安永八（一七七九）年十一月に人を斬つて投獄され翌十二月に獄死した。

実は田沼意次が自分の領地相良にかくまつたという説は当時からあつた。義経伝説と似たところもあるが全く虚構とも言えない。

その後が興味津々である。写楽が突然世に出て忽然と消えたのが寛政六（一七九四）年である。源内が生きていれば六十七歳である。

その考案された雲母刷りの手法は当時源内を措いて製作のできる者は見当たらなかつたろうし、また、役者の似顔絵のデフォルメの具合が源内のけつして上手ではない素人っぽいデッサン力とうまく溶け合っている器用さは源内ならではの才能であつた。

私には源内が写楽に思えてならない。

第六章

老いの繰り言

一、淳城由来

能代の別称。六五八年、安倍比羅夫がこの地に上陸し蝦夷に対す。この時、柳営した地を淳城、ていじょう・なぎさの城、と云う。淳は水の止まる所、水辺・海岸の意あり。この淳城を訓読みでヌシロと云う。ヌは沼のヌなり。やがて城は苗代の代に、ヌもノに変わり、能代となる。音読みの淳城は今日まで残り小学校名にもなっている。

二、紫波の渡し

紫波の渡しは新川の渡しと混同されている。全く違う。後代の土崎湊御蔵の渡しである。安倍比羅夫の頃、女米木の豪族が征伐されて逃亡し、後の新川の渡し辺りで渡河し北へ向かったと云う。

朝廷軍は柴百三駄の筏で渡河し、賊を追いかけた。因ってそこを柴の渡しと云う。しかしその場所が間違っている。そこは川幅も広く流れも急で渡るなら御蔵の対岸辺りがいい。しかも川岸なら西岸のほうが歩行しやすい。それは今の地形からでも領ける。なお、柴百三駄の故事はモモサダの由来である。また、紫波は柴の当て字であるが、紫は高位高官の冠の色でもあり瑞雲同様めでたい意味もあり、つまり穏やかな渡しという意味である。故に、中世北国道は御蔵町対岸から渡河した経路であり、近世北国街道は新川の渡しを通って川尻・八橋・寺内、土崎の穀保町に入る経路である。したがって、紫波の名称は近世に入って消滅した。

三、道灌かがり

「道灌かがり」という用語がある。太田道灌の江戸城築城法でる。「中城・子城・外城の三郭それぞれに曲輪を巡らし、あいだには空濠が設けられ、一郭が奪われても他の郭にこもって敵を防ぎ、反撃することができた」と評価が高い。これを秋田県内の中世城跡からでも発見することができる。独鈷城跡・湯沢城跡・檜山城跡・脇本城跡である。久保田城跡もその地形から中世の「かがり」が想像できる。北の丸・宝鏡院・八幡山・山の手・上中城・下中城・長野・二の丸・本丸である。佐竹氏入部後、中島・捨郭がある。なお、「かがり」とは、本来「糸などでからげて縫い合わせること」で、漢字では「縻」と書く。

四、小田野主水

明暦二年、秋田二代藩主佐竹義隆の謀略により角館芦名家は断絶した。芦名家臣や佐竹組下は佐竹一門の三家に配置替えをさせられた。この時、義憤により出家して藩を去った者三人、出奔して他家へ仕官した者が五人いた。その中で小田野主水なる者は佐竹譜代にもかかわらず、義を貫き江戸へ出て西尾隠岐守に仕官した。西尾氏は幕府閣僚の家で遠州横須賀藩主二万五千石の大名、老中も勤めている。小田野主水の家系は、遺族にお咎めがなく主水家として続いたようである。後世の秋田蘭画家、小田野直武の分家筋に当たるのではないだろうか。明暦から百年後の宝暦・明和の頃、つまり直武時代に、直武の父、平七直賢の妻は小田野主水直堅の娘であるし、主水の嫡男、直暁の娘が直武の妻なのである。さて、西尾家へ仕官した義士小田野主水の子孫が直武と江戸で会ってい

るものか興味深い。小田野直武が江戸に上った頃の西尾氏の当主忠需は奏者番で三万五千石、嫡男忠移の妻が田沼意次の娘である。角館を出奔し西尾家に仕官した小田野主水の子孫が健在なら、直武と会ってよいはずである。そして、佐竹義敦が小田野－西尾－田沼へのパイプを期待するのが当然だった。直武の江戸詰登用は平賀源内－田沼へのパイプ役だったが、西尾氏を通すほうがより効果的だった。当時、西尾と田沼の関係は源内のとても及ぶところではなかった。

五、竹島は日本領土

幕末、竹島へは渡航禁止令のあったことが久保田の上看町丁代記録にある。竹島とは鬱陵島のことで現在の竹島ではない。鬱陵島は中世の頃すで

に日本と朝鮮の漁船が渡航し、入り混じって漁をしていた。したがって、どっちの領土というわけではなかった。元和四（一六一八）年、徳川幕府は米子の商人村川市兵衛と大屋甚吉に竹島（鬱陵島）への渡航を許可している。以降、この島は桐などの林業、鮑などの漁業の拠点として注目されていく。勿論、鎖国令の対象にもならず、村川・大屋家は収獲物の一部を幕府に献上するなど当時の蝦夷地（北海道）と違わない日本領土的なものだった。元禄五（一六九二）年、村川家の船と朝鮮人との間にトラブルがあった。日本人にも負けないくらいの朝鮮人の渡航もあったのである。翌年、大屋家の船が竹島で漁をしていた朝鮮人二名を捕らえて幕府に報告した。幕府は対馬の宋氏を通じて朝鮮国に対して竹島（鬱陵島）の領有権を主張することになる。ところが朝鮮国は譲らず交

渉は難航した。結局、幕府は捕らえられた朝鮮人を長崎経由で朝鮮本国に送り返すということだった。元禄八（一六九五）年、幕府は宋氏の意見を聞き入れて鬱陵島を朝鮮領と認め、日本漁民の渡航を禁止した。しかしこれまでこの島への渡航の途中、立ち寄って漁を行っていた松島（現・竹島）へはその後も伯耆や隠岐の漁民が渡って操業を続けた。したがって現在の竹島は日本領土であることに間違いない。天保七（一八三六）年、浜田藩が鬱陵島で密貿易したのが発覚して藩主松平康爵が奥州棚倉に移されるという事件があった。その摘発者が隠密間宮林蔵だった。

六、安東海賊

海賊とは、海上通行の船を警護したり、海難救

助したり、入港の船を案内したり、時には利害の相反する船を襲ったりする海の武力集団である。また、船合戦が強くなければ海賊と呼ばれなかった。要するに海の強者のみが海賊と呼ばれたのであって畏敬の意味すらある。安東愛季の頃がその名に相応しかった。したがって時にはこんなこともあった。秋田沖を往来する船のなかに湊を素通りして行くのがあった。津料（入港税）の支払いを渋っているのである。また、この入港に不便な砂の港で時を潰すのを惜しむのも理由の一つであった。ならば沖を通る船に課税すべしと男鹿の島影に待ち構え、檣扇に真羽の旗を押し立て通行税を取り立てた。拒まれると、夜間にその船を襲って金品を巻き上げた。

七、細川信良の女

文禄五年、秀吉は安東実季に細川信良の娘との婚儀を命じた。細川信良とは細川氏宗家の当主である。前の名前は足利義昭の一字を拝領し、これに細川宗家由来の「元」と合わせて「昭元」であったが、織田信長に属しその妹を娶って「信良」と改名した。その間に生まれた娘が実季の正室になるわけである。だから実季の妻は太閤側室の淀殿、徳川秀忠夫人の江とは従姉妹の関係になる。名門細川との結びつき以上に時の最高権力者とのつながりはまさに中央政界を闊歩できる機会となった。同じ細川を名乗る藤孝（幽斎）は和泉半国守護家という細川の一支流に過ぎなかった。藤孝は彼の家系を宗家にとって代わるべく画策し、秀吉に讒言して信良を勘当させた。実季が信良女と婚

儀を挙げる四年前のことである。

八、浅利頼平の執念

「待てよ」と頼平は考えが止まった。ただ自害したのでは全く俺の負けになってしまう。世間でも敗訴のための自害と思うだろう。これでは宿怨が安東に通じない。何のために今まで抵抗してきたのか分からぬ。俺の死後まで実季を苦しめるのであればならぬ。敗訴となるのは初めから分かっていたことではないか。とにかくいかなる形であれ安東家に災いを降らすことが目途ではなかったか。生き長らえることは容易にできた筈だ。太閤の命ずるままに実季の家臣となって宛行われた扶持に満足し、忠節を尽くせば浅利の名跡は残り、家族や旧臣も安泰なのは分かっている。だが、

それでは父の怨みはどうなる。浅利のかつての名声はどこへいく。屈辱だ。安東の家臣となるよりは潔く滅亡するほうが増した。これは俺の義務だ。だが相手を困惑させるのでなければならぬ。「そうだ」と頼平は、はたと思い当たるものがあつた。俺が安東に殺害されたように死のう。形勢不利とみた安東実季が俺の家来を唆して俺を毒殺せしめたとか、浅利方が有利になつたために安東実季が家来を忍び入らせて自害に見せかけ俺を毒殺したとか、という噂や評判が世間に広まつたらどうだろう。これは誠と思われるのが当然だ。安東実季の困惑した表情が目に見えるようだ。「急がねばならぬ」。敗訴と決まってからでは遅い。頼平は手を打って用人を呼び、「これより書き物をする故、今夜は下がって休むがよい」と命じた。彼は手文庫から烏兜の毒薬を取り出して暫く眺めた。

「少々、部屋の中を荒らさねばならぬな」と物を散らかした。「うむ。これでよい」。頼平は莞爾として胸を張った。

九、安東家臣団の苗字

現在、秋田県内に残る安東家臣団の苗字を拾ってみることにする。浅利、川尻、安東、植田、一部、片山、菊地、八木橋、波岡、神成、鎌田、中津川、竹鼻、工藤、鳥潟、上杉、長岡、岩城、大高、高橋、嘉成、佐藤、新城、石川、大淵、森元、門間、清水、椿田、西宮、林、三村、吉田、八柳、倉光、金、斎藤、高瀬、館岡、田畑、羽川、嵯峨、永井、船木、田口、木村。安東の名前の由来は、本姓の「安倍」と移住地津軽の古字「東日流」の頭文字からきている。それが安藤と混同されるようになった

のは、中央政権の者達が文書や書簡に「安藤」と誤記するようになって以後である。安藤氏自身それに阿諛して「安藤」と署名したこともあるが「安東」が正しい。

十、海の名城脇本城

脇本城はもと三方が海に囲まれた絶壁の要害だった。海に突き出した城では脇本城は九州島原の原城と並んで双壁と言えるかもしれない。原城はその築城が明応五（一四九六）年、廃城は元和二（一六一六）年であり、脇本城は応永初期（一二三九五年）の築城、慶長年代（一六〇三年）の廃城である。築城も廃城もほぼ同時代である。原城は寛永十四（一六三七）年十二月から翌年の二月二十八日まで一揆勢が籠城して幕府の大軍を

悩ました名城である。だが、城の規模の雄大さ、築城術の見事さ。断崖の峻厳さ、景観の素晴らしさにおいて脇本城にかなわない。日本史上、無名に近いこの城はたとえ天下の有名な事件や人物に遭遇しなくても名城であることに変わりない。

十一、檜山城の大手門

「檜山周辺歴史ガイドの会」会員による案内で中世檜山城跡を探訪した。感動したのは、これまで一般人が足を踏み入れたことのない將軍山を案内してもらったことである。これで確認したことは、中世の檜山城は將軍山が本丸で、現在は裏側になっている母体集落のほうを表だったということである。城下を檜山川が流れ、日本海へ通じる舟運があり、安東氏菩提寺の国清寺跡や氏神の八

幡神社がある。眺望開けた水田地帯を前にして立てば、中世要害城の大手門が彷彿と眼前に展開した。天正十七年の湊合戦で、湊軍五万の大軍は母体集落側に帯陣しなければならない。

十二、義堯の佐竹拒否

慶応二（一八六六）年六月十六日、諒鏡院が義堯の長女雅子、二女鑲子と共に江戸へ出発した。二人の少女の婚約・嫁入りのためである。雅子の相手は義堯養子の義脩、当年十三歳。鑲子の相手は隠岐家の養子常丸、当年九歳。義堯は近親結婚までしても自分の娘を相馬一族に配そうとした。彼には娘達を佐竹一門と結婚させる気はなかった。それまでの相次ぐ相馬家からの養子といい、徹底した佐竹拒否である。彼は養子の孤独や辛さ

をかこちながらも一方では頑固に相馬一族で佐竹を固めようとしていた。これは並大抵の勇気でできるものではない。諒鏡院の同意と激励が彼に自信と勇気を与えたのである。この時の江戸行きも彼女の発案であった。実は彼女は田舎生活に飽きていたのである。

十三、直武への嫉妬

小田野直武が安永二（一七七三）年十月、「産物他所取次役」「銅山方産物吟味役」を命ぜられて江戸勤務となった時、本方奉行はあつたらしく、その名が見える。阿仁銅山へ平賀源内に随行した平井喜六郎も、直武の藩主お目見え願いを取り計らって家老衆に却下された石井忠運も本方奉行であった。直武が安永七（一七七八）年九月、

「御側御小姓並」を命ぜられて藩主に従つて二度目の上府となつた。並とは格の意味で一騎の身分「百五十石以上」に相当する。角館給人北家配下二十三石の小田野家は「不肖」の「歩行」に相当する。それが百五十石以上の「御側御小姓並」に任命されるとは破格の拔擢である。しかも實際は男性禁制の奥向に出入りできる。これは御鈴之間倅小姓並である。前髪倅小姓の中から選ばれた十五人の名門出でエリートの子供達と同じ扱いである。こうなれば、拔擢とか優遇などというものではない。空前絶後の特別扱いである。家中の嫉妬が直武に集中したのは当然である。後に直武が藩主義敦の勘気を蒙つて下国を命ぜられたいちばん大きな理由は家中の嫉妬からくる中傷や讒言であつた。癩癩持ちの義敦であれば虫の居所が悪い時には中傷や讒言も癩に障ることはあつたろう。

十四、増毛山道

増毛へ陸上交通の増毛山道は、場役請負商人（御用商人）の本州への流通道路として造られ、出稼ぎ人たちの通り道としても利用された。それでも、松前から増毛までは十七、八日かかったということである。筆者は、平成十一年六月にこの山道の通過点である厚田を訪ねた。村の丘に造られた某宗教団体の広大な墓地公園の展望台に立つと、三百六十度一周が緑の地平線だった。「おう」と筆者はその大自然に圧倒された。北方の丘陵彼方が増毛である。村の中を道路が造成中であつた。聞くと増毛に通じる道という。「この道を通つたんだな」。筆者はとぼとぼと歩いて行つた佐竹隊に思いを馳せ、感慨無量の余り暫し絶句した。

十五、大正寺川事件の遠因

雄物川のような大河は一般的に郡の境目になる。ところが刈和野村の対岸強首村も同じ仙北郡である。これは川の流れが変わったからである。昔の雄物川はもつと西方の出羽山地の麓を流れていたから、そこまで仙北郡だったのである。これと全く逆なのが向野村と新波村である。両村は雄物川を挟んで向かい合っているが昔は地続きだった。つまり雄物川がもつと東方を流れ二つの村は由利郡だった。川を挟んでも刈和野村・強首村は佐竹領、向野村・新波村は岩城領である。この向野・新波両村の間を流れる区間に亀田藩は藩政初期から通行税を課していた。秋田藩では天下の公道ともいえる川を通行する船への課税には不満であつたが、隣藩と親戚の誼みもあつて受け入れて

いた。ところが、藩主岩城氏が伊達一族から養子を迎えて以後、なにかにつけて佐竹氏に対して態度が一変した。明和六（一七六九）年の春に通行税五割増徴の通知を秋田藩は受けた。これには「一方的な増徴は納得がいかぬ」と返答した。その掛け合いのため本方奉行を派遣したが埒があなかつた。秋田藩ではその区間を通行する船の積み荷を上りは左手古村、下りは川口村後野で下ろして陸送に替え、その区間を空の船で航行した。あまりの不便さにその陸送の区間を掘川に計画して実際に掘り始めに取りかかったほどでる。一方、このことを幕府に訴え、裁断を仰ぐ手続きを取った。その結果は安永元（一七七二）年十一月三日、老中松平右京大夫輝高から川役そのものの差し止めを言い渡され、亀田藩の全面敗訴となっている。

十六、義重の銅像

冷酷無残で感情の激しかった佐竹義宣に、兄弟喧嘩や父子争いのないのが不思議なほどで、戦国時代では珍しいケースである。武田信玄と父・長男、織田信長と父・弟、徳川家康と長男、伊達政宗と父・弟、など数え上げるときりがない。佐竹家の場合、骨肉の争いのなかったのは義宣の父義重の存在なくしては考えられない。まさに西の毛利元就、東の佐竹義重と賞賛したい。義重は子供達を隣国へ養子に出して佐竹の勢力を広めた。その版図は百万石を優に超え、いや二百万石に達していた。この辺も毛利元就に似ている。因みに、子のない義宣の次の藩主からはすべて義重の血脈である。義重の銅像建立を考えてもいいのではないだろうか。

十七、義峯のお国自慢

八代將軍吉宗時代の享保の頃、月次の登城日に大広間詰めの大名衆はまだ將軍家の出御前には、ここかしこに寄り集まり、四方山話に打ち興じたものである。話題はそれぞれのお国の珍話や名所・旧跡等であつた。その中で、秋田のハタハタが話題になったので、佐竹義峯は得意になつて話し出した。「拙者領地のハタハタと申す魚は先祖が常陸に在国の折りは水戸に生じた魚でござる。それが国替え仰せつけられ先祖が秋田へまかり越すと、領主に付いてこの魚も秋田へ参つたのでござる。今は水戸領にハタハタはござらぬ。その魚の形は小さく鱗の内に富士山の模様を成してござる。それ故、めでたき魚と祝い申してござる。文字にはいつの頃よりか魚偏に神という字を書かせ

申してござる」。その頃すでにこんな話があったのである。

十八、久保田の私娼

宝暦の頃（一七五一～六四）、豊島町は料理屋稼業を許されていた。しかし、たとえ飲食であっても贅沢は堅く禁じられていた。無論、遊女屋を兼ねることはきつい御法度であった。当時、久保田城下には遊里があった。ただ、私娼は馬口労働・四十間堀町・本朝六丁目・船大工町の界隈や、城から半里ほど離れた八橋村に潜在していた。特に八橋村は、久保田と湊（土崎）を結ぶ街道筋の中間にあつて格好の休息地であつた。享保十五（一七三〇）年には上八橋に五十四軒、下八橋に六十一軒あつた民家が寛延四（一七五二）年には

ほとんど茶店になり、久保田の遊樂地となつていた。荻津勝孝の作と伝えられる「秋田街道絵巻」を見れば、これらの家の屋根はほとんど茅葺きである。寛政の頃（一七八九～一八〇二）の作と推定されるが宝暦の頃と変わりはないだろう。往來の賑やかさは久保田の繁華街も及ばない。宝暦の頃には既に芝居小屋が許され旗が靡き櫓が掛かつてその見物客や、日吉八幡宮・寿量院・東照宮の参詣人でも賑わつた。また、見晴らしのよい岡があり、桜や藤の名所で、その季節には文人墨客や遊客が多く訪れた。そのために大商人の寮や別荘が岡に建てられた。したがって、茶店と言いながら五郎兵衛茶屋のような大きな料理屋（茶屋）も立ち並んで、三味線の音が聞こえ酒宴も催されて殷賑を極めた。ここは単なる遊樂の地だけでなく、商談や密談の行われる重要な場所でもあつた。こ

んなわけで、当然、その裏では私娼も多く入り込んでいた。城下とは違って役人の目もそれほど厳しくなかったはずである。

十九、蜂須賀重喜の評価

佐竹隠岐守義道四男義居が徳島二十五万石蜂須賀家の養子となり、重喜を名乗り、意欲満々と藩政改革に着手する。だが、保守派の強い阿波藩の譜代に反対されついに失敗する。気性が激しく重臣をむやみに処罰したことも災いした。有名な阿波騒動がこれである。吉川英治の『鳴門秘帖』の彼はかなり粉飾されて暗君となっているが、事実は上杉鷹山と比肩できるほどの人物と評価している向きもある。その事跡は鷹山と酷似しているが、何と鷹山より十年も前に行っているのである。も

しかしたら鷹山は重喜を師表と仰いでいたかもしれない。彼が城下の万年山に蜂須賀家の広大な儒教の墓域を定めたことでも非凡さが分かる。

二十、曙山は暗君か

蘭画大名で有名な秋田八代藩主佐竹義敦は果たして暗君か。これまでの大方の評価は圧倒的に暗君である。その理由は、本人一代（治世十一歳から二十七年間）で家老級を何と三十数回も免職させているほど癪癢持ちだったことと、絵にばかり耽って政治をおろそかにしたということである。しかし、筆者に言わしむれば、彼の著述した洋画論「画法綱領」「画図理解」の中から近代政治の息吹きが感じられるのである。現に、叔父の蜂須賀重喜を師表として藩政改革に積極的であっ

た。息子の義和の業績はすべて曙山の敷設したレールの上を走っただけである。そんな才気が近代政治家と評価される田沼意次に認められ愛されたのであろう。

二十一、久保田・江戸間

久保田と江戸の間は百四十九里三十三町二間で約六百キロメートルである。鉄道の奥羽本線秋田・上野間が五七一・五キロメートル。昔の街道のほうが少し遠い。鉄道は板谷峠経由だが、江戸時代は七ヶ宿街道を通った。これに要する日数は十五日、元和二（一六一六）年の佐竹義宣は十日で、飛脚は普通七日、大至急で五日の記録がある。伝説の与次郎は三日。しかし、これは不可能ではない。なぜなら隠密は一日百二十キロメートルが普

通で優秀な忍者は一日二百キロメートル。時速十キロメートルで二十時間の歩行だからである。歴代藩主で最も速かったのは最後の藩主義堯が慶応元（一八六五）年閏五月に記録した八日である。騎馬に伝統の相馬家で育った義堯には、千軍万馬の戦国武将の義宣もかなわなかったようである。

二十二、河田次郎

文治五（一一八九）年八月、源頼朝の奥州征伐で藤原泰衡は敗北し家臣と共に渡嶋（北海道松前）へ渡ろうとして比内（大館市）の郎従、河田次郎の本拠に立ち寄ったが、すでに翻意していた彼に殺されてしまった。河田次郎は泰衡の首を頼朝に持参したところ、「不忠者めつ」と即刻、首を刎ねられた。頼朝はこのような裏切りを旗揚げ以来、

実際その目で見てきたし、恩賞も与えてきたので裏切りはまかり通っていたのだが、父義朝の最期と酷似していることについて不快感を催したのであろう。それに奥州武士を軽くみた。一方、河田次郎は長い公家政権体制に懐疑的で荘園社会に批判的であったのだが、頼朝の政治構想に新しい世を夢見、頼朝の到来を待っていたのかもしれない。それが理解されないままに反逆者として処刑されたのであろう。

二十三、一両一石

一両の現在換算高は当時の一両交換相場を当時の一石米価で割ってそれに現在の一石を掛ければよい。例えば、元治元（一八六四）年八月の秋田久保田では、一両交換相場六千四百文を当時の一

石米価一万一千四百文で割って現在の一石米価十万円を掛けるわけである。ところで、現在の米価を十万円にしているが、これは最高価格にラックされた値段である。一九九九年十月現在の秋田駅前スーパーでの米価「あきたこまち」は二キログラムで千百二十八円、「こしひかり」は千二百五十四円である。一キログラム当たりはそれぞれ五百六十四円、六百二十七円で、これの一・五倍が一升の値段になる。米百五十キログラムが一石だからである。したがって、「あきたこまち」一升は八百四十六円、「こしひかり」は九百四十円。一石はその百倍。「こしひかり」がかううじて十万円に近い。尤も、これの最高クラスは十万円をはるかに上回っている。しかしここでは平均値を出さねばならない。平均十万円と踏んだのは現在の為替相場、国際貿易、日本人の食生活、バ

ブル経済崩壊等からくるいびつな米価の修正である。筆者は一石十万円つまり一升千円が妥当な線だと思う。おせっかいだが、一升の十五分の十が一キログラム、計算機なら一・五で割ればよい。つまり一キログラム六百六十六円が妥当な米価と言いたい。

二十四、殿中での大刀

安永七（一七七八）年閏七月十日夜、久保田城は本丸御殿が残らず焼失した。秋田藩主八代佐竹義敦は、この機に城内の廊下往来に大刀を帶することの禁令を発した。それまで一門から宿老級の重臣が大刀を帶していたのである。江戸城内でも見られないこのような慣行がまかり通っていたのは、佐竹の古い体質と言わざるをえない。藩政改

革を標榜する義敦にして、これを改めたのは襲領後二十年目のことである。古い家柄のしがらみであろうか。

二十五、直武のこと

小田野直武の江戸生活は年三十両（三百万円）の支給で、住宅費・食費は無料と、かなりゆとりがあった。それに平賀源内の手伝い分ももらっていたし、彼の描いた絵も売っていた。源内や司馬江漢はそれを世話して上前をはねていた。司馬が二歳下の直武を「先生」と呼んでいたのはこの辺の事情もある。司馬は直武と写生に出掛けては中州でよく飲んだ。直武払いが多かったようである。司馬は悪友だったが、直武はそんな彼が好きだった。安永六（一七七七）年、初冬、直武は遠州相

良へ旅行した。相良は田沼意次の城府で平賀源内に田沼依頼の所用があった。直武は源内に誘われたのである。実は田沼と源内の好意で直武帰国を前の慰安旅行であった。源内はこの時、相良に風を残した。尾の付かない、ビードロの風糸先、特色のある絵などで、今でも源内風と呼ばれている。

直武はこの旅の途中、沼津の黄瀬川で「富嶽図」を描いている。筆者はこの道程をたどって相良を訪ね、黄瀬川では富士を期待したが、夏霞で富士は見えなかった。さて、直武はいい時に死んだと思う。あのまま藩主の側近として長生きしていれば、地位も上がったろうし藩政にも関与したろう。そうなればもはや体制側であって、それまでの合理精神、つまり反骨精神が薄らぐ。また、年齢を重ねるにつれ西洋的なものが日本的なものへ同化されていってあの生々しい蘭画が忘却され、秋田

蘭画の名も直武の存在価値も歴史上に残らなかったかもしれない。三十二歳の生涯は惜しいが十分だった。

二十六、増毛「永寿川」

安政二（一八五五）年、幕府は東北五藩に北海道の警衛を命じる。秋田藩は神威岬から知床に至る海岸線と樺太・利尻・礼文を分担し、増毛に総陣屋、宗谷に出張陣屋を設けることとなった。秋田藩は翌年、増毛へ向けて出発した。この年、越冬した者のうち七十名が病死した。野菜不足のためである。過酷な勤務だった。慶応三（一八六七）年、任務を解かれた。現在、町を歩くと、「永寿川」という川を見かける。橋の袂に北海道庁名の看板が立ってこの川の名の由来が書かれている。「秋

田藩退去の命があつたが、輕輩は希望して脱藩を許可され、増毛に永住しようと考え永住町としてのである。町名設定の時に永寿に成つたのである」。筆者は何ともやりきれない気分になつたのを覚えてゐる。

二十七、近代佐竹北家のルーツ

安永四（一七七五）年四月九日、江戸城内馬屋の馬の脚力を試すため、將軍近習五人がそれぞれ乗馬して鎌倉へ駆けた。小納戸の根来清次郎なる者が滝野という馬で一番で歸つて來た。將軍家治はその者に褒美を与えた。小納戸に庭方・馬方の役目がある。庭方は吉宗時代、隱密として有名な御庭番家になる。根来清次郎家は本国が紀伊、嫡子役職は小納戸、この時、清次郎は多分馬方なの

であろう。後に内膳正長郷を称し禄高五百石、寛政十一（一七九九）年に田安家の家老なる。屋敷は神田駿河台袋町、菩提寺は市ヶ谷光徳院である。他に根来家は四家ある。文久二（一八六二）年、佐竹北家へ養子に入つた根来盛実二男の采女家はこれら根来家の宗家に当たり三千四百五十石、役職は寄合、屋敷は本所石原、菩提寺は白銀瑞聖寺。

二十八、宝暦十三年の不作

八代藩主義敦の宝暦十三（一七六三）年、秋田領内は不作でその損失高はおよ十三万二千余石であつた。これはその数年間における最高額であつた。因みにその数年間の各年の損失高は次のとおりである。

宝暦八年 五万三千五百余石

宝暦九年 五万余石

宝暦十年 八万八千七百七十余石

宝暦十一年 六万七千余石

宝暦十二年 記録なし（推定、平作）

宝暦十三年 十三万二千余石

この損失高は毎年冬期に入ると幕府老中に報告しているものである。十三万二千余石の損失高は役高二十万五千八百石の六十四％ということになって大変な額だが、実高は役高の四倍以上はあるから仮に八十万石とすれば十三万石の損失高は十六％である。

二十九、北浦讃

横手盆地は雄勝、平鹿、仙北三郡にまたがり太古は湖だった。今なお用いられている上浦、北浦

の呼び方はそれに由来する。上浦が雄勝、平鹿郡であり、北浦が仙北郡である。北浦をさらに前北浦、奥北浦と分けて呼ぶこともある。秋田藩は近世全国一の米どころ、北浦は六郡一の穀倉地帯。「吹けやおぼねだし七日も八日も吹けば宝風稲実る」この在郷唄は天正の頃から奥北浦で唄われてきたという。むべなるかな。今に残る角館の京文化は京に母を持つ京生まれの佐竹義隣に芽吹いて京より妻を迎えた義明へ発展し、京育ちの母に教育され感化された義命へ伝承するという実に三代にわたる結実だった。安永二年、源内と直武の奇しき邂逅はこの地に秋田蘭画の発祥をみた。これも京文化の素地があつたゆえだろう。しかし、角館を濃くのある文化の町に醸成したのは中世の戸沢氏まで遡る北浦文化が奥の盆地であるからこそ沸々と発酵したのかもしれない。

三十、近世戸沢氏の軌跡

関ヶ原合戦前に上杉の動向を家康に内報した者の中に、出羽角館の戸沢政盛がいた。政盛の父盛安はわずか三十歳前の若年ながら、天正十八年の小田原の役に出羽の山奥からはせ参じ、六月十六日陣中で病没したが、家督は弟光盛が継いで、秀吉はその本領を安堵した。この光盛も、天正二十年名護屋陣中で十七歳の生涯を終えたので、盛安の遺児、政盛が後嗣となった。慶長五年八月十五日、政盛は角館を出発し、九月三日江戸到着、休む間もなく西上した。家康の後を追いつき、同七日雨で増水した大井川を馬で渡河し、金谷で家康に謁見、同十五日関ヶ原で家康に従軍した。慶長七年常陸松岡四万石、元和八年出羽新庄六万石、寛永二年六万八千石、徳川譜代帝鑑間詰め。戊辰の役にはいち早く秋田藩に付き

その勲功により、明治二年八万三千石、子爵。

三十一、佐竹の幼君

佐竹家では藩主を八代から十一代まで四代連続して幼君が襲封しているので、一門の実力者が摂政となつて政務をみている。宝暦八（一七五八）年から約百年間、幼君・摂政の時代が繰り返されている。八代義敦には祖父の隠岐家二代義道が、九代義和には叔父の左近家初代義方が、十代義厚には従兄の鼎義路（義方の子）が、十一代義睦には隠岐家六代の義純が摂政となっている。相次ぐ幼君の出現はその父親の若死が理由である。二代義隆から十一代までの平均寿命は四十・三歳で、これは二代から七代義明まで行われた近親結婚に因るものである。八代に至つて悪性遺伝子が凝集さ

れて現れた。因みに八代から十一代までの平均寿命は三十三・三歳、その襲封時年齢は八・五歳である。無名佐竹と言われても当然である。

三十二、安政五年の久保田大火

安政五（一八五八）年八月六日、久保田に大火があった。『秋田沿革史大成』に書かれてある記録を見ると町名・町並みが懐かしい。「八月六日夜四ツ時、秋田町（久保田町）下亀ノ丁ヨリ出火。亀ノ丁両側、田中町両側、柳町半分ノ両側、上肴町左右、茶町三丁左右、末ノ丁（梅ノ丁）両側六七戸残。大町通り四丁目迄無残、四丁目東ノ六七戸残。通町南方無残、大工町南ノ方半分、一丁目川反残ラズ。二丁目川反四五戸、二丁目末方少々残シ、翌七日昼四ツ頃鎮火。実ニ未曾有ノ大

火ナリ」。消失戸数が七百八十四戸というから外町の半分以上は焼けたことになる。しかも、大町・茶町・通町・川反という大店のある町だけに秋田藩の経済には大きな痛手となった。前年、義堯が藩主襲封していた。

三十三、義堯は江戸生まれの江戸育ち

「文政八酉年四月二十六日、殿様（相馬益胤。佐竹義堯実父）江戸御発駕、五月四日御着城。」（同年）七月、御内証女中御男子（義堯）御出生。」（文政十亥年、寛次郎様（卓胤。後の佐竹儀典）、亀三郎様（義堯）右御二方様御本城（江戸）御一所御生育。」以上の三文は相馬藩の記録から抜粋したものである。これをもって推測するに、秋田藩最後の藩主である佐竹義堯は江戸生まれの江戸育

ちということが分かる。因みに彼は益胤三男で兄二人が本腹、彼は妾腹であつた。*御内証女中は側室・妾。御証人は人質。

三十四、秋田美人由来

中世、日本海沿岸の住民、たとえば秋田の人間は十三湊、奥尻島、利尻島、礼文島と伝わって樺太の西海岸を北上し、大陸へ向かう航路があつた。樺太沿岸では白主、真岡、久春内、鵜城、トツシユカウ、ノテト、ラツカと立ち寄つた。樺太北端に近いナニオーから狭海峡を渡り黒竜江を遡つた。なんと間宮林蔵がこの海峡を発見するより数百年も前のことである。黒竜江を遡つた船はデレンの町で交易した。だから行く先々では日本語、たとえば秋田弁が通用していた。また、日本海横断は

太古からあつた。日本たとえば秋田からは季節風の変わり目を利用して南下し、途中で北上して沿海州に到達した。彼の地からはこの逆である。その途中の地点が竹島だった。竹島は風待ちの役目をした。朝鮮半島沿岸を南下して太宰府を目指した渤海使節が遭難して出羽海岸に漂着した航路である。それは太古からの人間の本能だった。ちょうど、鳥や魚のように風に送られ潮に乗って移動した。それが大自然の営みである。だが、人間の知恵というものが、その後、長い間この営みを阻んだ。太古、沿海州の人達は日本海を渡って日本たとえば秋田へやって来た。現在、日本海側に美人の多いのはみなその頃の大陸から渡来の子のせいであろう。北朝鮮系、満州系の人間にはペルシャ系の血も入っていた。あるいは白人そのものもいた。それが日本海沿岸の鬼伝説につなが

る。その彼らが日本海沿岸で、少ない日照時間、多湿、先住民との混血から肌白の美人をつくったものと思われる。シーボルトは日本の第一印象に白っぽい日本人を指摘したが、それは日本海美人系であろう。中でも秋田美人は有名である。先年、韓国人四名が筏でウラジオストクから釜山へ向かい、嵐のため山陰海岸に漂着したというニュースがあった。これは小舟でも日本海の横断可能という証拠をみせてくれたことでその意義は大きい。大陸と日本との海洋横断は有史以前からあったと断言できるからである。無論、縄文前期どころか一万年以上も大昔からである。この日本海の大口マンを実証してくれた韓国人に続く日本人たとえば、秋田県人有志を期待したいものである。いや、秋田美人検証の一環としてこれは秋田県人の責務かもしれない。*世に言う「秋田美人」は近代大

正時代の川反芸者が由来。

三十五、太閤相場

天正十六（一五八八）年、豊臣秀吉は賞賜・贈答用に大判を製造した。金四十四匁で十両である。これを金一枚と呼ぶ。これにならって銀一枚というのがあつた。銀十両のことである。銀は伝統的に一両が四・三匁だったから、銀十両は銀四十三匁である。これは金一両とされていた。つまり、銀四十三匁が金一両の交換レートだったのである。それを秀吉は大判製造を機に金一両を銀五十匁のレートにした。そもそも相場とは経済の成り行きである。それを秀吉は人為的に定めた。銀安・金高である。銀建て経済の上方つまり秀吉自身も、これによって輸出産業の利益が増大

した。それとは逆に地方からの輸入は権力と資本力で安く買い叩いた。この辺の事情は文禄三、四（一五九四、九五）年における出羽国安東氏の木材輸送に関する会計記録からも容易に推測できる。

秀吉が金一両を銀四十三匁から五十匁にした太閤相場とでもいべき銀安レートは、秀吉没後も大坂商人に受け継がれ、元禄十三（一七〇〇）年には幕府公定相場が金一両＝銀六十匁になった。それ以後は、金銀の公定相場は変わらなかったが、今度は庶民の通貨である銭が物価高から安くなり、幕末に向かって加速していく。秀吉が大判を製造し太閤相場をつくった天正十六年は、もしかしたら近世上方の銀建て経済の年だったかもしれない。なお、秋田は古くから上方経済圏に入り銀建て経済であった。それは日本海の海上交通に因るものであるが、その点、同じ東北でも出羽は陸奥

より中央に近く情報も速かった。

三十六、日本海の鬼伝説

日本海沿岸の原日本人は鬼の襲来におびえた。鬼は隠が変化したものである。これが仮名で表記されると、「ん」は後代の平安時代に作られた文字であるから、これに代わる文字として「に」を充てて「おに」と書かれ、それでも初めのうちは「おん」と発音したであろうが、いつの間にか文字どおりに「おに」と言われるようになった。「隠」は「隠れて人の目に見えないもの」という意味で、つまり妖怪に見えるほど異様なまで大きな人間だったのかもしれない。現在に残る秋田の男鹿のなまはげやその他、佐渡・能登・丹後・隠岐などの鬼伝説はすべてこの類であろう。この鬼その

ものが沿海州に住み着いた碧眼紅毛の中央アジア人（ペルシャ系白人種）や原沿海州人との混血人種だったに違いない。

三十七、種族維持の人身御供

中世、出羽国の農山漁村では、よく娘や嫁を修験者や旅僧に一夜提供したものである。時には石女の自分の妻ということもあった。しかしこれは決して所謂人身御供^{ひとみごかう}ではなかった。もつと積極的であった。現在で言えば遺伝子の問題と深く関係している。長い間の同族同士の婚姻の結果、虚弱な遺伝子となって子を生ず力を失った。遺伝子が近いものを拒否し遠いものと結び付くという自然の理に反していたからである。だから、遠い遺伝子を有する修験者・学僧・公家・武将・他国者に

一夜結び付けて自分達の種族維持を図るのは神の摂理でもあった。合戦の後に負け組の女性を奪ったり、盆踊りや祭礼の夜の群婚などはこの類であった。同族同士の婚姻は原始民族でも知っていたようでタブーとされていた地域もあった。

三十八、要害椿台

椿台は西の雄物川、北東の岩見川に挟まれた出羽山地の北端に位置する。慶応四（一八六八）年三月、佐竹義堯は分家隠岐守家二万石をこの地に封じ築城した。ここは見渡す限りの原野だったが、やがて小市街地の観を呈するようになる。民家の多くは長屋造りで内町・外町に分かれ、内町は約百五十戸、外町は百五、六十戸を数え、城郭の周囲は土塁を巡らし、番所は四ヶ所に置いた。城内

には馬場を造り水道を敷設した。台地の東下に戸島村があり羽州街道が走り、岩見川が流れ、大昔から交通の要衝であった。しかも東西の出入り口が狭く、そこをまた岩見川が遮断しまるで漁網を思わせる。実に要害の地でもあった。「此処と向かいの豊島城址に配陣すれば下は袋の鼠だ」と義堯は最後の決戦場をここに定めていたのである。

三十九、義堯隠居の動機

明治五（一八七二）年三月、佐竹義堯は中城御殿を引き揚げ家族と共に東京に移転した。既に旧藩主東京移住の詔勅が下っていたのである。これは一種の人質政策であった。政情不穩の折柄、旧藩主と旧家臣の接触を警戒し旧藩主を東京の監視

下に置くのが狙いだったのである。したがって、かつての家来達が旧主に会いに来てもし会いたがらなかったのはこのためである。八坂丸事件に端を発した一連の事件は佐竹下ろしに結び付いた。なにしろ上方・西国人でなければ人に非ずという当時であった。所詮、戊辰の役の秋田は彼等の道具に過ぎなかった。八月二日、義堯は突如隠居した。相次ぐ不祥事に何一つ解決のできなかった自分の無力さに腹も立ったが、心底は西国閥政府に対するせめてもの反抗だったかもしれない。

四十、戸村の判断

秋田戊辰の役が始まるや戸村十太夫は生涯蟄居の処分を受けた。奥羽列藩同盟に与したのはすべて戸村個人のしたことという罪であった。そうで

はない。彼は藩主義堯と同様、単純な主義者ではなかった。勤王であつて勤王にあらず、佐幕であつて佐幕にあらずの是々非々論者であつた。そうやつて緩やかに改革していく穏健派であつた。だからあの会議における状況によつてどうなるかは予測できなかった。義堯は万事戸村に一任したのである。ただこの二人の考えはあくまでも朝廷による政治を第一に立てそのもとに徳川はじめ諸大名が同列に政治に参与するのであつて突出をみとめないものであつた。戸村が同盟に捺印したのは会議中、薩長に容認できない突出が各藩から出されたのを彼が判断したからである。

四十一、渤海憧憬

神亀四（七二七）年八月、男鹿海岸に二十四人

の渤海使節が漂着した。朝鮮半島に沿つて日本海を縦断し太宰府に向かう予定が嵐に遭つて漂流したのである。日本海は北方の荒海のため、その横断は不可能とされていた。だが延暦二十三年（八〇四）年、日本政府は能登国府に渤海使の宿泊用客館を造るよう命じている。日本海横断ができたためである。それならば秋田が最短距離にある。ただ、あまりにも僻地であり、中央政府にいまだ服従しない蝦夷も多かった。渤海が九二六年に契丹国に滅ぼされるまで約二百年間、三十四回の使節の来航と貿易が続けた。この海の彼方からやつて来る人間に日本海沿岸の住民は測り知れない魅力を抱き、その後、幾年経ても渤海の名は消えず、いつかは彼の地へと今日まで夢み続けている。

四十二、招魂社由来

佐竹義堯は戊辰の役戦没者の靈魂を祭祀する堂宇を建てようとする場所を寺内村の両津五輪山東南の勝地に選んだ。明治元（一八六八）年十月四日、地ならしを開始した。この日、久保田・土崎その他近村の有志者が積極的に奉仕し女性まで土砂の運搬などに協力した。義堯自身鋤を持った。翌五日には養子の義脩も現場に現れ自ら土砂を運んだりして大いに士民を激励した。この時、諒鏡院や義堯の二姫現場に顔を見せ華奢な体にもかかわらず手ずから土砂を運搬した。これを見て士民は涙を流さんばかりに感激して作業に励み、これを聞いて農民は近村各地から隊伍を組み大旗を立てて奉仕に群集した。この作業は十一月五日で終了し、あとは社殿を建てるばかりとなった。

四十三、関西と秋田の経済力

元治元（一八六四）年、秋田藩主の佐竹義堯が大砲六門を引き、マタギ（獵師）百余人を引率して上京した。この時、京坂の商人から調達した金額は鴻池以下十五人の計七十一万五千両だった。これに対して国許の久保田では、六十四人の商人の合計が四千百五十二両である。なんと京坂商人の〇・五八パーセントである。いや、京坂商人一人平均の四万五千両にも久保田商人の合計四千百五十二両は遠く及ばない。因みに久保田商人の一人平均は六十五両である。知ってはいたが関西と秋田の経済力の差がこれほど大きいものと改めて驚かされた次第である。*一人平均は京坂商人の〇・一四パーセントが久保田商人。

四十四、不可解な列藩同盟

秋田藩が奥羽越列藩同盟から脱退したことにより同盟側から卑怯者呼ばわりされ彼等らの総攻撃を受けることになるわけだが、その彼等が肝心の会津応援を忘れたかのごとく秋田に侵入しついに秋田攻めに終始したのは非常に理解できないところである。それでいて会津戦線には情報のアンテナを張り、会津の雲行きが怪しくなると逸速く米沢藩が降伏し仙台藩がそれに続いた。これこそ裏切りと呼ばないで何と呼んだらいいのだろうか。しかもこの両藩は同盟の首謀者なのである。もし秋田藩が同盟側にいたら秋田領内に侵入した同盟軍は挙って会津戦線へ赴いたであろうか。また、会津の陥落後、自分達の領内へ進撃して来た官軍と最後の一兵まで戦ったであろうか。独り律儀な

秋田藩が官軍に降伏した奥羽諸藩にも攻め立てられたであろう。

四十五、お人好し

日本人は世界一お人好しである。その日本の中でも秋田県人は一番のお人好しである。それは戊辰の役このかたの秋田人を見れば一目瞭然である。とすれば、秋田人は世界一のお人好しということになる。中世の秋田は隣国豪族の草刈場であつた。そこに育つた領民の事なかれ主義はその風土性と相俟って楽天的な人間になつてしまつた。決して裕福ではないが、争わず、騙さず、疑わず、面倒をみ、威張らず、恨まらずにどうにか暮らしてきた温和な土地に秋田人は慣れていた。この土壤に培つた好人物達の世界が常陸からやつて

来た戦国の猛者佐竹家臣団をも同化してしまった。だから秋田の人間は他人を蹴落として偉くなったたり金持ちになったりする必要がなかった。考え方だが、これが最も理想的な人間社会の営みかもしれない。

四十六、久保田城の表門

城門で枅形門というのがある。二つの門を直角に配して四方を石垣で囲む。城の外側一の門を高麗門、城の内側二の門を渡り櫓門としているのが築城の常識である。渡り櫓門は多聞長屋をつないでいる。土塁の城では渡り櫓門の建築が不可能だから、二の門を古式な楼門か薬医門にしている。久保田城は土塁でできているので、絵図によれば二の門は渡り櫓門の代わりの二階重門である。た

だしこれは外堀門が該当するのであって内堀門と本丸門には一定の形式がない。そのところが他の城と違って変形である。なお、本丸表門を藩政時代から一の門と呼称しているのは枅形門の一の門とは違う。城内随一の門という意味である。平成十三年三月に復興された表門の構造の名称は入母屋造り三間重門である。三間とは正面四脚の間。
*佐竹は一の門を城の内側、二の門を外側にして
いる。

四十七、分かりにくい役職名

秋田藩の役職の中で本方奉行というのがある。これは秋田藩独自のものらしく分らない人が多い。本方奉行職は元禄十五（一七〇二）年にできたもので、それまでは家老支配下の財用方が担当

していた。勘定奉行とどう区別されるかといえば、勘定奉行が財政全般なのに対して本方奉行は年貢諸役 of 収支が主である。だが時には財用奉行と替わったりした。そして文化年間以降は本方奉行の名はすっかり消えて、財用奉行になっている。惣山奉行も本方奉行と同様、秋田藩独自の役職名であろう。惣山方は鉾山と林山を支配する役目であるが、元禄十五（一七〇二）年に廃止されて、木山奉行と金山奉行に分かれる。

四十八、「島」のつく地名

「島」のつく地名は一般的に二つの川の間が由来である。有名なものでは大阪の中之島、信州の中島である。秋田市周辺では茨島が雄物川と猿田・太平川の間、牛島が猿田川と太平川の間、福島が

猿田川と旧雄物川（二ツ屋潟）の間、山王中島が草生津川と雄物川の間、千秋中島が旭川と外堀（旧旭川）の間である。また、蛇行によって一つの川に囲まれた地も「島」の名がつく。飯島は新城川の蛇行により、戸島は岩見川の蛇行によってつけられた地名である。だから、中世豊島村は戸島城と共に岩見川に大きく囲まれた地帯で城と村は地続きであったはずである。岩見川はもともと西方の椿台寄りを流れていたと推定される。蛇行に囲まれている地帯を「袋」と呼んでいる所もある。

四十九、十三湊の大津波

中世、津軽の十三湊に大津波が襲来して安東氏居城をはじめ人家を一呑みにした。その跡は荒廃の砂地となった。安東氏はこのため松前へ移住

したと言われている。実は、嘉吉三（一四四三）年、南部勢による十三湊陥落を安東氏が大津波という自然災害に置き換えたのである。安東氏は南部氏に追放されたことを認めたくなかったのである。これが伝説化し、まことしやかに後世に伝わることとなった。南部氏の十三湊攻めは永享九（一四三七）年から始まり、先ず、平城居館の福島城を落とし、六年間の攻防戦の結果、山城要害の唐川城（青森県北津軽郡市浦村）を奪取した。だから、伝説の大津波襲来はこの六年の間だと思えばよい。これが下国家安東氏で、やがて松前から秋田へ進出して檜山安東氏となる。

五十、二重スパイ福助

ある日、司馬が留守の時、源内は直武とぶらり

浅草へ出た。仲店をひやかしながら観音様へお参りすると、「総泉寺へ行こう」と源内は突然思いついたように、すたすたと橋場の方へ向かって歩いた。総泉寺は佐竹氏の菩提寺である。宗派は曹洞宗、所在地は現在の台東区橋場二丁目である。二人は聖天前から隅田川に沿って今戸町、錢座を通り過ぎて橋場町に出た。ここは新吉原に近く、遊郭帰りの者が総泉寺の梵鐘の音を聞いて懺悔の念に駆られたという。佐竹氏の江戸菩提寺で、死去した藩主・正室・側室・子供等がここに葬られている。藩主の場合は秋田で死去しても総泉寺でも葬儀を行い、正室の場合は江戸での死去なのだが江戸死去の藩主同様、秋田の天徳寺で本葬をおこなった。家臣でもここに葬られ墓石も建つことがあった。源内は片隅に立っている墓石へ直武を案内した。「秋田藩家来 福助」。「あつ、あの福

助の墓でござるか」と直武は驚いた。「去年正月、武助あんが、福助が暮れに急死したってえことを三味線堀で聞いた話、俺ら信じられなかったが、やはり本当だったんだなあ。」「お留守居はどう言っておりますか。」「留守居役も岡持さん（平沢平角）も詳しいことは分からねえって言うんだよ。福助を推薦したなあ太田伊太夫さんだが、伊太夫さんもそんな時あ秋田へ行ってたんでちつとも知らねえってえわけさ」。源内はそう言って「もしや殺されたんでは」と思ってみたがその理由が考え付かなかった。太田伊太夫も源内と同様なことを思っていた。が、こっちははつきりと殺害の理由は分かっていた。隠密の源内に対する隠密という行為を田沼に感づかれてはまずいと判断した江戸家老の余計な仕業に違いないと伊太夫は思ったのだ。

五十一、国名と苗字

秋田県内の苗字には日本海航路に関係しているものが目につく。北陸の越後、佐渡、越中、加賀、能登、越前、若狭の旧国名が苗字にすべてある。山陰でも丹波、丹後、但馬、因幡、出雲、隠岐、石見である。伯耆だけがない。さらに、瀬戸内海に入ってもすべてではないが、長門、備前、播磨、四国の讃岐、淡路、それに土佐まである。そして、近畿の山城、大和、河内、和泉、攝津や近江、美濃、伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河である。このほか、国名ではないが、港町名も多い。須磨、明石、赤間、輪島、敦賀、三国、安宅、柏崎、直江、村上、酒田、吹浦、深浦等。なんと、移住の大口マンが日本海上に繰り広がる

五十二、秋田蘭画発祥の瞬間

「小田野あん、あんたあいい腕してるねえ。あれほどの上手あ江戸にも滅多にいるもんじゃあねえ。大いに気に入ったぜ。どうだい、もうちつとばかり上手にならねえかい。あんたがその気なら伝授しても構わねえよ。」源内はまず、江戸下町のくだけた職人言葉で直武の度肝を抜いた。直武は息を呑んだきり源内を見つめるばかりであった。「天下に名だたる平賀先生より御伝授賜わらば身の誉れこれにすぎたるものはございませぬ。ぜひ御教えいただきたくございます。」直武は挨拶程度のお定まりの文句を並べた。「されば、鏡餅を真上より、いいかい、真上からだぜ、真上から見た図を描いてもいいやしょう。」と源内は言つて当家の主には画紙と絵筆を頼んだ。直武は「鏡餅

を真上から見るとつまらねえ。あれは横か斜めから見た図が常道だ。それどごなして真上がらだど？」と不思議に思った。「二重丸描けばええのが。それだば図面と変わらねえ。まさか図面どご描かせでえのが」と直武は源内の意図を忖度した。「はあ、読めた。図面と絵の違うどご言いでえのだな。それだば二重丸さ色付ければええ。餅は白く見えるが色はある。しかも濃淡がある。それに影もある。だがそれどご描けば平賀先生が俺さ教えでものがねぐなるかもしれねえ。ここは遠来の高名な客さ花持だせ、わんざと二重丸の図面をば描いで教えでもらうどごにするが」。直武は二重丸を描いた。源内はそれを見てニヤリと直武を見た。直武は微笑みながら源内の眼をじいつと見返した。その眼には「なぜ無造作に二重丸を描いたか分かるかな」という謎があった。天才源

内がこれを見逃す筈がない。「俺の意図を見抜いておるようだ。それならば理で通そう。まず手順として二重丸に濃淡と陰影を付けよう」と彼は筆先に墨を含ませた。「小田野あん、これじゃあ盆であるか輪であるか、ちつとも分からねえ。まあ、俺らのを見ておくんなあい。」直武はあまり上手でもない源内の筆遣いをじいっと笑いを堪えて真面目を装って見た。源内は筆を置いて直武を見た。「やはり俺の思った通りじゃ。何も感じ入っておらん」。それから源内は滔々^{とうとう}とオランダ画の陰影法をしゃべりまくった。直武は歴史と理屈には弱かった。「このお人は絵え描ぐより絵えしゃべるほうが得意だ」と興味を持ち出した。「小田野あん、狩野流なんざあ、従前、絵を習う者の多くあ、まず『四君子』より入りやしよう。それから『運筆骨法』ってえやつだあな。だがね、物の

形を写し取るなあ決してそんな筆法ばかりじゃあねえ。線よりあ色だね、明暗だあね。論より証拠、ほれ、行灯の光りで俺らの面あ明るい部分もあらあ、暗え所もあるだろう。オランダ画の妙味はそこだよ。」「理にかなってる」。直武は源内の弁舌にしだいに圧倒されていった。自分はそんなことを分からずに線を使ったり影を落としたり色を施したりしている。しかし、こう、理をもつて、あれこれの流派を取り混ぜてきた己の絵が整理されたような気がして頭がすっきりした。「この人は、俺の絵の師匠になりうる。それも技ではねぐ頭の師匠だ」と直武は思うようになった。「小田野あん、ここに紅毛の図譜がある。何ね、佐竹侯へ進物として持参した物だがね。こいつを見るといいや。この中にある挿絵は真に迫っていらあ。俺らあ、こいつを初めて見た時あ、驚き桃の木山

椒の木だったね。ふっふ」と源内は江戸の粹人を真似たような笑いをした。直武はページを繰っていくうちに狂喜の眼に変わっていった。

五十三、鎌倉御家人の秋田下向

文治五（一一八九）年、八月、源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼしてその領地を御家人に分け与えた。その中で現在の秋田県内にも数多くの家が入り込むことになったが、ここでは戦国末期まで名を残した家についてその本拠地と秋田下向の経路を探ってみることにする。

（浅利氏）

浅利氏は甲斐国浅利郷（山梨県中央市浅利）が発祥の地で甲斐源氏である。初代が浅利遠義という。源頼朝から比内郡の地頭職に補任されたが、

当初は一族・代官が移住して収めた。この例は他のすべての鎌倉御家人も同様である。浅利氏の場合は南北朝期（一三三六―九二）に武田氏の進出に押され北奥の領地へ下ったと思われる。浅利清連が建武政権時より南北朝期前半にかけて北奥で活躍した記録がある。ただし清連は庶流と思われる。どの経路をたどって下ったかミステリーだが、おそらく甲斐国から武蔵国へ出て、下野国を経て白河の関を通過し、奥州道を北上し鹿角盆地に入り、米代川を下って比内郡に到達したものと推定される。

（小野寺氏）

小野寺氏は藤原秀郷流で下野國小野寺保（栃木県栃木市岩舟町小野寺）が本拠地である。通綱四代あとの経道の時、領地出羽国雄勝郡へ下った。経道は三浦泰村の二男といわれ、宝治元

(一二四七) 年の宝治合戦で三浦氏滅亡後、領地のあった雄勝郡へ逃れたのが真相であろう。しかし、北条得宗家の支配を受けたのは当然である。それが建武政権の成立後、旧領が返還され再び雄勝郡の支配を回復した。小野寺経道は現在の山形県新庄市、金山町を経て有屋川を遡って峠(山形県側では有屋峠、秋田県側では役内峠と呼ぶ)を越え、役内から役内川に沿って横堀へでたものと思われる。これが中世の羽州道である。なお、後世、羽州道は慶長八(一六〇三)年に佐竹義宣の開發で院内峠越えに替わった。三角形の一边で院内峠經由のほうが役内峠經由より距離が短く、標高も院内峠役内峠より低かった。それにもかかわらず、中世において役内峠が本道であったのは院内峠の比高(麓からの高さ)が役内峠より高く勾配もきつかったからであろう。つまり院内峠のほ

うが難険だったのである。しかし、どっちにも言えることは川に沿って上り、川に沿って下っていることである。院内峠經由では、真室川を上って峠へ出、銀山川、南沢川を下って雄勝郡に入る。(戸沢氏)

戸沢氏は、平貞盛の流れを汲む平衡盛が鎌倉初期に陸奥国岩手郡雫石の戸沢郷(岩手県岩手郡雫石町西安庭字戸沢)に拠って戸沢氏を称した。奥州下向前の本拠地は不明であるが、頼朝から当地を与えられて間もなく下ったものと思われる。鎌倉期に入って平姓を名乗る数少ない武家であるが、同族に平頼綱という北条氏得宗家の内管領となった有力な家系が鎌倉後期まで存在しているところからみて落魄の奥州下りではないだろう。おそらく関東・甲信にそれまで所領はなかったのかもしれない。たとえあったとしても微々たるもの

であつたらう。因みに、平頼綱は永仁元（一二九三）年四月、得宗北条貞時によって殺されている（平頼綱の乱）。戸沢氏が雫石に土着して百年も後のことである。だから落魄の奥州下りではないと推測する。戸沢氏の落魄は雫石からの出羽移住こそ当てはまる。衡盛の子、兼盛の時代に山一つ越えた出羽国山北の山本郡門屋城に移って出羽進出の基礎を固め、十五世紀初期、家盛の代に菅利邦を追放する形で角館に本拠を構えたとされるが、実は南部氏の勢力に押されたのが一番の理由だろう。それに、戸沢氏の仙北移住については従来齟齬するところがあつたので、もう少し詳しく述べて整理してみたい。南北朝期の戸沢氏は南朝方に属した。西根に要害を築き、南部氏と共に岩手・斯波・稗貫・和賀を転戦した。興国二（二三四二）年、稗貫氏を破って多賀国府を目指したが攻略は

できなかった。正平元（一三四六）年、南朝の将、北畠顯信がこの頃から雫石に亡命生活を送っている。正平四（一三四九）年、足利方の吉良貞家が雫石攻めを命じ、戦闘は翌年まで続いたが、攻略されなかった。それ以後しばらく、雫石や戸沢氏の事成績は不明である。応永三十（一四二三）年、戸沢氏の庶流が出羽国山北の横手盆地北端、角館に移つたと言われる。天文年間（一五三二～五五）、雫石盆地では雫石城主手束左衛門尉、長山の長山某、戸沢館の戸沢某が互いに確執を繰り返していた。天文九（一五四〇）年、南部晴政が雫石に出兵、雫石城は焼け落ち、戸沢館の戸沢政安は館に火を放ち出羽国の庶流の許へ逃亡する。以後、角館が本拠となる。この中で応永三十年の戸沢氏の出羽移住だが、実はそれよりだいぶ以前、すなわち雫石に土着した頃から庶流により始めら

れていた。建永元（一二〇六）年、戸沢兼盛の代に羽州鳳仙台（秋田県仙北市田沢湖町玉川付近）へ、その後、小館（同市西木町上桧木内字戸沢）へ進出する。承久二（一二二〇）年、門屋（同村）へ移住した。安貞二（一二二八）年、小山田の高野（同村門屋地区内）に城郭を築き居住する。応永二十八（一四二二）年、角館に移住する。一説に応永三十年とも、天文九年とも言われるが、本

宗の移住が南部勢に攻略されて落魄の天文九年とすれば納得がいくだろう。さて、戸沢氏の角館の

経路だが、現在の雫石町西安庭字戸沢から雫石川、志戸前川、龍川に沿って国見温泉を通過し、龍川の源流から奥羽山脈の分水嶺を越えて出羽国の小和瀬川の源流にたどり着く。小和瀬川を下って大深川の合流点、鳳仙台に至る。そこから現在の西木村上桧木内字戸沢へ移り、承久二年には門屋に

居住、築城。そして応永二十八年、庶流の角館定着となる。

以上、移住の経路でも分かるように川が重要な役目を担っている。移住が勝者であれ、敗者であれ、川は人を案内し、道を造り、盆地を潤し、村を形成し、文化を運び、そして平野に恵みを与え、海を生かす。

（由利郡諸豪族）

由利氏子孫の滝沢氏を除いたほとんどが信濃国の小笠原・大井・根井、各氏の子孫である。鎌倉初頭、小笠原氏が由利郡地頭職に補任された後、一族・代官が移住したことは他の例からでも推定できる。小笠原氏は清和源氏で加賀美遠光の子、長清が甲斐国小笠原（山梨県北杜市明野町小笠原）を本拠地とした。南北朝期、信濃国守護なり以後世襲。一四〇〇年代中葉、深志家と松本家に分裂

し、松尾家は武田氏に服属、深志家は武田氏に敗れて越後へ逃れた。さらに由利郡の領地を頼ることになる。その経路は海路である。由利郡初豪族は次のとおりである。仁賀保氏、子吉氏、潟保氏、滝沢氏、矢島氏、玉米氏、下村氏、石沢氏、打越氏、赤尾津氏、羽根川氏、岩谷氏、鮎川氏、芹田氏。

第七章

続老いの繰り言

一、佐竹家臣団の苗字

佐竹家臣団の苗字のほとんどがその発祥地に由来する。大別して茨城・栃木・福島県、それに国替え後の地元秋田県になるわけだが、ここでは常陸時代の家臣団について述べることにする。

(一) 茨城県地名

石塚、大山、小場、戸村、今宮、小野岡、小野、古内、結城、真壁、小田野、小瀬、大和田、大貫、小貫、太田、川井、町田、手賀、天神林、那珂、大窪、宍戸、信太、藤井、茅根、宇留野、久慈、金沢、真崎、細谷、細井、深谷、馬場、酒出、瀬谷、介川、国安、小野崎、前小屋、根田、中村、和田、中田、坪、富岡、棚谷、前沢、川和田、岩間、青柳、小沢、荻津、秋山、大沢、菅谷、枝川、小泉、入野、大森、田崎、中沢、川又、寺崎、根本、磯

野、谷田部、滑川、月居、蓮沼、平塚、平山、八代、平沢、松塚、武石、岡田

(二) 栃木県地名

佐良土、武茂、松野、茂木、塩谷、皆川、宇都宮、忍、芳賀、赤石、益子、玉生、渋江、荒川、生田目

(三) 福島県地名

小峰、大越、竹貫、箭田野、小野、古尾谷、赤坂、浅川、石川、長沼、八槻、上遠野、荒田目、御代、羽生、長沢

二、秋田藩三大家老職家の発祥地

向、渋江、梅津氏が秋田藩三大家老職家である。いずれも先祖は戦国末期に佐竹を頼って来た外様であった。佐竹義宣が秋田国替えになった時、扨従してめきめき頭角をあらわした。いずれも初

代藩主義宣時代に家老を勤めている。中土橋搦手門内東西にそれぞれ馬出しを兼ねた広大な屋敷を持つ梅津・渋江両氏、上土橋大手門内に同様の屋敷を有する向氏は幕末まで揺らぐことはなかった。以下、あまり知られていないこの三家の発祥地について述べてみることにする。

（向氏）

初代は飛騨国桜洞（岐阜県下呂市萩原町）城主三木真頼の二男で小鷹狩（岐阜県飛騨市古川町）城主小鷹狩政宗と称した。小鷹狩一帯を向小島とも呼んだので向氏のある。天正十三（一五八五）年、前年の小牧・長久手合戦で三木氏一族は徳川家康に付いたため、豊臣秀吉の命を受けた金森長近に滅ぼされて牢人となり、常陸国の佐竹氏を頼って義宣に仕官し宣政と改名した。幕末小鷹狩を名乗る。

（渋江氏）

渋江家の発祥地は下野国都賀郡小山莊渋江郷（栃木県小山市渋井）である。渋江は渋井とも書き中世の時すでに混同されていた。小山市内を流れる思川の西岸に位置し、北は島田村、南・西は立木村だった。天正三（一五七五）年、主家小山氏が北条氏に攻略されて常陸の佐竹氏に逃れた。渋江氏光が随従した。天正十（一五八二）年、北条氏から小山城を返還され小山秀綱は帰城したが、渋江氏光に先見の明があつて常陸に留まり佐竹氏に仕えた。大坂冬の陣で戦死した秋田藩家老の渋江内膳の実家荒川氏の発祥地は渋井村と同地域の荒川村で思川西岸に位置し東は島田村、西は松沼村、南は立木村、東南が渋井村である。現在の栃木県小山市荒川である。天正三年、荒川筑後守秀景が渋江兵部大輔氏光と共に常陸の佐竹を

頼った。以後、渋江氏と行動を共にする。文禄二（一五九三）年に長男弥五郎が渋江氏光の養子となり政光を名乗る。これが検地で名高い渋江内膳である。

（梅津氏）

梅津家の発祥地は佐渡ヶ島梅津村（新潟県両津市梅津）である。地名の由来は「埋め津」である。中世、本土への移住志向からか、あるいは勢力争いに敗れてか、この梅津村を出て会津・庄内・由利、南羽内陸部へ渡った。定着先で故郷を偲んで梅津を名乗った。秋田藩梅津氏の先祖は初め米沢の伊達氏に仕え、主家内乱のため出奔して会津の親戚、藤田村梅津（福島県大沼郡会津美里町藤家館字藤田）へ逃れた。梅津半右衛門憲忠の父、道金が二歳の時である。以後の梅津氏は知られていく系譜のとおりである。

三、窪田

義宣は神明山に築く新城の普請奉行梶原政景に地名を相談した。義宣は信長の岐阜（井口）をはじめとして、秀吉の長浜（今浜）、利家の尾山（金沢）、家康の浜松（引間）、氏郷の若松（黒川）、政宗の仙台（千体）を知っていた。梶原は当地に窪田郷のあることから岩城の窪田城主時代を思い出し、何気なく「窪田」と言った。それを聞いて義宣は天正十六年に伊達政宗と奥州窪田（郡山付近）で合戦して大勝を収めたことを思い出した。義宣にとっては忘れられない合戦だった。彼には「窪田」が快く響いた。政宗が九死に一生を得た一戦であるだけに義宣はこれを記念にすることとは痛快だと思った。「よし、それにする」と即座に「窪田」と決定した。傍らにいた同じ普請奉

行の渋江政光が「実はあの辺に窪田という小名があつて、その田地が並ぶ所ない上田で、その米は六郡に勝ると言われています」と話した。義宣はますます縁起のよい地名だと思つて大いに喜んだ。実は、窪田は佐竹氏入部以前から集落としてあつた。いったいどの辺だろうか。古記録に当たつてもはつきりしないが推定はできる。程野村の一部とも言われているが、安東氏時代の天正・

文祿の分限帳によれば窪田集落の石高は程野全村よりはるかに多いので程野村の一部ではない。おそらく程野村に南節する地域、つまり川尻村の一部ではなからうか。すなわち、北は現在の通町・北鉄砲町から南は大町三丁目辺りまで、東は古川堀反町から西は広大な田園地帯の窪地までが考えられる。川尻村でも一番の上田と集落があつた所と思われる。「窪田郷田畑の内、侍屋敷・寺屋敷・

道・堀川欠に罷り成候に付き軍役迷惑之由申候間」(『梅津政景日記』)と、すべてよく符合する。この集落名が代表として新地名となつたのかもしれない。実際の窪田集落と田んぼは城下の都市計画により消滅していったが、その名は城地名として残つたのであらう。

四、古城山

義宣が城地として候補にも挙げた寺内山は古城山とも言つた。高清水岡のことである。古城山の名称の由来は、安東氏の湊城に対して蝦夷鎮圧のための秋田城のあつた所だからである。佐竹氏の入部当時、「古城山」は私的な文章や会話に通称として使われ、「寺内山」は公的な場合のみ用いられた。南方、八橋の岡との間は沼地であつた。

昔は、清水岡の東側を流れていた秋田川（雄物川）の入り江であつたろう。秋田川が岡の西側を流れるようになったのは天長七（八三〇）年の大地震によるものらしい。岡の北東から南にかけては広大な平原に面し、岡とは称しながらもその高さを誇っている。元慶二（八七八）年の蝦夷大反乱による攻防戦は、この平野で展開されたであろう。もちろん、遊撃隊は南方の八橋からも、船で西側の太田川からも、北方の砂丘からも攻め寄せたであろう。安東氏はこの古城山を、平城の湊城が敵に攻められた時の山城（現在の焼山一帯。大手は西南伽羅橋寄り）として備えていたが、天正十七（一五八九）年の湊合戦に使われたようである。

五、窪田城

慶長九年八月二十八日、窪田の新城が竣工し、義宣は湊城を破却して窪田城に移った。城の名称は地名から取るのが普通である。あるいは城名が地名となった。いずれ地名と城名が同じであったことは確かである。ただ、「会津」とか、「秋田」とか、広域地名（郡名）が有名な場合、他国の者はその中心の町をどうしても郡名で呼ぶことが多い。筆者など、「若松」はつい忘れて「会津」と言うことがある。現代でもこうである。まして江戸時代でしかも秋田の場合は、古くから官職名にも「秋田城ノ介」があつたほどだから、新地名の「窪田」よりは「秋田」で通ることのほうが多かったであろう。秋田の者もその気になって他国、特に江戸では「秋田」と言った。したがって、窪

田城は「秋田城」とも呼ばれたし、藩庁でもそう称した例が少なくない。窪田が久保田と佳字瑞祥の文字に替わったのは寛永十年から正保二年までの間で義宣死後のことである。養子義隆の自己主張である。

六、大膳山

現秋田市立明德小学校の地である。佐竹義宣が秋田入部した年、石塚大膳亮義辰をこの地に城代として配置した。当時、現千秋公園は三森山と呼ばれていた。土崎湊から眺めると、後の北の丸・大膳山・本丸が三つの森になっていたというのは、こじつけで実際は御森山の変化である。神明山とも呼ばれていたように頂上に神明社（総社とも）があった。その昔（秋田城以前）は土地の氏神で

あったろう。ここはもともと安東氏の支城で三浦氏の居城であったが、天正十八年に秀吉の城割令を遵守して実季が廃城とした。義宣は慶長八年にここを府城として築城し、同十二年に大膳山の石塚氏を広小路に移した。その跡へ八幡社を祀り、以後この地は八幡山と呼ばれるようになる。（三浦氏の居城は現在の二の丸堀の内が相当する。大手は手形北口。侍屋敷は上中城一帯。北の丸は見張り台）。明治に入って八幡社が一時広小路の石塚屋敷跡へ移転し、八幡山はその後、秋田市水道の貯水池となり水道山と称されるようになった。大膳山は窪田城の一郭であり、中世城郭の名残りを今にとどめている。

七、檜山天徳寺

天徳寺は初め、檜山にあった。今の金照寺山の麓である。羽越本線の踏切を越えた古い墓石の点在する辺りである。だから当時は金照寺山を天徳寺山と呼んでいた。これに参詣するための百石橋はその建立と同時に造られた。当時は天徳寺橋と呼ばれた。窪田城からこの天徳寺への道順は二つあった。一つは、中土橋・東根小屋町・亀ノ丁東土手町・檜山表町・古川新町（寺小路）・百石橋。もう一つは、上土橋・長野町・長野下・明田畷・富士山下・檜山村・古川新町・百石橋。長野町経由は藩主の私的な場合や上級家臣の通常コースであった。この絵図は現在秋田にはない。筆者は図らずも他県で見ることができた。なお、檜山天徳寺が消失したのは寛永元（一六二四）年十二月

二十七日夜である。翌年、泉村の泉山麓へ移転が決まった。これが現在の天徳寺である。

八、百部野

百部野という地名は佐竹氏の入部した頃あった。梅津政景の日記に書かれてある数箇条の文面から察するに、保戸野が該当する。しかし全くの保戸野ではない。後世の鷹匠町から中島・八丁にかけての地域と思われる。当時、添川（現・旭川）は今の千秋公園直下を包むように流れていた。そこには幾つかの入り江があった。少なくとも四、五箇所あって、後の外堀や内堀になった。藩祖義宣は下中島から五丁目橋辺りまで川を掘り、旧川は外堀・用水路とした。百部野はこの掘り川（旭川）によって分断され、その名と共に消滅した。百部

野とは「入り江のある川の岸辺の野」という意が考えられる。今の北の丸辺りから広小路にかけて、曲がりくねった千秋公園の下を流れていた旭川を容易に想像できるであろう。

九、長野町

町名は長野様屋敷に由来している。窪田築城の頃、仙北郡長野村紫島城主佐竹北家の屋敷がここにあった。当時、北家を長野様と呼んでいたのである。長野町は東に大沼、南に大堀、西に高い土手、北に大手門という一郭を形成していた。さしずめ、長野丸といったところか。北家を筆頭に一門、最上級家臣の屋敷があった。東方の沼から南の大堀に続く地域は長野下と呼ばれるようになった。長野町は西下の土手谷地町と共に十七連隊の

地となり、終戦後は駅前開発ですっかり昔の面影を失ったが、終戦後しばらくの間、秋田高校がこの地にあった頃、野球部の練習を土手で寝転んで見物している人達がいたものである。あの土手が長野町西側の土塁の跡である。なお、北義廉が死去後、長野紫島城は廃城となり、北家は義宣末弟の善継が後嗣、同じ屋敷に居住したが、長野様の呼称は残った。

十、霜別

太平川を霜別と書いた古記録がある。霜別はアイヌ語で「シモン・ベツ（右の川）」からきているという。これは添川（仁別川）と併記しているところから、寺内の秋田城跡に立って見れば、その右側の川が太平川に当たるのでうなずける。な

お、添川はアイヌ語で「ソヤ・ソイ（岩石の多い場所）」からきているという。しかし、筆者は「シモン・ベツ」も「ソヤ・ソイ」もアイヌ語でなく古代東北方言ではなかとと思う。このほか所謂アイヌ語と言われるそのほとんどがこれに当てはまると言いたい。この例はこの後しばしば出てくる。閑話休題。元慶二（八七八）年の蝦夷大反乱の記録には新屋方面の大川（現・雄物川）を霜別と記している。これも秋田城跡から秋田平野を望めば新屋方面は右方に当たる。つまり、霜別は固有名詞ではなく、普通名詞なのである。太平洋を覇別（ハワケ）と書いた古記録もある。添川と併記しているところから太平洋だろうと推測できるが意味は全く分らない。おそらく、字形の似ているところから、だいぶ古い時代に「霜」を「覇」と読み違うか、書き違いしたのであろう。だが、「別

（川）」を「ワケ」と読むのはおかしい。

十一、太平

太平は古くは「オイダラ」と呼ばれた。大江氏の居住した所という意で「大江平」の訛つたものという説である。しかしこれはどうもこじつけで、「山の麓の動揺する地（湿地のため）」ではないだろうかというアイヌ語までさかのぼった語源調べの結果からくる推理である。実際、太平の中心地である目長崎は太平洋の洪水にしばしば見舞われる湿地帯に山城の太平城が存在する地域である。さて、どっちだろうか？ 筆者は、「所謂アイヌ語は古代東北方言」という持論から「オイダラ」は所謂アイヌ語ではなく生粋のアイヌ語だと思う。したがって大江平由来説を採る。ともあれ、「太平」

は「オイダラ」の宛字である。これが他国の者に「ダイヘイ」と読まれたり、「オオダイラ」と言われたりしたのである。したがって、寛永元年八月の「太平山下がり」(『佐竹家譜』)も「大江平下た狩り」(『秋田沿革史大成』)もオイダラの宛字である。「太平」という宛字はお上に報告する文書のために使われたのだろう。明治二十二年の市町村制施行で太平地区の合併した新村名が「大平村」で、「オイダラ村」と称した。だから初めのうちはオイダラと呼ばれていたが、時代が経つうちにタイヘイとなった。今日でもオイダラ牛とかオイダラ衆とかの言葉が残っている。

十二、旧羽州道

佐竹氏が入部して間もなく、羽州道は湊から寺

内・窪田を通り、牛島・目長田を経て豊島に至る、近世羽州街道となった。それ以前は、湊から今の外旭川・手形山・下北手を通って河辺町の畑へ通じる道であった。この道は、生活道路としてその後も利用され昭和三十年代でも結構往来はあった。しかし、四十年代に入ると車社会になって歩く人もなくなり、河辺町の畑と秋田市下北手の宝川の間は道の跡形すら消え去り、幻の街道と呼ばれるようになった。筆者が昭和五十八年にこの道を下北手側から踏査した時は、木が覆いかぶさって藪が高く繁茂し、泳ぐようにしてかき分けて歩き、やつとの思いで目的地の畑にたどり着いたことを覚えている。近世羽州街道ができるまで窪田からは、今の上北手を通って豊島に至った。このコースは、街道ができてからも洪水の時などは迂回路としてよく利用された。

十三、百三段

モモサタ」と読む。「毛毛左田」の表記もある。いずれも宛字である。浜田・新屋・石田坂の総称である。今でもこの地区の人はこの地名を使うことがある。これも「語源はアイヌ語で『入り江にある砂山』とでも訳そうか。実は、この語を分析すると、『入り江、浜、砂、山を前にした大川、静かな、葦原』などの意味がある」というアイヌ語説が出てくる。これは柴百三駄の筏で大川を渡った故事が正しい。百三段は昔、勝平山南麓にあったが、天長七（八三〇）年正月の大地震で破壊し、現在地に移住したと伝えられている。近世初め、最上領であったが、元和八（一六二二）年に最上氏が改易となった。この時、佐竹義宣が幕府に願い出て、今の西仙北町の江原田・木売沢・

と交換して佐竹領となった。これを願い出た最大の理由は、大川（雄物川）を一つ隔てた他領が、あまりにも窪田城に近かったことと、雄物川舟運を独占したかったからである。（後世、これが大正寺川事件として亀田藩との紛争の遠因になる。）外様大名でしかも関ヶ原の科がある佐竹氏がこれを願い出られるということは、義宣と秀忠の人間関係をものがたるものである。秀忠は佐竹江戸屋敷を二度も訪問しているほどである。

十四、長沼

JR秋田駅前辺りから東方一帯は、佐竹氏入部以前は広大な沼地で黒沼と呼ばれていた。それよりかなり昔はこの沼へ仁別川（旭川）、太平洋が流れ込み、やがて仁別川は三森山（現・千秋公

園)の西側へ回り、太平川は富士山の北側へ流れが変わった。入川はこの沼を水源として築地・檜山を通って仁別川へ合流した(入川は仁別川の跡かもしれない)。黒沼は佐竹氏入部以後、長野町の下沼ということで長野沼となり、「野」が抜けて長沼と呼ばれるようになった。だから長い沼ではない。冬には鶴や鴨や白鳥や朱鷺などが飛来して賑やかであった。あたかも水戸城下の千波沼を思わせて皆懐かしんだ。夏は葎切のかまびすしい岸辺に葎が繁茂し、行き交う舟が見え隠れしていた。葎の尽きる辺りから蓮がおびただしくあって甘酸っぱい香りが漂った。鶉・雲雀が飛び交い、軽鴨が泳ぎ回る。浮島のような野崎の出島には北へ帰らない鶴が数羽見かけられた。標高わずか三十五メートルの富士山が沼の向こうに屹立しているので高く目立って見えた。沼を前にした景

色は絶景でまさに長沼のシンボルであった(富士は元来、不二・藤で、間もなく常陸から磯前神社が勧請されて信仰の山となる)。義宣は窪田築城後間もなく長野下からへ通じる道を土手で造成した。だからこの道を土地の者は昭和の初期まで「長土手」と称していた。この長土手より南方は水田となっていく。また、沼の周囲も正保の頃(一六四四〜四八)にかなり埋め立てられて深田となっている。

十五、慶長古絵図

探訪するものである。他県で図らずも慶長十年代(一六〇五〜一四)の「窪田平山城」という古絵図を発見した。檜山天徳寺が現在の金照寺山麓に見える。そこへ行く道が二つある。一つは長野

町を通って富士山への土手―富士山麓―檜山大元町を経て、他の一つは中土橋―東根小屋町―亀ノ丁東土手町―檜山表町―古川新町を経て百石橋を渡って至る。町名が後代とだいぶ違っている。中谷地町が谷地町、東根小屋町が上根小屋町、西根小屋町が下根小屋町、古川堀反町が穴門町、中長町が古川町、土手長町が長町といったぐあいである。中亀ノ丁はなく東土手町と西土手町があり、西土手町の南半分は鍛冶町となっているのがおもしろい。外町に目を転ずれば、後の大町が本町、茶町通りが秋田町、亀ノ丁がいさば町、上米町が米町、下米町が裏通町となっていて興味をそそる。旭川に架かる橋は、御休橋はなく、保戸野新橋・通町橋・二丁目橋・四丁目橋・五丁目橋・馬口労町橋で、一丁目橋・三丁目橋・下新橋はない。内町で町割りのできてない地域は、長野下・築地・

檜山・保戸野・手形である。四の郭（亀ノ丁）までは完全に町割されている。しかし、手形大沢の正洞院は「天徳寺閑居」と記されていて、そこまでは手形北口から直線道路となっている。また、「法（宝）鏡院祈念所」というのが保戸野新橋を西へ渡って間もなく突き当たりにある。外町の町割は、北は通町から南は馬口労町まで、東は川反から西は寺町まで、ほぼ後代と同じである。ただ、下米町と寺町の間にもう一つ通りがあつて、二丁目小路で突き当たっている。そこがどうも一乗院らしい。この道路の一筋多いことと、後の上米町と重なるような点に疑問が残る。もしか移転させられた百姓家の地帯であろうか。それもやがて郊外へ移転させられるのであるが。城内下中城の現・中央図書館明德館、国学館高校、旧県立美術館の地の北半分に梅津憲忠、南半分に志田伊豆の屋敷

がある。信太伊豆のことであろう。なお、本丸、一の御門を大手門と記している。

十六、根小屋町

根小屋とは、本城と城下の町を結ぶ中間にあつて城の山麓に造られた武士団の家屋敷の集落で城郭の一部である。それが地名となった。関東・中部地方にあつて西日本・東北地方にはない。南九州の「麓」、東北地方の「館巡り」などが根小屋に相当する。奥羽山間に残る根小屋・寝小屋の地名は木の根の加工の作業所、炭焼きのために泊まる小屋が由来である。郭の根小屋は佐竹氏の前任地常陸に多い。中でも片野村（石岡市八郷町）の根小屋が有名である。片野城は根小屋村にあつた。永禄年間（一五五八～七〇）に太田資正が造つた

城で根小屋村の地名の由来もそれに因るといふ。石塚大膳はその城主であつた。彼は窪田で自分の住む町を根小屋町と名付けたのかもしれない。それは常陸への郷愁と「我が家こそ佐竹を守る根小屋なり」という自負からだろうか。大膳の前領地石塚村（城里町常北地区）にも根小屋川・根小屋橋の名称が残っている。

十七、豊島町

豊島町を述べるには、窪田郷から入らなければならぬ。今一度窪田郷をざっと述べよう。窪田郷の範囲だが佐竹氏入部以前は、北は通町から、南は大町三丁目辺りまで、東は古川（旧添川）から、西は寺町以西までだったと思われる。つまり川尻村の中心地でその字であつたのではなからう

か。この窪田郷に南接するのが豊島町のような気がする。「出羽国秋田郡御蔵入帳」（天正十九年正月吉日）の中にある「百三石二斗三升五合」としま町、川尻村」が有力な資料である。豊島城主畑山氏が天正十年に滅亡した時、その旧臣が多数この辺に移されて帰農した。奴隸である。豊島町名もこれに因るものであろう。佐竹氏入部以前は川尻村の字で、村の中にながら豊島町と呼称されたと思われる。その範囲は外町を窪田郷と南北に二分するほどの広さであつたろう。すでに善長寺など二、三の寺が存在し集落としてはかなり早くからあつたものと思われる。佐竹氏の城下町都市計画で農村が消滅し地名だけが残った。

十八、亀ノ丁

秋田市内で町名の由来の分からないのが亀ノ丁である。亀ノ丁は二箇所にある。内町の四の郭と外町である。一般的に、亀の名の由来には次の六通りがある。「形状・縁起・井戸・神・甕・竈」である。形状は、背の形から岡や森をいう。縁起は、蓬萊山の異名の通り目出度いこと。井戸は、水に関連しているところから。神は、所謂アイヌ語（古代東北方言）のカムイ（神）が転化したものの。甕も竈も神と同様その音が転化したもの。亀岡・亀山・丸亀・亀石・亀戸・亀田・亀ヶ岡・亀有・亀嵩などみな以上に当てはまる。さて、内町の亀ノ丁だが、考えられることは、先ず「神」からか。勿論、佐竹氏入部以前に消滅していたが地名は残った。次に、地形ら見て亀野か。すなわち、

仁別川と入川に挟まれた地形が釜型の洲で、その間を亀野と呼んだのだろうか。佐竹氏が入部してそこを四の郭に造成して亀野町と称したことが十分に考えられる。外町の亀ノ丁の由来はどうだろうか。まず、内町と同様「神」が考えられる。

やはり佐竹氏入部のはるか以前に消滅していたことは言うまでもないが地名は残った。次に、井戸と関係があるかもしれない。つまり名井があつたということである。旧秋田市内は昔から井戸に恵まれていない。筆者が若い頃、この亀ノ丁に住む古老から、古来この地の井戸からよい水出て有名であつたと聞かされた。当時は関心もなく聞き流していたが、今思い起こしたしだいである。すなわち古くから集落があつたと思われる。さしずめ窪田郷のうちである。もう一つは、亀田と呼ばれていたのではなからうか。窪田郷のうちで川尻村

大字窪田小字亀田といったところか。なお、外町の上・下亀ノ丁と、内町の中亀ノ丁とは全く関係はない。紛らわしいが、内町のは亀ノ丁の中央通りだから中亀ノ丁、外町のは通町つまり城に近い方から上・下亀ノ丁である。

十九、九郎兵衛殿町

檜山に九郎兵衛殿町がある。大塚九郎兵衛の下屋敷のあつたところから、この名がある。上屋敷は東根小屋町南端、今の東北森林局の地にあつた。大塚九郎兵衛、諱は資郷、天正元（一五七三）年生まれ。祖父の資基は那須一族で、故あつて那須家を去り、常陸太田松山の岡本梅香斎の客将となった。佐竹義昭（義宣の祖父）が府中（石岡市）にいた頃、合戦で功を立て義昭に仕えたのが佐竹

家臣となったそもそもである。佐竹氏が入部して間もない慶長八（一六〇三）年九月の川井事件で、小泉藤四郎が土崎で小場義宗の配下に囲まれたが六、七人を死傷させ、なおひるまず戦って刺客達を手こずらせていたところへ九郎兵衛が弟の常長と共に助勢に入り、ついに小泉を誅した。慶長十九年の大坂冬の陣における今福合戦で戦功があつて將軍秀忠より感状を賜っている。嫡男資相の出生前に梅津憲忠二男（忠国）を養子にしたことがある。元和九（一六二三）年二月二十八日没、五十一歳。

二十、金砂町

町名は金砂神社に由来する。しかし初めから現在地にあつたわけではない。佐竹義重（義宣の

父）が国替えの時、居住した六郷に常陸から勧請した。義重は西金砂山を佐竹の守護神として崇めていた。佐竹には三度の危機があつた。初めは治承四年、源頼朝の佐竹征伐である。佐竹軍は西金砂山に立て籠もり大いに鎌倉軍を悩ましたが、ついに陥落し大将佐竹秀義は花園山（北茨城市）へ逃れてやがて頼朝に臣従する。二度目は南北朝の時代に南朝勢に攻められ西金砂山に籠城し、とうとう南朝勢を破った。三度目は戦国時代。佐竹内乱で危ういところを西金砂山に逃れて立て籠もり形成逆転して山入氏に勝利を収めた。義重は常陸を去るに当たり、この故事からもぜひ西金砂山神社を秋田に勧請して佐竹の鎮護の神としたかったのである。神社はその後、義宣の要請により慶長九年に窪田寺町に移り、現在地に鎮座したのが宝永七（一七一〇）年である。西金砂山は太田の西

北にある。義宣はそれにならって社殿鎮座の地を泉山に考えていたらしい。なお、この別当寺は東清寺である。この寺は明治になって廃仏毀釈により廃寺となっている。

二十一、泉山

現在の平和公園である。佐竹氏の入部以前は安東氏の配下、泉玄蕃が城主だったと言われている。八十四・二メートルの山である。義宣が城地を選ぶため、この山に登った時、四十五メートルの神明山（千秋公園）を眺めて第一候補に決めたと思われる。同行の家臣に少々小さい山だと言われたが、周囲が平地で思うように町構ができ、これからの城にふわしいと期待したろう。もともと、彼は次のように思ったに相違ない。「あの山（千秋

公園）を攻めるとすれば、わしはこの山（平和公園）に陣を張る。ちょうど、小田原陣の石垣山だ。それにそのうち大砲がここからあの山に届く時代がくる。これは気懸かりだが、まだ先のことだ。だいいち、この山が占拠されるようでは負けたも同然だから仕様がなない」。事実、これと全く似た地形を筆者は少なくとも二つ知っている。会津若松城と小田山、熊本城と花岡山である。もし、佐竹も戊辰戦争の時、官軍の応援がもう少し遅ければ佐幕軍が泉山から久保田城へ大砲を撃つたことだろう。

二十二、草生津

檀山天徳寺は寛永元（一六二四）年十二月二十七日夜に消失した。翌年正月二十一日、義宣

は江戸参勤出發に際し、梅津兄弟に「新天徳寺は泉山麓に再建したい。そのほうたちもよく見分して後、そこに定めよ」と言い残して発った。兄の憲忠は三月二十一日に新天徳寺屋敷の地を見に行ったが義宣の言ったとおりだと思った。弟の政景の日記には「屋形様仰せ置かれ如く候。草生津寺伊勢堂立ち候所より外これなく候。その段天徳寺御使僧衆へも申し渡し候」と書かれている。「草生津」とは石油の古称である。これが地名として知られているのが越後国蒲原郡黒川・新津・同頸城郡玄藤寺などである。これからでも分かるように、今の外旭川一帯は当時すでに石油が出ていたであろう。現・天徳寺辺りまでは通称「草生津」と呼ばれていたと考えられる。広域地名「草生津」は消滅したが「草生津川」は今に残っている。

二十三、十人衆町

初めは十二所町と呼ばれた。地名の由来は十二所権現と思われる。すなわち、熊野三山の本宮に勧請し祀った三所権現・五所王子・四所明神の十二の権現（日本の神になった仏）のことであるが、いずれ、熊野信仰と関係のある町名であろう。北秋田郡十二所町（現・大館市十二所）の地名も成り立ち方はこれとよく似ている。大館のほうは仏教語で、江戸時代末まであった十二天社が町名の由来である。すなわち、四方・四維の八天に、上下の二天および日・月の二天を加えた十二の護世天である。「ジューニ」が鼻音化して「ジューニン」、「シヨ」が発音しやすい「シュ」になり、「ジューニンシュ」となったに違いない。これに「十人衆」という漢字を充てたのであろう。十人衆がこの町

に居住した話はこじつけ。今日でもジューニショと発音する人がいる。

二十四、下米町

藩政当初は他の南北通りができていたのに下米町通りはなかった。しかし、正保国絵図では完全にできているのがわかる。現在、下米町の北口は五メートル余の幅の道が斜めに三十五メートルほど入ってそこから一直線に六メートル余の道幅となっている。古絵図ではこの北口から三十五メートルほどの西側辺りが土塁になっている。なぜ、このようにいびつな通りとなったのであろうか。通町から馬口労町までの南北通りはその両端が狭い。これは城下防備のためであろう。特に室町の南極は極端に狭い。街道から最も近い入り口だから

らであろう。下米町一丁目の北口も同様にひじょうに狭い。なお、このいびつな道路は今日まで改修されることはなかった。それもそのはずである。地図上では科学時代の現代でも整然とした道路として表されていて、北口の斜線も狭さも行政の机上では発見不可能だったろう。他に理由があつたかもしれない。

二十五、追廻町

今に残る仰信寺の綱掛けの松は船を繋いだものと伝えられている。つまり、旭川を上り下りする御用船がこの辺に係留したという、いわばハーバーであつた。したがって、元は御船町とも称された。それが時代が経つにつれて追廻町と言われるようになった。この名称はうっかりすると、鳥

追い達の住んだ所と間違えられてしまう。鳥追いとは、江戸時代、新年に各家の門口に立ち、三味線を弾き小唄を唄って金銭をもらい歩く職業の女達のことである。しかし、鳥追いではなかった。俗に言う船頭のことである。追廻とは、船の乗り組みの職制の一つで、船頭・親父・表などの役付き以外の一般水夫を指す。つまり力コのことである。その水夫達の住んだ場所ということになる。職業が最も庶民的で自由気ままな開放的な町であつたに違いない。

二十六、四十間堀町

シジッケンと読む。北は十人衆町、南は城町の間の小さな町である。町名は旭川に流れる四十間堀川に由来するが、問題は四十間堀の名称だ。こ

の堀川は誓願寺の北脇から旭川まで流れる。その距離は四十間の五倍以上もある。だから、堀川の長さが四十間あるというのではない。もちろん、その幅が四十間あるということはナンセンスである。四十間というのは、誓願寺の北脇に四十間の長さの堀があつた。そこから堀川となつて旭川に流れた。初めに四十間ありきである。その堀川に沿つてできた町だから四十間堀川町と言つただけろ。松江に同名の川がある。これは川幅が四十間あるからである。

二十七、誓願寺門前町

外町鉄砲町と室町の間の、文字どおり誓願寺門前にある町である。町の中央を東西に四十間堀川が流れていた。べつに門前に市をなしていたわけ

ではない。職人の町である。四十間堀町と同様、いたって小さい。だが、四十間堀町のように堀川に沿ってできたためにちいさいのではない。もともとは南接する・室町を含めた町であったのではないだろうか。室町は道路の東西とも梅津氏の下屋敷であった。その町名は誓願寺門前町であつたろう。少なくともそう呼ばれていたに違いない。梅津氏の武家町を憚ることなくそう呼んでよかったものかと思うだろうが、実は誓願寺は梅津氏の元菩提寺（仁井田子院）であつた。その通りにある梅津氏の下屋敷はいわば菩提寺を守る屋敷と言つてよい。梅津氏はこの通りを誓願寺門前町と称されたことをむしろ喜んだに違いない。なお、室町は明治二年に那波氏が武家屋敷を譲り受けた時に命名した町名である。那波氏の先祖が京都室町に居住したことがあるのが由来である。

二十八、横町

横町とは「横手にある町。表通りから横へ入った町筋。小路。横丁」を言う。秋田市の横町は、正しくは本町五丁目小路である。横町は通称である。いや、通称であつた。通称がやがて実名となった。小路とは一般に表通りに面した屋敷の横側に通した道を言う。いわば抜け道であつて町内を形成しない。これに対して、町は屋敷の向かい合つた間の道で一緒に一つの町内を形成する。だから、五丁目小路もはじめは、東半分が川反に面し、西半分が本丁に面していたが、しだいに東半分が小路を挟んで向かい合うようになり町を造つた。つまり、五丁目橋から見れば小路の北側二十間、南側二十間の屋敷が横を見せた形となつたのである。その時代は、慶長・元和・寛永・正保を

経て、しだいに形成されていつて漢文に入った頃には完全にできあがっていたようである。寛文三（一六六三）年の絵図にははっきりと書かれてある。だが、まだ小路の名称であった。数年後、横町となった。

二十九、牛島

牛島という地名は安東実季分限帳にすでにある。その文字から牛の放牧場ではないかと推測されるが誤りである。ウシは古代東北方言で湿地帯を意味する。長い間、アイヌ語とされてきた。牛島は猿田川と太平川の三角州に発達した地である。この平地を流れる両川は蛇行がひどく数多くの大小の入江や沼ができていた。湿地帯である。牛は宛字で島は二つの川の間という意味である。

る。佐竹義宣が入部して城下造りをした頃、牛島に馬の放牧場造った。その場所は二つの川の合流点寄りであつたろう。寛永八（一六三一）年五月二十三日、狼二匹が子馬（とうね）一頭を喰い殺した知らせを聞いて義宣は近習十人ほどを召し連れ牛島へ赴いた。たが狼には逃げられて狐五匹を獲った。それから三日目の五月二十六日にも子馬が二頭喰い殺された。その翌二十七日午前、義宣は再び牛島へ狼狩に出掛けたが、一匹も見つからなかった。狼は現在の地形から推測して、おそらく金照寺山とその奥山に生息していたと思われる。

三十、目長田

現在、秋田市仁井田地区の切上のカーブで御所

野方面に向かって立てば、旧道が二本ある。そのいずれが江戸時代の羽州街道であるか迷ってしまう。御所野へ向かって一直線の左側の道がそうらしい気もするが、たたずまいに近代開けた匂いが感じられるのである。右側の道もそんなに古さは感じられないが間もなく突き当たって数箇所の曲折を経て目長田に入る。実はこの道が羽州街道なのである。ここで目長田の歴史を振り返る必要がある。目長田は佐竹氏入部以前から開けていた村である。当時、宝竜崎と大野はあったが仁井田村はまだなかった。宝竜崎―目長田―大野そして牛島を結ぶ道は当然あった。その中心地が目長田である。なにしろ、目長田は雄物川の川湊港で周辺農村に対する物資の集散地であった。港は雄物川が大きく蛇行した所の入江にできた良港だった。それは現存する古川（旧雄物川）を目長田の台地

に立って見れば容易に推測できる。目長田は交通の要衝であった。とても羽州街道から外れるはずがない。つまり、牛島―二ツ屋―切上―目長田を通る道である。切上からのあの程度の曲折や迂回問題はでない。義宣は仙北からの帰りには、よく船を利用して目長田で上陸した記録がある。なお、古記録に女名潟もある。宛字である。女名のメナは古代東北方言で「小さい・細い」の意である。あの辺一帯は小さな沼が数多くあったのだろう。女名潟があるから男名潟もあったというのは全くこじつけでナンセンスである。

三十一、大八幡

天喜四（一〇五六）年、前九年役に源頼義が陸奥出兵の途中、常陸太田の熊野社境内に石清水八

幡大神を祀り戦勝祈願をしているのが大八幡の起源である。続いて源義家・義光も後三年役に向かう途中、武運長久を祈願。応保元（一一六一）年、佐竹初代昌義が忠義に家督を譲り現在地に菅田八幡社を創立、佐竹氏の守護神として馬場八幡宮と呼ばれた。現在の社殿は天正八（一五八〇）年、義重が造営したものである。この八幡宮は文禄元（一五九二）年、義宣が太田から水戸城西の八幡小路（後の田見小路、現・水戸市北見町）へ移し、佐竹氏秋田国替えで分祀して秋田城下へ移る。水戸の八幡宮は元禄七（一六九四）年、水戸光圀の命で上那珂西村（現・城里町）へ遷祀され、宝永四（一七〇七）年、現在地（水戸市八幡町）へ遷座された。秋田へ移った大八幡は初め四十間堀の誓願寺付近にあった。別当寺は光明院であったが、元和七（一六二一）年、一乗院に替わった。それ

で大八幡は一乗院（現・西法寺）へ移った。なお、仁井田にあった誓願寺というのは誓願寺子院のことで庵である。その庵が寛永八（一六三二）年、梅津氏が桜村に開創した萬雄寺である。大八幡はしばらく一乗院の道場内にあったが、貞享五（一六八八）年、に初めて寺内に仮社が建てられた。ついでに、その後について述べよう。元禄五（一六九二）年、一乗院の境内に八幡宮を建立し遷宮した。明和四（一六六七）年、火災に遭い一乗院と共に久保田城内八幡山に再建された。明治五（一八七二）年、東根小屋町（旧・石塚屋敷地）に小八幡と合祀された。秋田神社と同地に隣接する。明治四十（一九〇七）年、旧久保田城本丸跡（現在地）に秋田神社と合祀された。この時、旧小八幡の建物（秋田神社）は旧二の丸跡地に弥高神社（八橋から）として残る。なお、石塚氏の東

根小屋町の屋敷は旧藩士の有志が募金して、百円で譲渡されたと『伊頭園茶話』に書かれている。

三十二、小八幡

応永元（一三九四）年、佐竹十二代義盛が稲荷社と共に鎌倉八幡宮若宮の分霊を太田城内に勧請して守護神とした。義盛がこの宮を創立した理由には次のことが挙げられる。佐竹庶子家手綱孫三郎が関東管領に所領を没収されて反抗する事件があった。南酒出氏的美濃転出後、足利幕府内の評判が良く佐竹本家をしのぐほどの勢力があった。山入氏が常陸守護職を命ぜられたり独自の独自の動きなどで、総領家の統率力が弱まり一族に分裂の様相が現れだした。以上から佐竹一族の一門の結束を図ろうとしたのである。（養子の十三代義

人はこの小八幡をさらに強く信奉し、やがて菩提寺も天徳寺に替えた。義人の自己主張である。）天正十九（一五九一）年、佐竹義宣の水戸進出に伴い、分祀は城内に建立されたと思う。これは太田と同じように大八幡は城下に、小八幡は城内にあったからである。もし、大小八幡が共に水戸八幡宮に祀られたとしたら、秋田国替え後も最初から共に窪田城内の八幡山に祀られてよいはずであった。常陸太田市に残っている現在の太田若宮八幡宮、つまり小八幡は宝永五（一七〇八）年、太田城代の中山備前守が水戸三代藩主綱條の命により現在地に社殿を造営したものである。天保十五（一八四四）年の棟札には「太田神宮」とあり、別当は蓮華寺であったが、天保の社寺改革でこれを排し唯一神道とした。かつては、久慈浜（日立市）に御輿が渡御し、浜の旅所で磯出の神事が盛大に

行われた。佐竹氏の秋田国替えで分祀して窪田築城と同時に城内に移った。慶長十二（一六〇七）年、石塚義辰邸のあった別郭に常陸以来の別当寺である金乗院と共に移る。この時、稲荷社も移る。ついでにその後についても述べることにする。明和四（一七六七）、大八幡と一乗院が消失して八幡山へ移転後、小八幡別当寺の金乗院は北の丸粃蔵隣に移される。明治五（一八七二）年、東根小屋町に大八幡と合祀移転。隣に秋田神社。明治四十年、旧久保田城本丸跡に秋田神社と合祀移転。

三十三、一乗院と金乗院

共に佐竹氏八幡社の別当寺である。一乗院は、元和七（一六二二）年に大八幡の別当寺を継いでいる。それまでは常陸以来光明院が勤めていた

が、元和七年に住持が病死した時、義宣はこれを断絶し一乗院にその別当を命じたのである。光明院の後嗣問題が義宣の機嫌をそこねたらしい。当時、大八幡は四十間堀付近（現・誓願寺の地）にあったようである。一乗院が別当寺になったことで大八幡は一乗院（現・西法寺の地）へ移った。後、明和四（一七六七）年の火事で共に消失して久保田城内八幡山に再建された。金乗院は常陸時代（応永年中）から小八幡の別当寺である。小八幡と共に慶長十二（一六〇七）年、大膳郭の跡地に建立されている。ただ、寛永八（一六三二）年に後の六供町に屋敷を与えられた記録がある。もしか閑居屋敷か。いや、義宣が一時、別当寺を替えようとして（中世のしがらみ排除の一環として）その後思いとどまったのだろう。明和四年、大八幡と一乗院が八幡山へ移ったので北の丸粃蔵隣に

移されるが一乗院より金乗院が格下だったのであらう。

三十四、総外堀

総外堀とは外堀をもう一回り囲んだ堀のことを言う。江戸城で言えば、今に残る四谷見附・市ヶ谷見附の前の「ㄣ」中央線に沿った堀のことである。久保田城では、長野下堀反町から亀ノ丁堀反町を通って旭川へ出る堀と、亀ノ丁東土手町と亀ノ丁南土手町・同西土手末町を通って旭川へ出る堀である。前者は三の郭の堀であって大堀と呼ばれた。後者は四の郭の堀であって下堀と呼ばれた。下堀に対して大堀は上堀とも呼ばれた。現在、この二つの堀は跡形もないが、歩いてみると堀の跡がよく分かる。いまだに土地に高低がはっきりしてい

て昔をしのぶよすがとなっている。総外堀は総構からきている。総構とは「城・砦などの外郭、また、その内部の全体」である。佐竹義宣は、これを豊臣秀吉から学んだ。小田原陣の時の小田原城、秀吉居城の伏見城・大坂城の総構を實際に目で見、伏見では堀普請を手伝っている。久保田城では、この他、東は長沼、西は旭川、南は太平川、さらに隔てて新城川・草生津川・雄物川・猿田川に囲まれ、一方、総構内でも入川・四十間堀川・寺町堀割・保戸野南堀川・同西堀割・中長町古川等、網の目のような堀川があった。まさに水の都であった。これは防備上だけでなく舟運上でも必要であった。旭川からの船が保戸野新橋手前の水門から入って八幡坂下まで行けたし、そこから外堀・内堀へも行けた。船の通行不可能な堀は東側上中城の堀留から長橋西方の堀留までの内堀のみ

であった。この他のすべての内、外堀は、土橋にも通船の水路があった。絵図に描かれていないのは当然である。この例は城下（総構内）の堀川にも言える。

三十五、義宣の文治主義

義宣は天正十八（一五九〇）年五月二十七日、豊臣秀吉に臣従の礼を執った。盟友石田三成との出会いもこの日である。以後、彼は豊臣政権から新政策を学んだ。それは中世から近世への脱皮であった。特に石田三成からの影響が甚大であった。具体的には、兵農分離・兵力削減・支城棄却・農地開墾・鉾山開発・商業推進・新参登用などの文治政策である。しかし、常陸時代は五百年というしがらみに十分な改革はできなかった。それが

秋田遷封によって花開いた。慶長年間是全国的に築城ラッシュで諸大名は競って城を築き軍事費に多額の金銭を注ぎ込んだ。その中で義宣は文治主義に徹した。まず、常陸から秋田への随従者を極度に制限した。兵力の削減が狙いであった。そして秋田へ入部するや群小の支城を次々と廃城していった。元和六（一六二〇）年の一国一城令で棄却に取りかかった時は支城はわずかに六城を数えるのみであった。義宣居城の窪田城も自然を生かした質素なものであった。それは幕府に遠慮したものだったとよく言われているがそうではない。軍事費を大幅に削減した文治予算がくならしめたのである。第二次世界大戦後の日本経済に酷似している。しかし、城はけっして粗末なものではなかった。その総構・外堀・内堀・の配置、四の郭・三の郭・二の郭・一の郭の輪郭式と連郭式の複合

型や、内町・外町の町造りなど、義宣が豊臣政権で得た知識を十分に發揮したものであった。土塁の故に窪田城は近世名城の一つである。鉱山開発も積極的な政策であった。以上のお陰で佐竹氏の近世初頭はすこぶる潤沢だった。

三十六、秋田入部

慶長七（一六〇二）年五月八日、佐竹義宣は伏見で、領地没収、羽州に替え地を言い渡された。水戸城は六月十四日に明け渡され、義宣の父義重をはじめとして佐竹家臣は奥州八槻に移った。六月二十六日、和田昭為と川井忠遠は赤館を出立した。その前に白土大隅と桐沢久右衛門が先発していた。日を経ずして南義種・須田盛秀・向宣政も赤館を発った。和田と川井は岩瀬に二日、福島に

四日、白石に七日、最上領内に五日ほど逗留して、先発の白土・桐沢からの知らせを待ちながら慎重に下った。白土・桐沢の二人が秋田に到着したのが七月二十三日であった。その日、伏見から大津を経て敦賀から武器・雑具・長持等を運んで来た越中船が土崎湊に入港した。一方、義宣は七月二十九日、伏見を出立し、江戸へ下った。また、別働隊は北国路を回った。その間、義重は江戸へ出て、芦名盛重・岩城貞隆・相馬義胤の替地を秀忠に願い出て大名家存続を訴えている。しかしこれは不成功であった。別働隊には意味があった。義宣が関東を通っていけば、常陸にいた家臣達が駆けつけて来て一騒動が起ころぬとも限らない。それで、世間には「佐竹義宣は北国路か海路で下る」と言い触らした。特に旧佐竹領内にはそれを信じ込ませた。そうしておいて、自分は東海道を

下って江戸に立ち寄り、母達を人質として差し出し、秀忠に謁見して礼を述べ、徳川重臣を歴訪して弟たちの所領回復を頼んだ。したがって江戸には十数日間滞在したことになる。別働隊の北国回りは影武者が率いて、初め、敦賀から乗船する予定であったが、荒天続きでついに二隊に分かれ、一隊は北国路を、一隊は海路を下ることになった。八月二日、白土・桐沢は和田・川井の代官として湊城を請け取った。義重が八槻を發つたのはその頃である。北国路の一隊は八月末、斯波の渡を越して湊に到着した。海路班は九月九日に浜に上陸した。最後に義宣隊が笹谷峠を越え、羽州道を通って九月十七日、湊に到着したのである。この義宣本隊の経路をもう少し詳しく推測してみることとする。慶長七（一六〇二）七月二時十九日に義宣は伏見を出発し東海道を下っているが、江戸

到着は八月十日頃と思われる。江戸では秀忠に謁見し、母たちを人質として差し出し、弟たちや相馬氏の大名復活の懇願に奔走した。また、屋敷等の指図をしたりして雑務に追われ、十数日間の滞在はあつと言う間であつたろう。江戸出發は八月二十三日頃で、急ぎ、奥州道を通り、須賀川到着は八月二十七日頃とみる。そして九日ほど逗留してその間、旧領常陸の状況、伊達・最上領内の様子、秋田・仙北の内情をじっくりと把握してから改めて下向準備を調える一方、下向途中、当地で死去した二階堂後室（未亡人）の弔いをした。九月七日頃、須賀川を出発して笹谷峠越えをして羽州道に入り、天童・舟形・金山・横堀・横手・刈和野を経て、豊島を過ぎ湊に到着したのが九月十七日午後であった。当時の太陽暦の十月三十一日である。既に義重率いる常陸隊は入部していて

要所を固めていた。

第八章

続々老いの繰り言

一、撥橋

寛永九（一六三二）年六月二十五日（太陽暦八月十日）の窪田大洪水で『梅津政景日記』に「四町目、五町目之はね橋なかれ申候。壺町目橋、二町目橋、馬口労町之橋なかし不申候へ共、柱ぬけ候てつなぎ留たる迄二而候」と書かれている。壺町目橋は政景の書き間違いで通町橋のことであり、当時、一丁目橋・三丁目橋・下新橋・御休橋はまだなかった。ただし保戸野新橋はあった。この中で「はね橋」いうのは、橋に釣金をつけ、内町側（東側）につり上げられるようにした橋のことで、二間ほどの長さであろう。この目的は敵襲への防備上、船の高さ・幅に対する通船上、洪水からの防護上が考えられる。防護というのは、流木等から橋の破壊されるのを守ることである。は

ね板の部分を釣り上げて流木等を流す水路にするわけである。だから撥橋は旭川に架かる他の橋にもすべてあったのではないだろうか。

二、窪田の大洪水

寛永九年六月二十二日から降った雨は止まず、二十四日の夜には大雨となり、それが二十五日になると窪田町はすっかり大洪水に見舞われた。東は手形・広面・桜にかけて一面に海の如くであった。手形給人町の堀は洪水のため区別がつかない。富士山への土手は三箇所が決壊し、亀野、檜山の田畑・下屋敷・足軽町・百姓町も一面の水。西は手形一本木の下から泉の郷に流れ、保戸野村・通町・大町・鍛冶町は溢れた堀川と同じ水面であった。四丁目・五丁目の撥橋は流失し、通町橋・二

丁目橋・馬口労町橋は流されはしないが橋柱が抜けてつなぎ留めているばかりであった。堀川にあった舟は一艘も残らずみな流失した。城内では大雨のため、本丸・北の丸の土塁が二十一、三箇所にとわたって破壊された。窪田城はまるで湖に浮かぶ島のようなであった。内町の破損箇所が五十四に及んだ。その他、外町の橋・道など数を知らず。添川・新城の田畑はすべて流され死人が十六人あった。

三、向浜

向浜は土崎側から見た通称である。このような例は、江戸の向島や伏見の向島がある。しかし、新屋側にとっては不本意な名称であったろう。向浜は正確には荒屋町字砂奴寄である。狭貫（狭い

半島の意）の宛字である。「砂地の半島」という意も掛け、事実になつた秀逸な宛字である。ついでだが、土崎の意は「砂の岬」である。これは向浜を指している。つまり、新屋側の地形を向かいの土崎の名称にしているのである。土崎側にとっては不本意な由来である。むしろ、別名の「土浦」（砂の浜）のほうがびつたりである。向浜は土崎湊とは切っても切れない関係の地である。日本海の荒波の防波堤に役立ったが、漂砂で港入口をふさいだり、港湾を浅くしたり、大洪水で勝平山麓を突き破って海へ抜けたり等、度々であった。その度に、港湾を浚渫したり、決壊箇所（川欠という）を修復したりしてその経費は莫大なものであった。

四、三枚橋

楢山に三枚橋という町があった。町名の由来は、水路に架かる橋に関係があると伝えられている。この町内を流れる水路に橋が三つあったのか、それとも三つ以上の多くの橋があったのかとも考えられるところだが、どうも数が多過ぎて納得がいかない。そもそも「三枚」とはいかなる意味なのか、そこから考えねばならない。そこで思い付いたのが、駿河国（静岡県）三枚橋（現・沼津市三枚橋）である。その地名は、地内猪川に架かる東海道の橋が三枚の石でできていたことが由来とされている。佐竹氏は豊臣時代から東海道を繁く往来している。当然、三枚橋は通過したり、とどまつた地である。当時、既に武田氏が滅んで三枚橋城から沼津城へと名も変わっていたが、佐竹家中に

は記憶に残る地名であったのだろう。楢山三枚橋の三枚は、たとえ石でなくて板であっても駿河の沼津に因んだのかもしれない。この他、箱根の登り口にも同名の橋がある。意味はやはり三枚の板橋である。なお、楢山のは入川に架かる橋だったと思われる。入川は佐竹氏入部の頃は長沼を水源として築地を経て流れていた。

五、白華城

正式には豊巻城という。白華城は別称である。築城は文安四（一四四七）年に安東氏の一族備中守義仁になると伝えられている。それより百年余の間に城下の前郷は一小都市を形成し、今日では想像もできないほどの繁盛を呈したようである。それは、旧城地付近の鍛冶町跡を見ても、当時殷

賑を極めていたことが分かるし、新屋町をしのぐ村であったことが歴史的事実として残っている。

永禄十（一五六七）年正月十五日、豊島城主畠山玄蕃の奇襲によって白華城は陥落する。この時、城主安東季林の内室と姫は菩提寺陽澤院の近くまで逃れたが、捕らえられて斬殺された。それでその地を土地の者は姫子坂と呼んでいる。前郷では現在もなお、毎年正月十五日夜には、落城の際の狼狽した様子を偲んで奇習を行っている。すなわち、大根・牛蒡・人参・蒟・蕨などを入れた粥をつくって先祖を供養している。なお、その後、湊安東茂季が檜山安東愛季の力を借りて白華城を奪還。二年後に豊島城を攻めて玄蕃を降伏させている。佐竹氏入部三十三年前のことである。

六、豊島城旧臣

豊島城から旧家臣が豊島町へ移され帰農した時代について述べてみることにする。豊島城主畠山玄蕃は、永禄十二（一五六九）年に安東茂季に攻略されて降参したが、その後、天正三（一五七五）年、天正十（一五八二）年と安東氏に反抗しついに安東愛季に滅ぼされている。この時、旧臣達に許されて川尻村に移住し帰農したものと思われる（一種の奴隸）。だから、天正十七（一五八九）年の湊騒動で安東実季に敗れた安東道季（茂季の子）の家臣団ではない。道季の家臣団は同族のこととして実季側からそれほど咎められなかった。むしろ恭順を示すことで寛大な処置を取られ、以後は実季家臣となり、湊へ移住する。ついだが、道季後の豊島城は湊合戦に戦功のあった羽川新助（秋

田市下浜字羽川の豪族）に与えられた。彼は豊島新助と改名して慶長七（一六〇二）年、佐竹氏入部まで城主であった。勿論、豊島町に移住したのはこの豊島氏の家来達でもない。因みに天正十年に安東愛季に滅ぼされた畠山氏は、地名を氏名にして豊島氏とも名乗っていたのである。

七、御初野

佐竹家では毎年正月四日に「御初野」というのがあった。年の始めの鷹狩りで、一種の儀式みたいなものであった。寛永四（一六二七）年に例を取ろう。義宣は芦名義勝をはじめとして一門・重臣達を従えて濁川へ出掛けた。鷹狩の好きな彼は無論満足がいかず、休憩後、一門・重臣を城へ帰し、自分はわずかな供と土崎湊へ渡野した。小野岡義

從、小場宣忠、向重政、梅津政景、早川宣直そのほか小姓衆が従った。あいにく雪の天気で八つ時からから吹雪をついて付近に出掛けた。古城山（古代秋田城址、現・高清水公園一帯）では鷹で鴨六羽を獲った。また、穀町（現・飯島地区内）では菱食一羽を鉄砲で撃ち取った。六日、吹雪も止んだので湊を出発して長岡山、鳩崎山で雉獵、下刈で昼休みをしてから虬川（現・潟上市飯田川町下虬川）まで出掛けた。それから、浦山・堀内・岩瀬・脇本・船越・鶴木等を巡って一月十四日、窪田城に帰っている。

八、秋田の天候

佐竹義宣時代の秋田の天候を『梅津政景日記』から拾ってみることも何かの役に立とう。分かり

やすく全て旧暦一月一日に統一しよう。括弧内は太陽暦の月日である。当時と現代の天候と太陽暦を比べられたい。

元和四年（1・27）

少し雪降り、風なし。

元和五年（2・15）

雪降る。

元和六年（2・4）

朝より昼まで吹き立て、晩天気よし。

元和七年（2・22）

朝より夜まで雨、晩より風吹く。

寛永二年（2・7）

雪少しずつ降る。

寛永三年（1・28）

天気よし。

寛永四年（2・16）

おりおり雪降る。

寛永五年（2・5）

朝より夜まで天気よし。

寛永六年（1・25）

雪降る。風吹く。古年にもなき大荒れなり。

寛永七年（2・12）

朝雪、四つ時雨、昼より天気よし。風吹く。

寛永八年（2・1）

昼雪・雨、夜風吹く。

寛永九年（2・20）

雪降り、風吹く。

寛永十年（2・9）

天気よし。

九、政景日記の難解語

ちようせん手代

慶長十九年二月二十五、六日に駿府（静岡市）で運上金銀を計量した人達。家康の大蔵大臣とも言われた後藤光次らと共に貨幣製造の任に当たった大黒常是の「常是手代」か。「じようぜい」がジョウゼンと聞こえて当時の表記で「ちやうせん」とかんがえられる。

生銀

危篤の家康の薬用として仙北銀山の生銀を求められた。政景は「銀山に生銀なるものはない」と返答したが、断つての望みであった。そこで彼はとちではないかと考えたのである。とちとは杜氏のことか。すると、酒心銀色であれば濁酒か。ちよつと滑稽である。因みに生鉄は、よく精錬さ

れていない鉄のことである。これからすれば生銀は、精錬前の銀つまり原石ということになる。これが薬用になるというのか。

湘

義宣はよく湘へ鷹狩に行っている。文面から見ると、日帰りの所なので窪田周辺であろうが不詳である。瀟湘八景のことだろうか。窪田周辺でこれを連想する所はさしずめ長沼である。または旭川と雄物川の合流点、あるいは少し遠いが小泉湯か。

干川

慶長十九年三月三日、高田城普請のため義宣がこの地まで来て一旦引き返したことを江戸にいる梅津政景まで使者を派遣して伝えた際、政景が記した地名。ところが、これを『佐竹家譜』『羽陰史略』では「ひかわ」と読んで「氷河」と表記し

た。このため、だいぶ後世の人を惑わした。実は越後岩船郡寒川のことである。「寒川」を政景が「干川」と書いたのが原因。

皮数但波

寛永七年七月三日、幕府からの上使である。『佐竹家譜』では「不明」としている。『羽陰史略』では「川勝丹波」と記している。れが正しい。

以上の他、辞典を漁れば分かることだが、つい惑わされるのがある。

白馬

濁酒。どぶろく。

諸白

麴も米もよく精白したものを用いて醸造した上等な酒。

出目

貢納に当たり、両目を所定より多少とも実際は

増すこと。

ささけ

一瞬、酒のことかと紛らわされるが、大角豆、ささぎである。

たうね

当年生まれた馬。一歳駒。

十、旭川

旭川は古くから添川と呼ばれていたが、その他に仁別川・泉川・保戸野川の名があった。さら佐竹氏の城下となつてからは、別に御川・堀川・内川・町川・馬口旁町川などと呼ばれ、決まった名称はなかった。後世、化政期に菅江真澄が「朝日の嶽（太平山）より落ち流る」川という意味で旭川と名付け、時の藩主も気に入ったということで、

以後しだいに旭川と呼ばれるようになった。北海道旭川市内を流れる忠別川の語源「朝日の輝く川」と命名由来が似ている。真澄が朝日嶽から旭川の名称を考えたということは頷けるが、彼に「扇に日印」の家紋らの連想があつたのではないかと筆者は思う。勿論、佐竹の紋が日の丸でなく月丸であることは十分承知の上にもかかわらず、敢えて日の丸を取つたのではないだろうか。博学の彼は、鎌倉の名越ヶ谷（鎌倉時代の佐竹屋敷）や常陸日立の朝日も、内神田（旧江戸屋敷辺り）の町人達が覚えていた佐竹日の丸紋の話も頭の中にあつたのかもしれない。旭川は単に朝日嶽から取つたものではないと思う。なお、佐竹義宣はなぜ現在の旭川に掘り替えたのか、その理由は防備上だけでなく商業振興のためでもあつた。古来の川を外堀代用としたのでは川岸は武家屋敷でなければな

らない。これでは雄物川からの船による商業が発達しないのである。

十一、富士山

「ふじやま」と読む。標高わずか三十五メートルの小山だが長沼を前にした姿は堂々としていて美形であつた。だいぶ以前、富士太郎という土豪の館があつたと伝えられている。その館はおそらく山の東側から南側に掛けてであつたであろう。そこが冬の北西風を山を背にして防げる格好の場所だからである。しかしいざ戦の時は山頂に上がつたであろう。要害と居館の関係である。安東氏の支城で早くに廃城となつたに違いない。頂上に富士権現が祀られ、麓に佐竹氏入部以降は常陸から大洗磯前神社（海上交通の神、目の神）が

勧請され観音堂もあった。義宣になったつもりで山頂から一望すれば、北方の御城山と南方の七ツ森は目と鼻の先にある。北東から一八〇度の西南に掛けて大沢山・泉山・古城山・八橋丘・上野と続き、遙かに小平山（勝平山）と砂山が横一線に見え、その左端に百三段山（大森山）がある。再び目を近くに転ずれば、手形・長野・根小屋・亀野・旭川・長野下が手に取るように点在する。振り返って東方を望めば、太平山が穏やかに座している。南方遠くに鳥海山が小さく見える。それはちょうど、水戸城から遙か西南の筑波山に似ていた。

十二、要害と居館

中世で「要害」とは難攻不落の地に築いた城を

言う。戦闘用の城郭のことで近隣には必ず生活・行政用の居館があった。一般に、城郭を城、居館を館と言う。平城と言われるのは館で、山城と呼ばれるのが城である。佐竹氏の常陸時代の太田城は館、西金砂山城が要害である。安東氏の湊城は居館であり、秋田城跡や脇本城が要害であつたろう。近世に入ると平城が要害を兼ねるようになる。伏見城・二条城・大坂城・江戸城・広島城・姫路城・名古屋城等、今に残る名城がそれである。佐竹氏の窪田城は中世と近世をミックスした平山城で要害と居館を兼ねている。

十三、秋田と仙北

慶長七（一六〇二）年七月二十七日、佐竹義宣は徳川家康から「出羽国之秋田仙北両所進置候全

可有御知行候也」と命ぜられた。秋田とは、秋田・檜山・豊島の三郡、仙北とは、雄勝・平鹿・山本の三郡を言う。仙北は古来、「山北」でこれは平安時代からの表記と呼称である。仙は山のことで中山道・仙道（福島県内の奥州道、中通り）と同じ類である。仙北の由来は山形県側からの呼称である。家康の判物に「仙北」と書かれたのは中山道などの連想があったからだろう。慶長十七年から書いた梅津政景の日記にも山北ではなく仙北と表記されている。こうして山北はしだいに仙北となった。ところがこれと全く逆に中仙道が正徳六（一七一六）年四月に幕府によつて中山道に改められた例がある。寛文四（一六六四）年の判物以後、仙北は現・仙北郡を指すものとなった。それまでの山本郡が仙北郡となったのである。ついだが、現・山本郡はそれまで檜山郡（十五世紀頃までは

米代川以北は葛西氏支配の河北郡）、現・河辺郡は豊島郡と呼ばれていた。なお、寛文四年の判物には仙北が仙乏と書かれていた。

十四、目長田の表記

目長田（秋田市仁井田字目長田）は、安東実季の頃に「めなかつた村」「目名潟村」の表記がある。その後、佐竹氏が入部して、『梅津政景日記』では「めなかつた」（四箇所）、「行方」（一箇所）、「目奈潟」（一箇所）、「目長田」（四箇所）と記されている。だから「目長田」は当時から使用されていたことは確かである。面白いことは「行方」である。これは常陸の行方郡が連想された誤りであろう。似た例に石田坂（秋田市豊岩字石田坂）を「石名坂」と書いている。「石名坂」も現在の日立市

にある地名である。日立市と常陸太田市の境にあるのが石名坂で南北朝時代からの古戦場として知名度が高い。なお、菅江真澄は『月の出羽路』に女名渴・男名渴を由来としているが疑問である。「めなかた」は「メナ渴」であろう。「メナ」とは古代東北方言で、川の屈曲・沼・支流・細流・汀などの意味がある。「メンコイ」「メンケ」(小さい、愛らしいの意)はその派生語であろう。現・雄物川がここを岸にして流れて付近に池沼が多かったことと合わせて考えれば古語「メナ」由来のほうが有力であろう。

十五、新川町

現在の秋田市川尻新川町。古くから渡しがあった。「斯波の渡」と言った。佐竹氏入部の頃は「新

川の渡」と言い、現代は「新川橋」である。「新川」という地名になったのには次のような変遷がある。佐竹氏入部当初、由利からの北国道(酒田街道)は赤尾津(亀田)を通過して豊巻(秋田市豊岩字豊巻)から目長田へ雄物川を渡り窪田に入った。ところが、現・旭川と旧雄物川の合流地点である川口を渡しに使用えば豊巻よりは駄賃が銀三匁五分(一両〓銀五十匁)ほど安くつくというので船場を川口に移すという陳情があり、やがて川口へ移った。本渡町(現・川元小川町の一部)辺りであろう。それがさらに川下へ移って番所を新川口番所と言ったのが略して「新川」となったしいである。本渡町に対して新渡町(現・川尻新川町の一部)という。だから「新しい川」ではなく「新しい川口」なのである。

十六、桐沢久右衛門

国替えの時、先発隊の和田昭為、川井伊勢守よりも先に白土大隅守と共に秋田入りをし、八月二日巳の刻に、安東家の後詰役、秋田兵右衛門、秋田右近から湊城を受領した功労の士である。下野国鹿沼の出身である。天正の頃（一五七三～九二）より義重に仕えている。ところが、この桐沢久右衛門の名が活字本になってから不思議に誤って伝えられている。「相沢久右衛門」「相沢久兵衛」の名前で紹介されている。その出典は分らない。ただし、『佐竹家譜』と『国典類抄』には、はつきりと「桐沢久右衛門」と記されている。いずれにしても「桐沢久右衛門」が正しい。それは秋田県公文書館の系図を見ても確かである。おそらく現存しているご子孫もその誤りを苦々しく

思っているに違いないだろう。活字本のもたらす恐ろしさである。活字本の孫引きがかくならしめるのである。やはり原典、さらに古文書まで遡って確かめねばならない。

十七、桐沢の義侠

義宣が白鷹を入手したという噂を聞いた父の義重は、六郷から窪田へやって来て城へは入らず馬口旁町に宿を取って、密かに桐沢久右衛門を呼び出した。桐沢は驚いて宿舎へ参上した。「久右衛門、義宣が世にも珍しい白鷹を手に入れたという話を聞いたが本当か。わしは常州における時分、百万石に近い禄を持っていたが、白鷹など夢にも見たことがない。義宣は果報者よのう。」と、あまりにも羨ましそうに言うもので、桐沢は翌朝未明、城

内の御鷹屋から白鷹を据え出して来て義重に見せた。義重は白鷹を拳に上げて矯めつ眇めつ見ているちにハラハラと落涙した。桐沢はこの様子を見て意を決し、「さほどに思し召し給わば御持参遊ばし給え。お屋形様（義宣）へは、それがしよりよく申し上げておきます」と勧めると、義重は子供のように喜々として早速白鷹を自身で据えて城へも寄らず、そのまま六郷へ帰って行った。義宣は桐沢を激怒したが、三日後、勘定奉行に取り立てた。

十八、大縄讃岐守

実名は義真である。ところが『佐竹家譜』をはじめとする諸書（ほとんど全部と言ってよい）には、「義辰」と記されている。誤りである。義辰

は慶長元（一五九六）年生まれで、讃岐守の孫である。思うに元禄年間（一六八八―一七〇四）に『佐竹家譜』編纂に当たって、義真五代孫の大縄久智が自家の古記録を提出する際「讃岐守」とあるのをわざわざ「義辰」と実名を添えたつもりが誤りだったのだろう。讃岐守は義真以外にいない。子の与七郎は左京亮、孫の義辰は与七郎・監物である。因みに筆者が『秋田藩家蔵文書』で調査した結果、大縄氏関係七件の書簡の宛名（佐竹義重・同義宣・芦名盛重から發送のもの）はすべて「大縄讃岐守殿」で「義辰（与七郎・監物）」はなかった。『佐竹家譜』をはじめとする古記録でもこんな誤りはざらにある。大縄義真は、芦名盛重の付け人として会津黒川城に入り、伊達政宗の会津侵略に際し、摺上原で戦って敗北。盛重と共に常陸に帰り、後に水戸築城の総奉行、関ヶ原前後の大

坂屋敷留守居役など要職を勤めた。

義真―与七郎―義辰―某―某―久智

讃岐守 左京亮 監物

十九、小貫頼久

父の頼俊は伊勢守として『佐竹家譜』にしばしば登場している。部垂の乱で宇留野義元に小貫俊通が攻め殺された。当時二歳の頼俊は乳母に抱かれて太田へ逃れ、成人して義元を滅ぼし、やがて佐竹義昭（十八代）の宿老（家老）となった。子に頼行と頼久があつたが、兄の頼行が早世したので弟の頼久が後嗣となった。この頼行と頼久が混同されることがある。どちらも受領名が佐渡守だからであろう。しかし頼久は官途名が大蔵大輔で小貫大蔵が通称となっている。彼は名護屋陣以

来、休む暇もない勤務であつた。家老として、朝鮮渡海、高野山佐竹廟造営、常陸堀之内大台城築城、関ヶ原前夜の数度にわたる使者、水戸城明け渡し、秋田国替えなど、心身の過労が祟つて慶長八（一六〇三）年三月二十六日、土崎の飯屋で死んだ。男子がなく、和田昭為の子を女の婿として後嗣にした。頼重という。頼久は全く粉骨碎身、佐竹のために尽くしたが、新参出頭人達の影に隠れる存在となった。

二十、川井忠兼

慶長八（一六〇三）年九月三日、家老の川井忠遠は義宣の命によつて出張先の横手城内で小姓達に誅殺された。この忠遠と一族の忠兼とがしばしば混同されている。忠遠は伊勢守、忠兼は備前守

で全く別人である。忠兼に関する主な事項は次のとおりである。天正十八（一五九〇）年十二月、佐竹氏が江戸城（常陸国水戸）攻略の際、江戸氏嫡男の室となっていた義重の姫を城中から救出したのが忠兼と当時十八歳の甥新三郎であった。天正十七年十月の須賀川落城の際、佐竹軍を落ち延びさせるため茅根土佐守通正と共に残って壮烈な討死を遂げた川井甲斐守忠脩は忠兼の甥に当たる。関ヶ原直前の慶長五（一六〇〇）年の八月、いまだ去就の定まらぬ義宣が家康に使者を派遣して徳川へ味方する旨を告げたその使者が忠兼である。子の加兵衛は梅津政景と同時期同役の院内銀山奉行を勤めている。なお、忠兼と忠遠の関係を知る資料はない。誅殺された忠遠を一族の系図から外したのであろう。

二十一、小姓組

小姓は番方（警備役）に属し藩主の警備が任であるが、外小姓と内小姓に分かれる。外小姓は大・小姓組といって五人の筆頭の下、百二十人。駄輩（七十石以上）の家から出る。御座之間詰で出書院の通行や切戸の錠口の護衛、参勤随従の任に当たる。内小姓は御小姓組といって五人の筆頭の下、百二十人。一騎（百五十石以上）の家から出る。御座之間詰で藩主の書画・武芸の相手や食事の給仕の任に当たる。この御小姓組より十五人選ばれて御納戸内に詰め、藩主の側に日夜勤仕し、月代を奉仕したりするのが御側御小姓である。また、七歳から十六歳までの前髪の少年が読書の試験を受けて藩主の側に仕えるのが倅小姓という。一騎の家の出でなければならない。倅小姓の中から選

ばれて御納戸奥向に出仕するのが御鈴之間倅小姓といつて十五人。奥向だから成人の男性は入れない。なお倅小姓は元服すると御小姓組に回される。御小姓組は番方に属しているが、側方の御用人の監督下である。また、川井忠遠の誅殺に当たった小姓達とは御側御小姓のことである。

二十二、義宣の参勤

豊臣政権以降、諸大名は在国することが少なかった。佐竹義宣もそうである。豊臣時代、義宣は天正十八年四月から太閤が死んだ翌年の慶長四年九月まで九年五ヶ月の間、彼の軍役・参勤は六年五ヶ月である。常陸在国は三分の一に過ぎなかった。つまり三年のうち二年は国を離れていたことになる。それが、徳川家康が天下を取った慶

長五年九月から義宣没年の寛永十年一月までの三十二年四ヶ月の間の軍役・参勤は十七年二ヶ月である。在国期間は二分の一強である。つまり二年のうち一年弱が国を離れていたことになる。豊臣時代と徳川時代を比べてみると圧倒的に豊臣時代の軍役・参勤の多かったことが分かる。小田原陣・九戸乱・名古屋陣・伏見城普請等の軍役が多かったが、なかでも一年八ヶ月の名古屋陣は長かった。もつとも、徳川時代でも元和七年二月から八年十二月までの一年九ヶ月、寛永二年一月から三年十月までの長いのもあった。なお、参勤は平安時代いや奈良時代からあった。

二十三、誕生日

満年齢の現在では誕生日に祝いをするのが当た

り前になっているが、太平洋戦争敗戦前の日本では年齢は数え年が普通であった。普通であったというのは、特別な場合には満年齢が執られた。小学校教育、徴兵検査がそれである。無論、明治以降のことである。だから、それ以前は満年齢が日常生活に使われることはなかった。まして、徳川初期の義宣時代にはあろうはずがない。ところが誕生日祝いがあった。寛永四（一六二七）年七月十六日に義宣の誕生日祝いが城内で行われた。当日は孟蘭盆の最終日とも重なり、外町の大町・本町から若者達が登城して踊り興じた。義宣の誕生日は元亀元（一五七〇）年七月十六日である。卯刻（日の出頃）に生まれたという。寛永四年は義宣の数え年五十八歳の年である。満年齢では五十七歳ということになる。このように、当時も誕生日祝いがあったことは興味が持たれる。なお、

墓石に刻まれている年齢は数え年である。

二十四、諱

諱とは「死後という生前の実名。後に貴人の実名を敬つていう。死後にに尊んでつけた称号」〔『広辞苑』〕。とにかく実名である。しかし普段はほとんど使われていなかった。政景日記でも実名で記されている人物はほとんどいない。ただし例外はある。岩城吉隆が「修理」と呼ばれていたが、義宣の養子になって「義隆」と名前を改めた時は政景は「義隆様」と記している。しかし翌月から「修理様」に戻っている。他は全部通称（仮名）である。いや、もう一人いた。芦名義勝を「義勝様」で通している。義宣も特別な場合以外は通称で呼ばれていたであろう。すなわち、元服以前は無論、幼

名の「徳寿丸」、元服後は「次郎義宣」の「次郎」であつたはずである。そして家督後、家中からは「御屋形」と呼ばれた。中央政界の大名同士では「常州」「羽州」「秋田」「佐竹」「右京大夫」、あるいは「侍従」などと呼ばれて、「義宣」とはめつたに呼ばれたり書かれたりすることはなかったろう。筆者の知る限りでは一度だけある。『利休百会記』に「佐竹義信」と書かれている。この間違いのお陰で筆者は自信をもつて「よしのぶ」と言えるのである。

二十五、間道

天正十七（一五一九）年、安東氏の湊家と檜山家の合戦で、檜山城が落城目前となつた。その時、上杉景勝の命により由利勢が檜山方に付き檜山城

包囲軍が背後を衝かれることになり形勢は逆転。湊家に味方した仙北勢は土崎経由の羽州道も通れず間道をを通り仙北へ退却した。間道とは、五城目から仁別・太平・山谷・岩見・船岡へ通じる道である。筆者は一度、五城目町北ノ又と秋田市仁別間を踏査してみた。旭川・馬場目川の分水線を超える難所だが、中世では当然あるべき山道と思つた。むしろ現在の南秋田郡と仙北郡の往来はこの道が多く使われたのではないだろうか。秋田市の補陀寺・藤倉城・藤倉神社の創建・設置も頷ける。間道と言つたが中世ではこの辺が要衝だつたろう。佐竹義宣入部十三年前のことである。

二十六、実高

佐竹二十万石の実高はいったいどれほどだった

のであろうか。最近の鹿角・由利郡を除く秋田県（佐竹領）の米の収穫量はだいたい年六十万トンである。これを石数に換算すれば四百万石である。一石は百五十キログラムだから、六十万トンをそれで割ればよい。江戸時代と現代の農業諸条件を勘案して、江戸時代の収穫量は現代の一割とみるならば六万トンつまり四十万石である。しかしこの数値はこれより高いことはあっても低いことはない。つまり四十万石以上ということである。

二十七、入部時の内高

秋田藩の内高（幕府公認）は佐竹氏入部以前すでに後の寛文四（一六六四）年の判物二十万五千八百石（うち秋田・仙北は二十万石）を越えていた。天正十九（一五九二）年一月十七

日付の豊臣秀吉の朱印状によれば、

安東氏 五万二千四百四十石、代官領

二万六千二百四十五石、計七万八千六百八十五石。

小野寺氏 三万一千六百石、代官領

一万五千八百石（推定）、計四万七千四百石。

六郷氏 四千五百十八石。

戸沢氏 四万四千三百五十石。

本堂氏 八千九百八十三石（ただし、天正十八

年十二月十九日付）

合計 十八万三千九百三十六石

この石高は秀吉へ差し出した各大名の申告が基本となっているから実高とはかなりの差があるだろう。それと後の安東氏が総高で二万石ほどの伸びがある例からみて、秋田・仙北六郡は内高三十万石は下らなかったろう。

二十八、寛文印知

徳川幕府は寛文四（一六六四）年四月五日付で全国の大名全てに一斉に領知の判物朱印状を公布した。「寛文印知」と称される。この時、秋田藩では出羽国六郡領地之高目録三十一万九千八百四十七石を提出したが、「御役高二十万石に御座候間、御役高之通り被成可被指上候。御役高より過分は目録メ外可被成。」との指示があった。だからこの時すでに少なくとも三十二万石はあったということである。つまり、幕府公認の内高である。これが当高なのである。したがって実高は七十万石を越えていたものと思われる。筆者の算術では、当高の二・四倍が実高なり。詳しくは小著『土居輝雄講座・講演集』（二〇一九年発行）をご覧ください。

二十九、全国一の米どころ

明治三十一年の県別米收穫量によれば、一位が新潟県、二位福岡県、三位千葉県、四位が秋田県となっている。その石高は新潟二百六十五万八千二百五十三石、福岡百七十九万二千五百三十三石、千葉百七十五万二千百七十三石、秋田百六十二万四千四十四石である。この石高は幕末とそれほど変わりはないだろう。延いてはこれを基に藩政時代の中期・初期までさかのぼって類推することができる。まず、新潟だが、ここは村上五万石、新発田五万石、長岡七万石、高田十五万石の四藩がある。次に、福岡県では黒田五十二万石、柳川十二万石、久留米二十一万石、小倉十五万石の大藩四藩がある。三位の千葉県は幕臣の小藩群がず

らりと軒を並べている。さて、四位の秋田県は由利・鹿角二郡を差し引いた百四十一万石が佐竹領二十万石なのである。これをもって秋田藩は藩政時代に全国一位の米どころということが分かるであろう。なお、役高（表高）と収穫高（実高）にかなりの差があるのは他藩も秋田藩と同様、役高を上回る内高（秋田藩では当高）があつたということである。また、役高は大名の家格でもあつて必ずしも収穫高の順位にはならない。それは、秋田藩をみれば分かる。つまり、秋田百万石は過言ではない。

三十、当高の発祥

秋田藩独特の「当高」というものがなぜできたか。佐竹氏入部当初の租税率は六ツ成（六公四民）

であつた。当然そこに不公平が生じた。例えば、田までの距離や道路状態に差があれば、たとえ同級等田でも労力に差が出る。それで田ごとの実情に添った免が導入された。年貢 $\parallel$ 高 $\times$ 免。しかし、免では全体の年貢率が不透明である。これは政治不信につながるからどうしても年貢率平均の情報公開が必要となる。だが、藩の基本として義宣入部当初、好評であつた「六ツ成」は厳守したかつた。そこで、「 $X \times 0.6 \parallel$ 年貢」（何かに 0.6 を乗ずれば年貢になる）を考えねばならなくなった。この X （何か）が当高なのである。こうして当高が生まれた。その公式は、当高 $\parallel$ 年貢 $\div 0.6$ である。

三十一、晦渋の当高

秋田藩の年貢は当高の六割なので、一応、公的

には六公四民ということだが、当高が必ずしも石高と同一ではない。免六ツであれ、当高 $\parallel$ 石高であるが、免は三割台から七割台まであるので藩全体からみれば、その平均が免六ツつまり六割ということになる。しかし果たして免六ツが平均という証拠は何もない。免の平均が六ツ以上の高免になっているかもしれない。当高の名のもとに実質六割平均を上回る年貢を課していたとも考えられる。六ツ成が藩の基準つまり大前提なので不公平は正に因る免平均の情報公開にはどうしても年貢率六割は厳守したかった。こうして生まれたのが当高だった。結局、当高は石高の代用であり、表面上は年貢率六割平均を言うためのものであるが、実際は分らない。(年貢 $\parallel$ 当高 $\times$ 〇・六)の平均六ツ成は理想であり実際は田ごとの免が肝要である。つまり(年貢 $\parallel$ 田ごとの実高 $\times$ 免)であ

らねばならない。その合計が幕府へ報告する内高ということになる。それを秋田藩では「当高」といつて晦渋なものにしている。実に巧妙な渋江算法である。

参考 ①当高の公式 収穫高 $\times$ 免 $\times$ 六分の一〇

(?) $\parallel$ 当高

②年貢の公式 当高 $\times$ 一〇分の六(六つ成)

$\parallel$ 年貢

③六分の一〇の「?」とは(検算例)

一〇〇(当高) $\parallel$ 六〇(年貢) $\times$ 六分の

一〇(六つ成一〇分の六の移項による)

三十二、家格制

秋田藩の家格制は、一門・引渡・廻座が本身、次が一騎(上士)、以下は駄輩(平士)、不肖(下

士)、足輕(輕輩)、中間(小人)の順である。一騎以下の禄高と実収入は次のとおりである。

一騎(百五十石以上。九百万円以上)

駄輩(七十〜百五十石。四百二十万〜九百万円)

不肖(三十〜七十石。百八十万〜四百二十万円)

この中で歩行は二十俵以上(八十万円以上)

足輕(三両一人扶持以上。四十八万円以上)

中間(二両以上。二十万円以上)

なお、この換算額は一石 $\equiv$ 十万円、年貢六ツ成(六公四民)によるものである。ただし扶持米取り(歩行以下)は禄高全額が収入となる。*近進(駄輩)、近進並・歩行・歩行並み(不肖)。当時の生活水準は、上級武士階級が現在の日本人並だが、他は発展途上国程度とみれば、為替レートから輕輩以下の禄高でもどうにか生活はできたものと思われる。

三十三、佐竹の飛び地

佐竹氏の石高は寛文四(一六六四)年四月五日に初めて二十万五千八百石という判物ではつきりした。慶長七(一六〇二)年に国替えになって六十二年後である。このうち、二十万石は秋田・仙北六郡で、五千八百石は下野国河内・都賀二郡のうち十六ヶ村である。都賀郡の中心は萱橋で旧都賀郡萱橋村、現栃木県小山市萱橋で、小山市北部、鬼怒川と思川の中間地帯に位置する。河内郡の中心は薬師寺で旧河内郡薬師寺村、現栃木県河内郡南河内町薬師寺で、小山市の北東隣に位置する。佐竹氏はこの両地に代官を置いて管轄した。主として信太氏が勤めている。佐竹義宣はこの地でよく鷹狩を行っている。また、持病の腫れ物ができる、塩原温泉の湯をこの地まで運ばせて汲

湯湯治をしたものである。

三十四、番士

大御番と御物番がある。大御番とは、大番とも言い、城中・城下・領内、江戸屋敷の警備や幕府軍役の任に当たる。元来、京都・鎌倉に参勤して宿衛する中世以来の役職で、幕府は勿論諸藩すべてに同名の役職がある。秋田藩の場合は、番士およそ千二百人。城下の平士すべてが服務することになる。大番頭―組頭―番士。十番あつて各番に四組、各組に三十人の番士。御物番とは、門番・雑役が主である。番士およそ千二百人。城下・在郷の下士（同心）・輕輩（足輕）が服務する。御物番頭―組頭―番士。十八組あつて各組に二十五人―三十人の番士。参考までに江戸幕府の大番の

組織は左のとおりである。十二番から編成された各番に、番頭（一人）―組頭（四人）。各組に番士（五十人）―与力（十人）―同心（二十人）。

三十五、向宣政の故郷

向氏の秋田初代は宣政である。彼は飛騨国桜洞（岐阜県萩原町）城主三木真頼の二男で、小鷹狩（同県古川町）城主小鷹狩政宗と称した。小鷹狩一帯を向小島とも呼んだので向氏の通称がある。天正十三（一五八五）年、前年の小牧長久手合戦で三木氏一族が徳川家康側に味方したため、秀吉の命を受けた金森長近に滅ぼされて一族は四散し、ある者は信濃山中で殺害されたり、ある者は関東まで逃亡したりした。宣政は常陸国まで逃れて来て佐竹義宣に仕官し、義宣の一字を拝領して宣政

と改名し、氏名も豊臣秀吉を憚って向氏と称した。だから「向」はいわば世を忍ぶ仮称とも言える。宣政は佐竹義宣に仕えて拔群の事務・財政の能力を発揮し、佐竹氏の秋田国替え後、外様新参では最初の家老に拔擢された。このように出世して彼は当時名乗っていた公式の同氏および俗称の小鷹狩氏を改めて、いつかは本姓の三木氏に戻したいという夢を抱いていた。すでに世は徳川氏の時代になっていたから、何ら憚るところはなかった。それが実現せぬまま元和四（一六一八）年に五十九歳でこの世を去った。

三十六、義宣の妹

佐竹義宣の妹なすは初め、常陸江戸氏（水戸城主）嫡男に嫁いだ。それが天正十八（一五九十）

年十二月、江戸氏居城の水戸城が佐竹氏の急襲によって落城した。なすは炎の中から助け出されて佐竹家へ戻った。こうして、慶長十六（一六一一）年に公家の高倉永慶に再婚した。時に三十一歳である。関ヶ原合戦の時には石田三成方に味方した佐竹家が勝手に京都の公家と婚姻を結ぶことは許されるものではない。徳川家康が佐竹家へ縁談を持ち込んだのである。その頃、宮中乱行事件があった。家康は綱紀肅正に取りかかった。そのため天皇も代替わりした。その結果、幕府の権力が宮中にも及ぶようになった。家康はこれを機会に宮中を支配するための手を緩めなかった。その一つは大名家の子女を公家に送り込むことであった。いわばスパイである。まず、佐竹家のなすが選ばれた。彼女は三十一歳の出戻りであったが家康の世話、いや命令では不可能な話も可能になる。この

話に喜んだのは母親の義重夫人であった。彼女は公家とその家柄に惚れ込んだ。何しろ高倉家は藤原姓で大納言・正二位の家柄である。永慶もやがてそうなる。普通の大名家ではとても及ばない官位である。因みに佐竹義宣はそれより後の寛永年間で従四位上・左近衛権中将である。なお、高倉家は衣紋道（装束の着付）の家元である。

三十七、北義隣

寛永五（一六二八）年、公家高倉永慶の二男重丸が佐竹北家の後嗣となった。当時、北家は絶家となったまま七年を経過していた。重丸の母は秋田初代藩主、佐竹義宣の妹なすである。北家に入った重丸は、初め、久保田城下に住し、北家ゆかりの又四郎と改名する。彼が角館所預となった

のが、芦名家断絶に伴い、その跡を承けた明暦二（一六五六）年で当時三十八歳、北家に入ってから二十八年後である。義隣と名乗ったのが寛文五（一六六五）年頃である。彼はいわば新参の佐竹一門であるが、これがかえって義宣養子の二代義隆にとって親しい間柄となる。当時すでに五百年の歴史を誇る佐竹家は一門および譜代の勢力が反面大きなしからみとなっていた。これはいかに藩主と言えども容易に排除できるものではなかった。行政改革が必要だったわけである。初代藩主の断行した新参登用による近世政治の基礎を踏襲するのが二代藩主の責務であった。その時、よき協力者となるのが北義隣なのである。なお、義隣嫡男の義明正室は香道の家元三条西家の姫である。

三十八、抜け穴

窪田城本丸から抜け穴を通って八橋へ抜ける逃げ道があったという伝説を裏付けるものがある。御隅櫓の地下から直下の帯曲輪の櫓を経て内堀際へ通じる抜け穴である。そこへたどり着けば北内堀と西外堀の間に東側に堀留、西側に高い土塁がある。この二つの間も堀である。その堀に小舟が用意されていた。隠し舟である。西側の土塁下には見えないように水門が造られていて、非常時脱出に小舟で外堀から旭川へ出て、あとは情況に応じて旭川に通じる水路をたどって八橋へなり、泉へなり、手形へなり、広面・檣山・太平川なりに出ることができた。この隠し水門はおそらく幕末まであったろうが、極秘のことであり、絵図は勿論、記録にもなかったから限られた者にしか知ら

されていなかったと思われる。

三十九、総社神社

秋田市川尻総社町にある総社神社は佐竹氏入部の頃までは今の千秋公園にあつて三浦氏の氏神であつた。もともと総社とは、多くの神社の祭神を一ヶ所に勧請して祀った神社の称である。一石・一郡・一郷の総社や、寺院内の総社、有力氏族邸内の操守などがある。代表的な一国の総社について言うならば国司の巡拝・奉幣の便宜のため国内の諸神を集めて祀った。秋田市の総社は神亀元（七二四）年に三森山（千秋公園）に勧請したし、たというから三浦氏以前よりあつた。だが妻神の天照大神は変わらなかった。尤も三浦氏は桓武平氏でもある。神亀より以前は土地の氏神であつ

たろう。それは先住民の原始宗教へとつながる。中央政権がそれを懐柔して天皇家の親神である天照大神を入り込ませ、やがて入れ替えていく。三森山が神明山と呼ばれていたわけでもある。なお、三森山は御森山の変化である。佐竹義宣は神明山に築城するに当たって、総社を当時舟着場であった川尻村下浜（後の檜山下浜）の稻荷社境内に移した。その後、宝永四（一七〇七）年、太平川決壊のため、現在地に移った。檜山南部、川口・川尻の鎮守の神である。なお、岡山県、群馬県に同名の地名がある。ただし読みはソージャである。

第九章

繰り言余録

一、久保田城復元

秋田市の千秋公園は近世城郭史の中では異彩を放つ城跡である。戦国時代は築城術の最も発達した時代であるが、関西と関東では顕著に違うところがあった。関西では石垣と水堀、関東では土塁と空堀がその代表的なものである。戦国末期に関西では織田信長の安土城に見られるような白壁の天守閣と多聞壁が現れるに及んで、依然として関東の板櫓と板塀では美的面でも格段の差が生じた。そればかりではない。豊臣秀吉の伏見城、大坂城、名護屋城（肥前）のような円郭式城郭が築城されて近世的なものへと発達していった。これに対して東国は中世からの伝統的な土塁・空堀、連郭式の山城であった。特に関東・東北はこの伝統を守った。常陸の佐竹氏の太田城も水戸城もこ

の例に漏れない。無論、佐竹氏一門や家臣団の城も全く同様である。関ヶ原後の慶長年間には築城ラッシュであった。この時期に関西の城郭スタイルがどつと関東や奥羽にも入ってきた。すなわち、石垣・天守閣・多聞櫓・同長屋・円郭式などである。今日、城と言えはこのようなスタイルを指す。しかし、中世の土塁・空堀・板櫓・板塀・連郭式の城も忘れてはならない。これも立派な城のスタイルである。佐竹義宣が秋田へ国替えとなつて窪田に築城したのが慶長八（一六〇三）年だから築城ラッシュの時である。だが義宣は築城に当たつて東国の伝統的なスタイルを採った。すなわち、石垣を用いず土塁とし、天守閣を造らず隅櫓を配置した。義宣のこの方針を幕府への遠慮、経済的な理由、石材の不足等のためとする説が圧倒的に多いが、常陸以来の伝統的な築城法に従つたとい

うことも付け足しておきたい。義宣は豊臣時代、その築城については多くを経験し詳しく学んでいる。その築城技術に関しては他の大名より勝ることはあっても劣ることはなかったと敢えて断言したい。それは千秋公園に残るその跡を見れば歴然としているからである。だが義宣は単純に中世東国の城郭形式を踏襲したのではない。そこには近世的な要素を随所に採り入れている。山城でなく平山城に、したがって空堀でなく水堀に、円郭式を採り入れながら連郭式を基本に、等きりがない。ついでながら外堀の広さと美しさは全国有数である。それよりも千秋公園そのものが中世と近世をミックスした土塁の城として全国屈指であり、非常に貴重なものと評価されてよいだろう。この名城跡を何とか復元（復興でもいい）したいものである。本丸では表門・裏門・帯曲輪門・埋

門・多聞長屋・板塀・櫓座敷（御出書院）・長坂門。二の丸では長橋・土門・不浄門・唐金橋（上土橋方面）・黒門・松下門・唐金橋（中土橋方面）。三の丸では、穴門・中土橋門・大手門。それに穴門堀反の片側町化である。これらを一度に造り上げることは不可能であろうから、市長一代に一箇所（あるいは一期に一箇所）造っていけばどうだろうか。長い年月は掛かるが、それだけ市民の夢が具体的に未来へつながる。造成中でも十分に宣伝になるし観光の目玉となろう。隣県の山形市は山形城復元を二十年とも三十年とも言われる計画で進めているらしい。地場産業の弱小な秋田市で二十一世紀を生きていくには観光に力を入れるべきである。観光で最も有力なのが名所旧跡である。秋田市は千秋公園をフルに利用したらい。今なら千秋公園の久保田城復元は可能である。

二、銀札事件は御家騒動の隠れ蓑

佐竹二十万石を揺るがした「銀札事件」は秋田騒動とも言われる。これは明らかに失敗に終わった。兌換準備金のない銀札発行だったことや、銀札発行に秋田の商人達が消極的だったこと、領民が銀札に不安を抱き貨幣にこだわったこと等が失敗の原因である。だが、この秋田騒動とも言われる所以は、これが御家騒動と絡んだからである。むしろこちらの方が大きかった。銀札事件は単なる失敗であって事件とは言えない。宗家後継者を巡る謀略や、一門と重臣の確執、連続藩主怪死による政局不安などからくる騒動であった。それもたった一人の人物によつて翻弄された。彼は目的のために銀札遣いを利用した。彼には銀札などどうでもよかった。藩財政は窮迫し、半知借り上げ

や運上金引き上げの税制改革も、緊縮予算や儉約令の財政改革も、機構を見直す行政改革も、それまですべて行ってきたことで、もはや手の打ちようがなくなっていた。そこで登場したのが銀札発行である。有志は今や唯一の藩財政を救うものとして信じてこれの施行に走った。ところが、それがとんでもない方向へ行つた。銀札事件の失敗は大変なものにすり替えられてしまったのである。銀札の名のもとに銀札に直接かかわっていない者が重罪となつているのはどういうことだろうか。銀札事件は御家騒動であり、その内容からいっても規模からいっても、およそ百年前に起こった仙台伊達騒動を上回った大騒動である。

どんでん返しのきっかけは太田内蔵之丞の直訴であつた。そして西大和が久保田到着してからそれまで優勢であつた梅津ら銀札派が譜代ら守旧派

に押され気味となり、藩主義局も今更ながら一門・譜代の絆の強さを思い知らされる。さらに決定的なダメージとなったのが父壱岐守義道からの密書であった。先代義真の怪死に関してである。もはやこの父子には一刻の猶予も許されなかった。義局には一門・譜代の巻き返しがかえって都合がよかった。銀札失敗に被けて一味を処罰すればよかったのである。罪状はどうにでも付けられた。なお、土壇場で梅津らが那珂忠左衛門の企てた切り札を謀議したことが罪状となったのではない。時間的にみてもそんな余裕はなかったし、謀議が漏れるほど彼等は軟弱でなかった。義真怪死以来、一蓮托生の一枚岩となっていた。それもこれも義局擁立と銀札施行のためであった。だから彼等の罪状は那珂のクーデター発覚ではない。野尻邸から発見されたという密書もこれではない。万

が一発覚したとしても義局にはそれを裁く余裕がなかったはずである。しかも騒動の広がる恐れがある。自分が亡き者にされる不安と怒りがあってもそれを表沙汰にすることのできない事情があった。もたもたすれば自分が危うかった。とにかく銀札事件は先代藩主怪死疑惑隠蔽工作だった。だが処罰された者達は一門によって裁かれたものと思っていたに相違ない。

三、義宣の魅力

筆者が佐竹義宣に特に惹かれたことは、窪田の城造り、町造りに際しての大土木工事である。佐竹義宣が入部した頃の今の秋田市は一大湿地帯であった。特に千秋公園の東側と南側は自然の要害と言われるくらいだった。義宣がここに城を構え

藩の中心地として都市計画を実行するに当たって、先ず最初に取りかからねばならなかったことは土地造成だった。そしてその土地造成で重要なことはこの広い湿地帯を干拓することである。干拓の順序として第一番に取り掛からねばならないことは沼や小川や沢などから流れ入る水を食い止める土手を造ることであった。現在に残る明田や大堰反や手形堀反町や広小路や古川堀反町や中長町などの道は初め土手として造られたものである。第二番目に取りかかったのが堀割である。これは排水の処理場にもなるわけである。堀割が長野沼や太平川や旭川や入川と結んで排水をスムーズにした。これがまた城を守る面でも役立つわけで一挙兩得ということになる。第三番目は家臣団の屋敷の盛り土である。どのような盛り土であったかは、現在もわずかに残る石塚屋敷の跡とか明

徳館・女子師範付属小学校の跡に当時を知るよすががある。以上、干拓という大工事を実行するには莫大な土が必要となる。東部は富士山を削ることとで間に合うが、その他の場所はそうはいかない。広小路の堀をはじめ他の堀を掘った土は土塁に向ける程度である。そこで目をつけたのが旭川の掘り替えだった。掘り替えによって生じる莫大な土だったのである。なお、堀川ができることによつて一に舟運から商業が盛んになり、二に城下の防備が堅固になるわけだが、これも土を得るために掘り替え工事があつたればこそである。先ず初めに掘り替え工事ありきである。さて、義宣に惹かれたことがもう一つある。一寒村に過ぎなかった土地に築城し、町造りをしたことである。これは甚だ驚異なことである。自然地形や防備を考慮した縄張り、資金、労力もさることながら、関ヶ原

の負け組が新城を造ることは相当な勇気と覚悟が必要である。このようなことは当時、他に例がないのである。

四、新住居表示

新住居表示ができる以前、秋田市内では紛らわしい町名が幾つかあった。保戸野鉄砲町と外町の鉄砲町、保戸野愛宕町と檜山愛宕下町、内町の亀ノ丁と外町の亀ノ丁、土崎の酒田町と外町の酒田町など郵便配達員を困らせた話もある。もちろん、これが新住居表示への大きな理由になったのではないだろうが、よくその一つに挙げられていることは当時を知る筆者などは確かに記憶している。さて、新住居表示になって随分不便になったことは事実である。先ず、町名の由来が消滅して

歴史を辿ることが不可能になった。次に、やたらに「中通七丁目」というように、〇〇の〇丁目が多くなって具体的な町並みのイメージが頭に浮かばなくなった。この二つだけでも大きなマイナスである。また、それまでは道を挟んで向かい合っている両側が一つの町内を形成していたのが、以後は背中合わせが同一町内で道路が境界線になってしまった。これでは町内会が不自然で、したがって伝統的行事を行うのが至難になった。この他まだまだ挙げるときりがない。どうにかならないものだろうか。新興の市町村ならともかく、何百年もその土地の自然・文化によって形成されてきた旧町名が新住居表示によって崩壊された。これは自然破壊に続く文化破壊といっても過言ではないだろう。明治以来、日本はあまりにも欧米文化に追従しすぎた。それが今日まで延々と続いている。

五、インタビュー「土居輝雄の世界」

歴史作家・土居輝雄は教職を定年退職してから誕生した。それまでは国語教師として専念し「実践国語賞」を受賞するなど全国的舞台で活躍した。歴史作家とは無縁であった。退職して以来十五年（平成十六年現在）、歴史を書きに書いて著書は二十冊を超えようとしている。そのエネルギーはどこから湧いてくるのであろうか。その該博な知識はどのようにして得たのであろうか。そのユニークな発想と鋭い洞察は何に因って生まれるのであろうか。

●お歳は幾つですか。

土居 昭和三年生まれです。今年は昭和なら七十九年ですから七十六歳になる年です。数い年ならそれに一歳を足して七十七歳、喜寿ですよ。

●お若い。本当ですか。

土居 みなさんがそうおっしゃいます。わたしもそう思います。だってこの仕事を始めてたった十五年しか経っていませんからね。新人ですよ。現職時代からずうっとこの仕事を続けておられる方と比べたら私など番付なら序の口でしょうな。ただ、実働時間はそれほど差はないかもしれません。この十五年間はこれに集中しましたからたいへんな時間になります。何しろ、トイレ・お風呂・ご飯中でもそのことばかり考えていましたからね。就寝中も、道路を歩いている時も、赤信号で待っている場合も、とにかく歴史的事件や登場人物の心理をとことん考え込みましたね。そんな時間は普通の方の四倍にはなると思います。だから現役四十年、退役十五年のお方より上回るかな。それにプラスするところの拘束されない自由の身の

十五年という集中力だね。はっは。冗談と思って聞いてください。

●大作『常羽有情』はこのようにして生まれたのですか。わずか三年で。

土居 あれは三千三百枚の草稿で書き直しや清書を数えると約四百万字、書いたことになります。まだワープロもパソコンもやっていませんでしたから硬筆で書きましたね。書き終わった時は腱鞘炎になっていました。一年間、字は書けませんでした。

●取材旅行はどここへ行きましたか。

土居 ほとんど日本全国を回りましたね。おかげで海外へ行く暇はありませんでした。今後も行けませんね。まだまだ調べなければならない所がありますから。現地へ行くと想像が広まり思考が深まりますね。時には何も得られないことがあつて

も現地の風に触れ、野草を見、野鳥を聞き、空を仰ぐだけでも心が洗われた気持ちになります。

●国語教師が歴史作家に役立ったことはありますか。

土居 そりゃあ大いにありますよ。国語科というのは言語と文学なんです。言語の力で古文書や古記録を読む場合、文法・文字・語彙の知識によって正確に読み解けます。また、文学の力で文の背後にあるものを想像した場合、歴史という科学に没頭している方々にすごく優越を感じたものです。

●お若い頃のお話、お願いできませんか。

土居 旧制中学から大学までが戦中・戦後ですよ。世の中みんなが苦しかった時代ですよ。とても大衆など行ける時代ではなかったですね、それも東京には。それでも行っただけですよ。経済上で中退

を覚悟してね。おまけに私は子供の頃からの肋膜炎が完治していなかったので中退どころか死ぬ思いでしたね。それにもかかわらずなぜ上京したかって？実は映画監督になりたかったのですよ。大学は文学部英文科に入りました。本当は仏文科に入りたいかったのですが、その大学では戦後なくなっていました。なぜ仏文科かというとフランス映画の影響なんです。そういうわけで映画鑑賞はもっぱらフランス映画で、日本映画は撮影所見学でした。私の通った撮影所は大映多摩川撮影所でした。ね。半年ほどで木戸御免になりました。一方、歌舞伎にも魅せられました。また、寄席もよく行きました。今では伝説になっている名優・名人の舞台もこの目で見ました。懐かしいですね。それから、歌舞伎の影響から日本舞踊や邦楽が好きになって稽古場や温習会巡りに夢中になったもので

す。

●それで結局映画監督志望はどうなったのですか。

土居

歌舞伎も寄席も日本舞踊も邦楽も趣味的なもので映画監督の夢は持ち続けましたよ。夏休みには撮影所で無報酬の下働きができるまで漕ぎつけましたが、そのうち経済的事情と肋膜炎でどうにもならなくなり、一年ほど秋田で様子をみようと帰って来たのがそれつきりになったというお粗末です。

●（笑う）残念でした。ね、未来の大監督だったのに。ひとつお聞きしたいのですが、日本映画の監督でだれにここが良かったですか。

土居

あの当時は生意気で日本映画監督ではだれもいませんでしたね。弟子入りしたかったのはフランス映画監督達でした。

●で、今は？

土居 小津安二郎かな。でもこれは趣味の世界から見てですよ。多少の妥協はありますが。今、本業は歴史作家ですから。こっちの方は厳しくならなければなりません。

●近況を伺ってもよろしいでしょうか。

土居 さきがけカルチャースクールの「佐竹史探訪」と明德館懇話会の「佐竹八百年」とランタナの会の「作文教室」講師、秋田放送の「佐竹今昔物語」、秋田コミュニティ放送の「佐竹の歴史散歩」出演、週刊あきたの文化欄執筆、佐竹城下を歩く会の案内。これらは毎月のものです。その他に講演や短期間の講座があります。

●最後になぜ佐竹氏にこだわるのか。また、歴史小説について信条をお聞かせください。

土居 佐竹氏という小さな針穴から日本史を覗

き、その中にうごめく群像の生きざまから人間を考える、ということですか。また、学者の仮説と作家の推理は同じで、作家は推理を肉付けし学者は仮説を検証します。そうはいうものの歴史小説は史実を重視しなければいけません。史実七分に虚構三分といったところでしょうか。虚構三分といっても全くのフィクションではありません。史実について作家の感想・意見・解釈も虚構ですからやはり史実第一主義です。言ってみれば、私の歴史小説は「小説スタイルを借りた歴史ドキュメント」でしょうか。少しキザかな。(笑う)

六、佐竹秀宣

鎌倉市の早田雅美という方からこんな手紙が届いた。

「拝啓 はじめてお便りいたします。先日、書店にて先生のご著書『大河』を購入いたしました読者のひとりでございます。今年四十歳になる会社員でございます。佐竹氏に関する引き込まれるような文章にせんえつながら一気に読んでしまいました。

実は本日、突飛にお手紙いたしましたのは私の祖母の実家の家系に関する事で先生なら何かご存知の事ないしはご教示いただける事がないかと、突然ですが同家系図の一部の縮小コピーをそえてお手紙してしまいました次第です。ご無礼はおゆるし下さいませ。

私の早田と申します家は江戸時代、金沢の前田藩士でしたが明治になって前田家の方々に付いて東京に出ました。私は子供の頃から両親に先祖の話聞かされたり伝来の武具などをみて育ったた

め歴史にはしぜんに興味を持つようになりまして。

ところで、私の父方祖母の実家は野村と申します。幕末の当主、野村莊左衛門は長野県松代藩士で幕末の同藩侍帳によると御祐筆役となっております。祖母存命中より野村家はもとも源氏の血を引き秋田の殿様の分かれなので早田より格式が高く、昭和二十一年に亡くなった祖父も頭が上がらなかったというようなエピソードや、祖母自身はやはり松代で生まれ川中島で育ったという話や、川中島周辺の水害の話などをよく聞きました。

祖母は野村家の長女で他に男子が一人居りましたが、その大叔父は養子をとって現在その野村家はその養子が嗣いでいます。

前置きが長くなりました。その養子が現在、野村家（佐竹家）の系図を保管して居り、昔、私が

その写真を撮らせてもらいました。江戸後期につくられたものと思いますが、新羅三郎より始まる実に長大な巻物です。

今回お送りしたコピーはあまりに長いのでタイトル部分から急に義重公あたりにつないでしまいました。これによりますと、佐竹義宣公の子に大膳秀宣という者が居り秋田転封の頃、徳川と縁づくよう申しつけられ常陸に知行地を与えられ残ったが、数代を経て改易となり先祖の縁で信州へ落ち、真田家に仕えるようになったとなっています。

私が図書館などで調べられる範囲では秋田の正史には佐竹秀宣などという人物は見当たらず、たぶんどなたからも相手にすらしていただけないような気がいたします。

ただ、私にすれば実の祖母の実家の家伝ですし私が子供の頃、経済的に家計が苦しく、扇子（た

ぶん御本骨扇）の紋の着物などが質種になっていった事をおぼろげに記憶しています。またこうしてお手紙しながら思い出しましたが、松代藩では真田の殿様から客分のように扱われていた話なども聞きました。

今はすべて遠い歴史の波間に流され消えてしまった事ばかりですが、何か少しでも調べる手がかりがないものかとつねづね考えて居ります。

もしかしたら正史の裏にかくされた……と申しますか、ささやかな歴史のロマンと申しますか、そんなものを追えないかと思ったりもいたします。

もし土居先生が何かお気付きの事がございましたら、あるいは佐竹大膳の事でご存知のことなどございましたらお知らせ願えませんかでしょうか。よろしくお願いいたします。 敬具

六月十九日

早田雅美

便箋七枚にぎつしりと書かれていた。一読して非常な関心と興味を持った。義宣に子があったというミステリーである。実は、義宣に子は二人いた。一人は継室多賀谷氏との間に慶長四年生まれの男子で同五年二歳にして没している。不思議なことに名がない。謎の一つであった。もう一人は

私説だが前室との間に天正十九年一月生まれの男子である。僧籍に入って長寿を全うしている。秀宣はこの二人のうちいずれかであろうかと考えたくなる。秀宣の秀は秀忠の秀か、宣は無論義宣の宣である。そうなれば系図に書かれてあるような秀忠との関係がうなずける。また、佐竹大膳は同時代に義宣の従兄弟に石塚大膳というのがいた。姓は勿論佐竹であるから佐竹大膳と言っても

誤りではない。ただこの人物は義宣より五歳下の天正三年生まれで生涯義宣の側近として元和二年四十二歳で秋田にて没している。私は以上のことを返事に書いて暫くは想いを四百年の昔に馳せた。

七、寺町の稜角

秋田市寺町は、うつかりすると一直線に並んでいるように思われるが、気を付けて見れば、階段状に四つの稜角が左へ左へと曲がつて南へ下って行っているのが分かる。北から寺町通りは二丁目小路で突き当たって行き止まり、下米町通りは二丁目小路を突き抜けるが伝法寺の稜角で突き当たって曲がる。そして専念寺の所で直角に曲がり、南進して四十間堀で曲がつて誓願寺門前町を通っ

て馬口旁町に出る。この階段状に稜角を直角に曲がって行くのは城郭造りの基本である。城の堀と櫓がいちばん分かりやすい（大坂城）。一直線では左右への見通しが不可能で稜角によってそれが解決される。この理屈は五稜郭が最もよい例かもしれない。そういうわけで、寺町は明らかに城郭の造り方なのである。佐竹義宣一大構想の窪田城総構の一端である。

八、秋藩物成考

(1) 年代別当高一覧

寛文四（一六六四）年	三十一万九千石（実高七十六万五千六百石）	貞享元（一六八四）年	三十四万石（実高八十一万六千石）
------------	----------------------	------------	------------------

享保十四（一七二九）年

三十四万一千石（実高八十一万八千四百石）

享保十六（一七三二）年

三十九万七千石（実高九十五万二千八百石）

寛政六（一七九四）年

三十一万二千石（実高七十四万八千八百石）

慶応元（一八六五）年

三十二万七千石（実高七十八万四千八百石）

この当高から一公三民法による実高を推定できる。すなわち、「当高 $\parallel$ 高 $\times$ 〇・二五 $\times$ 一〇 $\div$ 六」（総当高の場合のみ〇・二五を乗じる）。 $\therefore$ 「高 $\parallel$ 当高 $\div$ 〇・二五 $\times$ 〇・六」を適用すればよい。「当高 $\times$ 二・四」が手っ取り早い。なお、寛政六年と慶応元年はごまかしである。

(2) 当高の発祥

秋田藩独特の当高というものがなぜできたか。

佐竹氏入部当初の租税率は六つ成であった。当然そこに不公平が生じた。たとえば、田までの距離や道路状態に差があれば、たとえ同級等田でも労力に差が出る。それで田ごとの実情に添った免が導入された。しかし、免では全体の年貢率が不透明である。義宣は入部当初好評であった「六つ成」を厳守しなかった(ただし上限)。そこで「 $X \times 0.6$ 年貢」(何かに0.6を乗ずれば年貢になる)を考えねばならなくなった。このX(何か)が当高なのである(ただし免が六割以上だと当高が実高を超える)。こうして当高が生まれた($X \parallel$ 年貢 $\div 0.6$)。

(3) 「黒印御定書」から

一例として平鹿郡大塚村の宝永二(一六〇五)年「黒印御定書」を見てみることにしよう。

免五つ五歩成 高三百六拾九石八斗六升

免四つ五歩成 高七拾三石八斗壹升

免四つ成 高五拾四石一斗五升貳合

免三つ五歩成 高九拾四石八斗壹升八合

当高ノ四百八拾五石八斗壹合

此物成 貳百九拾壹石四斗八升壹合

但水損干損其年之見分次第たるべし

この書式は他町村とも藩政時代を通して不変である。これを見てすぐ感じることは、各免の高に当高がなくて合計に当高があり、高は合計されていないことである。尤も、秋田藩では物成は当高に六割を乗じるのであるから物成を記した「黒印御定書」では高の合計つまり村高は不要かもしれない。また、当高合計の「四百八拾五石八斗壹合」が八十九年後の寛政六(一七九四)年の当高「四百八拾八石一斗貳升貳合」とほとんど変わっていない。これはありえない。この年間は新田開

発が最も盛んに行われた時代である。この現象は宝永と寛政だけにみられたのではなく、前述の藩の総当高で寛政と慶応でも、貞享と享保でもみれる。一公三民之法については稿を改めねばならないが、一言付け足したい。この手法は善政の理想的な税法であるが、秋田藩はこれを実高隠しのからくりとして適用した。しかしこれは必ずしも不正とは言われない。幕府からの過酷な軍役・賦役等から逃れてそれが領民の生活を守るためであったとも考えられるからである。（土居輝雄著『秋藩御物成考―ある歴史作家の仮説―』から抜粋）

九、長沼宗教

天正十七（一五八九）年十月二十六日、伊達政宗と佐竹方の二階堂家の須賀川合戦である。二階

堂家の古い客人で長沼左衛門宗教という者がいた。彼は嫡男亦四郎宗綱と共に雨呼口の持ち場で戦っていたが、味方の力が衰え、もはや破られそうになったので、「これまでの恩義に報いて散ろう」と敵軍の中に突入して行った。長沼の郎等、鹿山喜右衛門、生田惣兵衛、志波左吉、中島弥兵衛、羽石刑部、同源左衛門、寺川治兵衛が続く。この長沼父子はなかなかの猛者で寄手の大將成実を討ち取ろうと成実の旗本めがけて攻め込んだが大勢の敵に押し返され一旦は柵の中に退いた。長沼宗教は、郎等の羽石刑部と寺川治兵衛を呼んで、「お前達は三男亀千代を連れて常陸に落ち延びよ。われらは屍を戦場に晒して二階堂家の恩義をあの世で報いようと思う」と言い含めてから、父子郎等七、八騎が轡を並べて再び敵の大軍の中に突入して行った。宗教の最期は見事であつ

た。馬上で一騎を切り落としてから馬も疲れて倒れると徒歩で切りまくって討死を遂げた。嫡男亦四郎も、群がる的に囲まれ六、七騎に傷を負わせて討死。郎等どもも敵を打ち倒し傷を負わせて奮戦し、主と共に一騎も残らず討死した。六歳の三男亀千代は長沼の家名を守るべく主従三騎で城から逃れ出た。途中、寺川治兵衛は敵の鉄砲に当たって戦死し、羽石刑部が扈従して常陸の佐竹に落ち延びた。この亀千代は父の遺言を守り立派に成人して長沼宗能と名乗り慶長七年、佐竹遷封の時に義宣に従って横手（秋田県横手市）に住し八年七月十九日二十歳で没しているが子孫は代々横手に居住した。

「拝啓 突然お手紙をさしあげる失礼をお許しください。先生の「常羽有情」常陽の巻四一二頁、長沼宗教の子孫です。実家の父が二十九代目、弟

が三十代目になります。昨日、実家の古い位牌の整理をしましたら、二十五代目宗慶が天保十年六月七日に亡くなった先代宗護の供養の際に、天正十七年の須賀川合戦で亡くなった宗教・宗綱、志波左吉たちの二百五十一回忌を執り行った時のもの（位牌のような形）がありました。先生の著書と照らし合わせ、小さな発見に感激し、失礼と思いながらお手紙を書いてしまいました。古い位牌とともに、来月はじめに春光寺様にお願ひして供養の後、焼却していただくことになる予定です。私は歴史に興味を持ち先祖の事を調べてみたくなりました。先生の著書の中に長沼家に関する記載があるものがございましたら、教えていただけないでしょうか。お忙しいなか、申し訳ございませんが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

敬具

十月十九日

K・I (旧姓 長沼)

土居輝雄様

十、天長地震

天長七（八三〇）年一月三日、秋田に大地震があった。「出羽地震」と呼ばれる。この地震の記録は「類聚国史」に書かれている。それを参考にして科学的検証の結果、M七・〇～七・五の強大なものであったらしい。「雄物川の流路について、かつては高清水丘陵の東側を通り北方で海に注いでいたのが、この天長地震で現在の様になったという説（大橋一九六四）があるが、地質学的（一九八三、八四年日本海中部地震秋田大学調査班）にも史学的（新野直吉秋田大学長談話）にも支持されない。」（『秋田県沿岸部における直下型

地震と活断層』福留高明著）両説捨て難し。

十一、常陸石塚家臣の帰農

佐竹国替え時、常陸石塚村の石塚家臣達は伏見の義宣の下にいる石塚大膳義辰の命令で石塚村にだいた残ることとなった。ほとんどが帰農だった。みな、石塚の殿に迷惑を掛けてはならぬとそれぞれの知行地の百姓とむすびついている関係から容易に帰農できたのである。石塚村は初代宗義から八代義辰まで二百余年間、百姓と強い主従関係にあった。これは後の徳川も咎めなかった。『石塚古来書之事』には帰農した石塚家臣十六名を列記し「右は石塚古来、佐竹様（石塚氏）より別知下され置候。然る処秋田へ御国替遊ばされ候に付、当所に罷り成……」とある。その十六名を名前だ

け列記すれば左記のとおりである。岡崎・大原（二家）・海老根・間田（二家）・萩谷・服部（二家）・大高・寺門・大畠・瀬谷・藤田・堀口・金子。石塚家の遺臣十六名が庄屋・年寄・組頭等となって郡奉行の指示に従い石塚村の行政に当たるようになっていた。「庄屋は各村一人で世襲することが多かったが庄屋の任務は年ごとに増大し、職務に専念すると農事がおろそかになったうえ、出費もかさみ貧困になって二、三代で他家に譲る場合も多かった。石塚村は例外で、初め十六人が月回りで庄屋を勤めたが、不都合なことが多いので二人制・四人制を経て、最後に一人に落ち着いた。そして石塚村だけは世襲ではなく交代制をとった。また村内に適任者がいないときは他村の庄屋が兼ねることもあり、これを兼帯庄屋といった。庄屋の職務は村政全般にわたったが、その主なる

ものは年貢の割り当てや納入、指銭（村費の収支）、諸調査、風俗の取り締まり、郡奉行からの通達伝達、諸報告書の作成などであった。組頭は与頭とも書き、庄屋の補佐役で、組ごとにおかれて組の責任者でもあった。各村に数名がおかれた」（『常北町史』より）。石塚にはこの他、川野辺・綿引・高村・篠原・館・山田・小林等も残った。

十二、正洞院は生きていた

「申し上げます。大石清忠殿が参りました。」

廊下で若い侍女の声がした。

「何用か承って参れ。」

楓がキイツとなって命じた。主従二人は顔を見合わせた。来たるべき時が来たという感じだった。「姫様、御短慮はなりませぬぞ。お心を大きく

持つて下され。」

「分かつておる。」

御台は落ち着いていた。それを見て楓は安心した。

やがて廊下から武者達の足音が聞こえてきた。

大石清忠を先頭に数人の重臣が正装で部屋に入つて来た。

「何事じゃ。無断で参るとは許しませぬぞ。」

「御上意でござります。お迎えに参上しました。」

「いずこへじゃ。」

「耕山寺へお供仕ります。」

(いよいよ幽閉だな。幽閉を受けるくらいなら……。)

と彼女はむらむらと燃えるものを感じた。

「耕山寺? 嫌じゃ。」

「お拒みなされば、ただごとでは相済みませぬ。」

「覚悟の上じゃ。」

言うや否や御台は懐剣を抜いて胸を突き刺した。血が飛び散った。アツと言う間もない出来事だった。

「姫様あつ。」

楓が絶叫して走り寄った。

「楓、済まぬな。」

「姫様。」

楓は御台の短慮を責めず慰めるように静かに言った。

「御無念のほど、お察し申し上げます。」

「早く止めを頼む。見苦しき死に様を見せとうない。」

「はい。」

楓は振り返って、茫然としている侍達に、「寄ってはなりませんぞ。止めは楓がいたします。だれ

も触れてはいかぬ」と睨み付け小太刀を抜いて御台の後ろに回った。

御台は苦しい息の下から気丈に言い放った。

「佐竹の者共、この先、幾百年も冥土で御家を見守り申そうぞ。さらば那須のおなごの最期を見るがよい。楓、頼みます。」

御台は笑みを浮かべて微かに振り向いた。その時、楓の止めの刃が一閃した。

佐竹義宣は自害した妻の亡骸を広沢山耕山寺において、けっして盛大とは言えない葬礼で葬った。法名は「正洞院殿明室珠光大姉」。この日、郭公がしきりに鳴いた。郭公の異名は呼子鳥。それは那須の母が愛しい娘を呼ぶ声であったか。

楓は葬儀の翌日、御台の墓前で自害し果てた。

(土居輝雄著『常羽有情』『山河の巻』より)

資料箱から「お姫様は生きていた」という一枚の便箋が出てきた。だれが書いたのか不明である。おそらく、封筒に住所・氏名はあったのだろうが、紛失してしまったのだ。思い出そうと努めたのだが不可能だった。

十月二十四日(金)、国文祭の期間中、久保田城址歴史案内ボランティアガイドが平日も行われたので出勤した。秋本番で天気もよく色づいた木々がさわやかだった。「お城の建物が見たい」と一人の女性が佐竹史料館を訪れた。本丸に案内の途中、「佐竹右京のお姫様は、死んだことになっているけど、実は生きていたんですよ」と、女性は話し出した。話を要約すると、お姫様とは佐竹義宣の正室、正洞院のことで、彼女は謎の死を遂げたことになっているが、死んだのではなく連れ去られたという。旅役者によって衣装箱に隠されて

太田のお城から連れ出され、千葉県の香取神宮の近くの神社に住んだ。代々その話が実家に伝わり、自分も従姉妹たちも、お姫様の末裔と信じてきた。その言い伝えが長い間気になっていたが、調べる術もなかった。近年インターネットが普及して、いろいろな情報を検索できるようになった。佐竹義宣が正洞院を太田の城に残して水戸に行っている間に、正洞院は謎の死を遂げたことになっていると知った。思わず「お姫様は死んではない。生きています！」と叫んでしまった。

関ヶ原後、佐竹義宣は水戸から秋田に国替え（慶長七年＝一六〇二）になり、正洞院の墓を常陸太田の耕山寺から移し、江戸と久保田に菩提寺の正洞院を建立し、悲運の彼女の霊を鄭重に弔った。秋田の正洞院は明治に廃寺になり、秋田大学の裏手に正洞院跡の標柱が立ち、その上にさや堂に納

められた正洞院の墓が静かに立っている。さらに登ると平田篤胤の墓がある。

お姫様の末裔と伝えられてきた女性は、伝承もこの先伝えて行けるか確信が持てない。秋田を訪れて、久保田のお城を見て、天徳寺に眠る義宣さんにこの伝承を報告して、自分の気持ちに一つの区切りを付けたいと思いついたという。たまたま、私がそこに居合わせ、その伝承に遭遇したわけだ。

ともかくにも筆者は遠来の女性に心よりお礼を申し述べたい。また、それに対応してくれたボランティアの会員にただただ敬意を表したい。

菊の香や 歴史取り持つ 縁かいな 鬼園

十三、太閤の葬儀

太閤の葬儀は慶長四年二月十八日に、かつてないほど盛大に執行された。その日、日没を待って葬列は伏見城を出発した。和洋曆対照表を見ると慶長四年二月十八日は洋曆の一五九九年三月十四日に当たる。試みにこの原稿を書いている平成二年の曆を見たが三月十四日は旧曆二月十八日となっている。このように両方が合致するのも珍しい。京都地方気象台に問い合わせると、その日の京都の日没は十八時三分であった。因みに同日の秋田の日没は十七時四十五分である。これは四百年前とほとんど変わらないだろうと専門家達は言っている。だから葬列出発は十八時を過ぎて間もなくである。春分に近い頃なので十八時三分酉の刻は現在の定時法による十八時から夜という

のとこの場合ほぼ一致する。葬列の道順は、城を出てから約三里の伏見街道を上り、七四条通で東へ折れて方広寺の大仏殿へと入るのであった。伏見街道は見物人でいっぱいだった。また、道筋の軒々には高張提灯が立てられ辻々には篝火が焚かれた。葬列は、先頭が何百の高張提灯と松明で夜空を焦がし、前警護の浅野幸長、黒田長政が先導して進み、次に棺の前と後に百五十を超える大名がそれぞれ数百の家臣を従えて付き従った。佐竹義宣もこの中に入った。秀頼や北政所・淀殿・侍女達や五大老・僧侶達は中央を歩いた。金銀珠玉を散りばめた豪華な棺を乗せた八方輿を担ぐ人数は二百人を越えていた。その両側に二百もの高張提灯が照らした。棺の周囲には堀尾吉晴、加藤清正、小早川秀秋が付き添った。その総数は五万を優に越しているだろう。月が出たのは戌下刻

(二十一時頃)を過ぎていた頃だがだれも気づかなかった。葬列の中で歩きながら佐竹義宣は夜空に輝く幻想の世界に酔っていた。何百いや千を越える沿道の高張提灯、篝火やそれより高い葬列の高張提灯や松明のゆらゆらと揺れる情景はこの世とは思われぬ美しく荘厳なものであった。筆者はこう書きながらふと秋田のねぶり流し(竿灯)を連想した。「金阿、常陸の者共にこれを見せたいのう。」と側の梅津茂右衛門に低声で言った。彼は水戸城下でこのような催をいつかは行ってみようと思っていた。(そうだ。父上の葬儀はこのようにしよう。)と彼は思い付いたが、常陸にいますまだ健在な父義重の顔がkindくと、これは縁起でもない苦笑した。暗い夜空を照り輝かす明かりのために月も星も見えないほどだった。十万も越えるであろう沿道の町衆や葬列の人はみな夜

の光の幻想に陶然としていた。この葬儀は予定のとおり二十九日まで滞りなく執り行われた。

十四、秀吉の奥州仕置

天正十八(一五九〇)年、秀吉は宇都宮を出発して白川口から会津へ入り、八月九日に黒川城に到着した。彼は小田原参陣をしなかった奥州の大崎義隆、葛西晴信、石川昭光、白川義親らの所領を没収した。そして先に伊達政宗から没収した会津・仙道は伊勢松坂の城主蒲生氏郷に、大崎と葛西領は木村吉清、清久に与えた。政宗は伊達・信夫・安達・田村の四郡が安堵されたが、その四郡も翌天正十九年に蒲生領となり、政宗は北方の岩出山に追いやられる。秀吉は奥羽の検知の徹底的な実施令を浅野長??に下して八月十二日に会津

黒川城をを發った。しかし實際は指出（檢知を受ける側が出す申告）の方法を採ったり、反当たりの貫文への換算をしたりして、現実を踏まえた柔軟な態度で当たるよう注意している。尤も、そのようにしなければ広大な奥羽の地をわずかの期間で檢地することは不可能であった。にもかかわらず、奥州ではこの後、大崎・葛西旧臣の反乱、檢地への一揆、新体制に対する反発などが起こり、完全に平定するまでには暫く時日が掛かった。九戸の乱がその最たるものである。秀吉が黒川城を發った後、安東実季は秋田へ帰った。比内郡が返還されたものの難題があった。津輕為信が浅利頼平の後盾となって仲裁に出、浅利旧領の比内に頼平を配置して安東麾下に入るべしということだった。これを容認すれば浅利は安東麾下であっても實際は旧領復活である。そして津輕に通じていれ

ば、安東はいつ裏切られるか分かったものではない。家中は猛反対した。だが、思慮深い重臣の「津輕の後ろには前田利家、浅野長吉が付いておりますぞ。あるいはもつと上の魂胆かもしれませぬ。これが御政道にございます。ここは、堪えて津輕の仲裁を受けましょう」の進言で浅利頼平を比内に置くこととした。

十五、橘氏の秋田統治

文治五（一一八九）年九月二十日、源頼朝は平泉において奥州征伐に参加した武士団に対して論功行賞を行った。頼朝の側近である橘公業は秋田郡の内、次の十二地域の地頭職を与えられた。湯河（井川町）、沢内（秋田市金足・下新城・旭川）、湊（秋田市土崎）、楊田（秋田市柳田）、豊卷（秋

田市豊岩)、毛毛佐田(秋田市新屋・浜田・豊岩字石田坂)、伊森(男鹿市井ノ森)、桃河(男鹿市羽立)、吉田(男鹿市羽立)、滝河(男鹿市北浦)、磯分(男鹿市北浦)、大島(男鹿市台島)。ただし、当初は一族・代官が移住して治めた。この例は他のほとんどの鎌倉御家人と同様である。この橘氏は橘諸兄を始祖とするいわゆる源平藤橘四姓の一つ、橘氏の本宗の家系ではなく末流で、敏達天皇から出た家系で橘姓を拝領し公家となる。純友の乱(九三九〜四一)にその鎮圧を命ぜられて伊予警護使になった遠保が伊予国宇和郡(愛媛県宇和島市、東・西・南・北宇和郡)を与えられ、ここを本領としていた。数代を経て公業の祖父が鳥羽院から「公」の一字を賜って公光とを名乗り、以後代々名前に「公」の字を用いるようになった。平清盛の子、知盛の家人となっていた父の公長は

源平合戦中に平家に見切りをつけて鎌倉に下り頼朝の御家人となり鎌倉に居住した。公業は文治六(一一九〇)年正月の大河兼任反乱の時、由利維平と共に男鹿・百三段などで戦うが敗れている。乱鎮圧後もその所領は変わらなかったが、公業自身は従前どおり鎌倉に居住して秋田統治は一族や代官に当たらせた。彼は十二人の子供のうち三人に秋田郡の領地を譲渡した。女の葉上に承元四(一二一〇)年、湯河・沢内・湊を、九番目の子の公義には寛喜二(一二三〇)年、桃川・吉田を、十一番目の子の公員には嘉禎四(一二三八)年に残りの柳田・豊巻・百三段・滝川・磯分・大島をそれぞれ譲った。しかし間もなく公員が秋田郡のほとんどを領有することとなる。嘉禎二(一二三六)年、橘氏の本領である伊予国宇和郡が没収されてその代わりに肥前国長嶋庄が与えら

れ本領は九州に移った。したがって公員の代になると領地経営の主力は九州に注がれるようになった。出羽国秋田の方は得宗北条家の勢力の浸透に押され、しだいに放棄せざるをえなくなっていく。そして北条氏の滅亡により豪族の割拠となり南北朝期を経てやがて安東氏の進入となるのである。

十六、大河兼任の乱

文治五（一一八九）年七月十九日、源頼朝は二十八万四千の軍勢で藤原泰衡を追討するため鎌倉を出発する。八月二十一日、泰衡は平泉の館を焼いて奥地へ走る。同月二十二日、頼朝、平泉に入る。九月三日、泰衡は比内郡贄の柵で郎従の河田次郎に殺される。同月十一日、頼朝は厨川に入

り、泰衡の残党を降伏させる。奥州藤原氏の滅亡。同月二十三日、頼朝は平泉に戻り、同地で将兵の論功行賞を行う。同月二十四日、頼朝は鎌倉へ向け平泉を発つ。十二月六日、頼朝は朝廷に泰衡追討の賞に代えて陸奥・出羽二ヶ国を支配下に置くことを要求する。出羽国秋田郡北部から米代川流域にかけて支配していた大河兼任は頼朝の奥州征伐には主家の藤原氏から離れこれに味方し御家人となった。その本拠は現在の秋田県南秋田郡五城目町大川と推定される。兼任はこれまでの地の地頭職に任命される。だが、頼朝の地頭制度に相容れないものがあつた。藤原百年の政治に慣れていた大河はじめ帰属した藤原旧家臣達は不安と動揺を抱いた。とりわけ出羽国の者達に顕著であつた。藤原時代には半ば独立領主のように扱われていたからである。そしてそれは同じ地頭に任

命された頼朝直参御家人と彼等外様御家人の確執となった。大河兼任も隣り合わせの地頭になった橘氏に監視されるような屈辱を感じた。そして鎌倉が山北の農料を陸奥三郡（磐井・伊沢・江刺）へ、さらに秋田郡の米穀を和賀・稗貫へ各自が送る「農料搬出」の決定をすると、ついに同年の十二月に入ってこれに反対する出羽国の農民は各地で反乱を起こした。当然、兼任はこの機に乗じて奥羽の旧藤原家臣達を促して文治六年正月、決起した。彼は弟の新田三郎、二藤次忠季、嫡子の鶴太郎、二男の於幾内次郎を従い七千の軍勢を率い、多賀国府を根拠地として鎌倉まで攻め入ろうと秋田城方面に進軍した。途中、八郎潟の水の張った湖上で水が割れて五千人が溺死したが、男鹿の大社山で橘公業を敗走させ、百三段で由利維平を討ち取り、北上して津軽に転戦し宇佐美実政を殺

した。二月上旬、再び南下して山北から奥羽山脈を越えて平泉まで進出した。そこはかつての主家藤原氏の府城の地であった。兼任の感慨は如何ばかりであつたろう。その頃には兼任の下に集まる勢力は一万を数えた。多賀国府にいた留守職も兼任に同調した。頼朝は千葉常胤を海道の将、比企能員を山道の将、足利義兼を追討使として派遣した。両軍は栗原・一迫・衣川で合戦して兼任軍が大敗し四散した。兼任はただ一人山中を逃避行し三月十日、栗原寺（宮城県栗原郡栗駒町）に立ち回ったところで樵夫達に怪しまれ、数十人の者に斧などで打ち殺された。もともとは八郎潟漁業や日本海交易に従事していた大河氏だが頼朝の新政権によって先祖代々の地は蹂躪され滅亡していった。しかし、その反抗の理由たるや堂々たる大義であつた。しかも、反乱の規模といい、戦跡とい

い、実に壮大なものである。まさに秋田県の歴史
上ナンバーワンの人物であった。

十七、市民文化講座「佐竹義宣と石田三成」

アンケート結果 明徳館中央図書館

平成三十年十月三日（水）

参加者六十二 回答者五十六

年齢 二十代…〇 三十代…〇

四十代…一 五十代…一

六十代…二十 七十代…二十三

八十代…七 九十代…一

無回答…三

性別 男…三十四 女…二十一

(1) 今回の講座の内容は何でご覧になりましたか
(複数回答あり)。

① 広報あきた…四十七 ② 秋田魁新報…二

③ ポスター…〇 ④ 明徳館内のチラシ…八

⑤ 市立図書館ホームページ…〇 ⑥ その他…二

(2) 講座はいかがでしたか。

① 良かった…四十九 ② 普通…六

③ 良くなかった…〇 ④ 無回答…一

(3) 今回の講座や今後の明徳館の企画について、ご
感想・ご意見・ご要望がありましたらお聞かせく
ださい。

○ 佐竹と石田三成の関係がとても興味深く拝聴し
ました。

○ 日本史をテーマにした講座はとても興味深いの
で、また企画して欲しい。

○ 先生のお話はよく分かりました。続いて著書も
読んでみたいです。

○ 知っていることではあったが、改めて歴史の面

白さを感じた。土居先生のますますのご健勝をお祈りします。

○九十代も間近な先生、ご立派です。堂々とした講義、嬉しかったです。

○土居先生の講座は大変面白く、今回はまるでドラマを見ているような感じで、実際歴史上にあったことを大変興味深く拝聴いたしました。ありがとうございました。

○秋田に関わる歴史、沢山企画してください。いつも楽しいお話ありがとうございます。

○佐竹義宣と石田三成の関係を詳しく説明して頂き、より深く勉強できました。

○本日は大変分かりやすい講座でした。さすがは研究を深くされた土居先生です。今後も先生の講座をお願いします。

○土居先生の講座をまた開いてください。

○土居先生の講座をシリーズ化して欲しいです。資料のサイズA4でグッドです。ファイルが容易、再読にもグッドです。

○佐竹義宣の関わりがよくわかりました。豊臣天下の大名六番目の力だったとは初めて知りました。由緒ある佐竹氏、秋田を發展させてくれたのは有難いことです。秋田（地元）を知れるこのような企画を今後お願いします。

このような賛辞、嬉しい限りです。昨夜は興奮のあまり、ついに睡眠剤を服用しました。が、効果はありませんでした。ただ、欲を言えば皆さん、私の話術に関心ありませんでしたね。どんな作家でも主題・構想・叙述の中では叙述を褒められたら内心は喜んでいらっしゃる。勿論、だれも言うてはいませんが。それと同じですよ。

助詞一つ 朝を迎ふる 己かな

鬼園

左より 前・中・鶴ヶ 剣岳

宝蔵・奥に 旭・御衣

笹森は 角度違えば 見えねども

これぞ太平 九連峰よ

十八、太平山九連峰

① 太平山（奥岳） 一一七〇・五メートル

② 旭岳 一一四〇メートル

③ 剣岳 一〇五四メートル

④ 笹森 一〇四五メートル

⑤ 宝蔵岳 一〇三五メートル

⑥ 鶴ヶ岳 一〇〇二メートル

⑦ 御衣岳 一〇〇〇メートル

⑧ 中岳 九六一・七メートル

⑨ 前岳 七七四メートル

丑寅に 春の太平 ねまりけり

残雪の 太平山は 神々し

さっぱりと 太平山の 夏姿

丑寅に 鎮座します 太平山

幾千年も 見守りけりな

鬼園

〔秋田湾百考〕より

―久保田町広小路から眺めて―

十九、暗殺に憶う十戒

―幕末暗殺諸伝より―

- 一、飲酒すべからず
- 二、馳走は腹八部目に
- 三、座す時は正座に
- 四、虫の鳴く音、鳥の羽音に耳を傾けよ
- 五、寢床の下に刀を置くがよい
- 六、道は中央を歩くべし
- 七、人込みに入らず
- 八、小路は歩くべからず
- 九、怪しき者には左腰に付くべし
- 十、柄袋は解けやす

蛇足

●夜の外出は控えよ。

●逃げるが勝ち。

●油断は大敵。

●安易に訪問者を入れるべからず。

●念仏の如くいつも心のなかで「用心、用心」と唱べし。

以上、臆病と言われても恥じるべからず。

臆病は慎重の裏返し

参考

逃げの名人 桂小五郎

勝 海舟

逃げの権化 徳川慶喜

二十、渋江内膳の最期

かくて今福の城兵は寡兵のこととてよく戦ったが、巳の刻（午前十時頃）にはすべての柵が突破され城間近の片原町（福島区片町）まで退いてしまった。義宣は（ここは敵の要地で味方には害所だ。少し退いて陣を構えねばならぬ）と判断して、敵の構えた柵を破り取って堀切の内に構え、一番に伊達盛重、二番に石塚義辰、三番に戸村義国、小野善繼（後の小野岡）と、三段に備えて守らしめた。なお、先手は渋江で義宣は伊達の後ろにあった。内膳は己の勝ち戦に奢っていた。それはけっして内膳の働きに因るものではなかった。敵に倍する兵力ではだれでも勝てた。しかも内膳の采配らしいものはなかった。彼はそれに気づかないくらい酔っていた。（算用方の俺だつてこのように

できるのだ。どうだ、見直したか。）彼は譜代の連中の幕や旗を睨み付けた。そして義宣の命令に躊躇した。しかし大塚九郎兵衛の言った「この機に乗じて疾駆して大坂城に入ろう。さもなくば片原町の人家を焼いてそこをわれらが陣としよう」の誘いには同意しなかった。内膳はなおここにとどまって足輕に二時ばかり鉄砲を撃たせた。その頃、幕府の三使が来て義宣と一緒に首実検をして大いにその功を賞していた。一方、鳴野でも上杉軍の猛攻に城方は柵を守り切れず多数の死傷者を出しながら後退していった。このような戦況を見て城方では天満口を固めていた青木一重、速水守之、真野頼包、伊東長実、中島氏種、野々村雅春、堀田勝嘉ら七手組の武将達と場内から大野治長、竹田永翁ら合計約一万二千余が正午頃鳴野方面へ、また、木村重成、後藤又兵衛らは約四千余

の兵を率いてほぼ同じ頃城内から今福方面へ急遽救援に駆けつけた。城方の木村重成は今福口が破れ、寄手が片原町まで押し込んで来たとの報に、大急ぎで具足を着け馬を引かせたが、あまりの急なこととして自分の屋敷へ立ち寄ることもできず、家の前を「者ども、今福へ駆けつけえ」と叫びながら駆け抜け、片原町へは単騎で駆けけるほどであった。後藤又兵衛も具足を着ける暇もなかった。城内の櫓から戦況を見守もっていた彼は、容易ならぬ味方の苦戦に救助すべく大急ぎで屋敷へ帰ったが具足を着ける時間もないので家来に具足を持たせて今福へ向かって駆け出した。途中、天満橋付近は鳴野の救援に繰り出す大野治長の手勢が充満していて、思うように前へ進めなかった。しょうがないので彼はそこで具足を身に着けた。未の刻、大阪方は鉄砲を撃ち槍を振るって突進し来

た。新手であり大勢であってその勢いにはかなわなかった。朝からの戦いに疲れきっていた佐竹隊はまず足軽どもが雪崩を打って敗走した。(しまった。深入りし過ぎたか。)内膳は悔いたが既に遅かった。とたんに譜代どもの嘲笑している顔が次々と現れてきた。本能的に彼は殿して退こうとした。大塚九郎兵衛それを見て「貴殿、なんですか、退く野か。軍卒どもの敗走はやむをえまい。はっは」と嘲笑した。内膳は怒り、「さらば踏みとどまって切死せむ」と取って返して、怒号しながら自ら槍を振るい、軍兵を激励しながら大勢の中へ駆け入って奮戦した。(そうだ。俺は国元を出す時すでに討死の覚悟をしていたではないか。)この時、大和川へ船を出した後藤基次隊が横合いから鉄砲を撃ってきた。一弾が洪江の鞍の前輪から具足を撃ち抜いて胴に命中した。彼はたまらず馬

から落ちた。起き上がろうとしたところへ大勢の敵が寄ってきた。瞬間、彼の前に川井伊勢が現れた。アッと息を呑んで一言発しようとした時、数本の槍がかれを串刺しにした。木村長門守の名もない従兵が首級を挙げた。洪江家臣戸祭十兵衛は首一つ討ち取っていたが政光討死と聞いて、「この首、だれに見せんや」と叫んで投げ捨て敵陣に駆け入って討死した。同じく家臣の来栖修理、鈴木正左衛門、黒川伝右衛門、浜野平左衛門、駒野目六兵衛らは奮戦して討死した。戸祭は那須牢人、来栖・鈴木・浜野は真壁牢人、黒川は小野寺牢人、駒野目は江戸牢人であった。

第十章

未筆

跋

